



# 案山子



2012年夏号

新潟大学文芸部

目次

■お題作品『わ』

わ	<b>sincot9</b>	<b>3</b>
生存圏直径六天文単位—軍事郵便—	外衛 眞希	4
デザイアリング（前編）	秋月 夢人	5

■一般作品

弾丸	<b>Puney Loran Seapon</b>	<b>7</b>
幻夜	一城 有里	8
偽物の夏休み	水谷	9
烏	七分の六	10
POSTMAN	木材	11
神楽～春～	東 かおり	13
神神～夏～		14
セキュリティ・ブランケット	祐輝	15
キズ	灰白湯	16

奥付

# お題作品「わ」

わ (著 : sincot9)

「よし後輩、今日はヴィシュヌについて話そうか」

「まずのっけからついていけないんですが」

「説明しよう。ヴィシュヌとはヒンドゥー教における神の名で、世界の平穏を守る役割を持つ」

「どうしてヒンドゥー教が出てきたのか、まずはそこを説明してくれませんか？」

「肌の青い容姿端麗な男性として描かれる事が多く、ガルダと呼ばれる神鳥に乗り、四本の腕にそれぞれものを持っているという。蓮華、法螺貝、こん棒、そしてチャクラムだな」

「.....」

「このチャクラムがすごくてだな。名を『スダルシャナ』というんだが、切れ味もさることながら毒を中和したり、悪魔や魔神の力をおさえる力もあるんだ。まさに神の武器だな」

「帰って良いですか？」

「そう邪険にするな。さらにこのスダルシャナ、神話の中で人間として書かれてもいるんだ。インドの神話では道具を人に見立てる事が良くあるそうだが、これは日本でもおなじみの『擬人化』の先駆けと言ってもいい」

「先輩が博学なのは十二分に分かりましたから、もう帰って良いですか？」

「そうか、後輩はチャクラムを知らないから拗ねているんだな。チャクラムって言うのは.....」

「知ってますよ！ 平たい輪っか状の武器で、指で回転させて投げる事で外側の刃で相手を切る武器ですよ！」

「ほう、よく知ってるじゃないか。ちなみにチャクラムはよく円錐状のターバンに輪投げのようにしてはめる事で持ち運びを楽にしていたんだぞ」

「そ、そうなんですか。知らなかった」

「なんだ、興味あるんじゃないか」

「ハッ、そ、そうではなくて.....」

「それではこのままシヴァ神の説明に入ろうか。シヴァもインド神話の神の一柱で、世界を破壊し、その後に恵みをもたらすという二面性を持つ神だ。日本でも七福神の一柱『大黒天』という形で知られているな。このような破壊と再生という二面性はアステカ神話のテスカトリポカや、身近なところだとジブリ映画『もののけ姫』のシシ神などにも.....」

「だ、か、ら！ なんでさっきから全然知らない神様の話をえんえんと続けているんですか！」

「後輩よ、人は太古の昔から考え続けてきたのさ。『どうやって世界は生まれたのか』ということね。広大な世界に存在するちっぽけな人間。そんな自分たちが、それをはぐくんできた世界が、どうやって生まれたのか。自らのアイデンティティを確立させようと、幾千もの月日をかけて考えてきたんだ。それを考察するという行為は、為にはなっても無駄にはならない。だから私は神話が好きだ。そして出来れば、後輩にもこの楽しさを知って貰いたいと思っている」

「先輩.....」

「ま、これこそまさに『丸く収まる』ってやつだな」

「最後の一言さえ無ければですけどね」

あとがき

どうも、sincot9です。「わ」ということで、輪っかを武器に戦う神様のお話です。楽しんで頂けたでしょうか。

「わ」というお題を聞いたとき、まず真っ先に「輪」、次に「和」が出てきました。和をもって貴しとなす、という十七条の憲法を思い出しました。この文章とは全く関係有りませんが。

本当はもっとシリアスなものを書こうと思ったのですが、時間が無くこのような駄文でお茶を濁す事になってしまいました。ひとえに自分の力不足です。暇なときに仕上げられたらと思っています。

自分の性質上、こういう会話劇の方が向いているような気がします。今度本文十五ページまるまる会話とかやってみたいです。書いてる方も読んでもスタミナ切れ必死ですが。

それでは、機会がありましたら次の作品でお会いしましょう。

生存圏直径六天文単位 ——軍事郵便——

(著：外衛眞希)

十八年前に襲来した、言葉はもちろん、まったく意思の疎通のできない宇宙船級生体兵器。それを主敵とし、合衆国宇宙軍中心の宇宙平和維持軍を前身に創設されたのが国連航宙軍だった。しかしその創設時には既に木星が陥ち、宇宙平和維持軍の虎の子だった機動艦隊は木星戦の損害から立ち直れず今も再建中であり、人類は小惑星帯に継ぎはぎだらけの防衛線を敷いて、抵抗を続けている。

「——合成グルテン用プラント五基、食品コンテナ三十個と建材コンテナ二十個、それから……軍事郵便一袋お？」

大半の機器の電源が落とされているC I C(戦闘指揮所)にいた私は、輸送船団の物資のリストに記された、宇宙時代に相応しくないその名を見て、素っ頓狂な声を上げてしまった。

火星静止軌道上の軍用宇宙港に停泊している、火星軌道艦隊所属フラワー級フリゲート〈アイリス・ジャポニカ〉は、地球から火星経由で小惑星帯へ向かう輸送船団の、火星周回軌道への進入から離脱するまでの護衛を担当することになっている。

頭からドッキング装置に突っ込んだ形で係留されている〈アイリス・ジャポニカ〉は、その出港準備を完成させつつあった。

正面から見ると六角形をした先細りの艦体は白く塗装され、観測機器の納められた半球状の先端だけが黄色い。折りたたまれて収容状態にある太陽光発電パネルは艦体に比して小さい。レーザー砲球殻は三つ、Y字に配置されている。回転して重力を発生させる居住区画は艦体中央後部寄りにあり、戦闘中以外、大半の乗組員はこの居住区画にいる。もっとも、停泊中は回転を止めている。

まだ建造されて一年経っていない、新造ピカピカの艦だった。

その艦長である日本人女性、濱西唯・国連航宙軍少佐も、まだ任官三年目でしかないピカピカの新米だった。

せいぜい中尉であろう筈の年齢ですでに佐官となり、同期の中で昇進レースのトップを独走しているのには無論理由がある。前任地で戦果を挙げて目立ってしまったからだ。

単純であるが、それゆえ当人にとっては迷惑以外の何物でもなく、おかげで迂闊に里帰りできなくなってしまっていた。

私が妙な声を上げたことに興味を惹かれたのか、副長のケインズ中尉——顔の出来はたいして良くない——が脇から覗き込んできた。階級差からすればとんでもない行為だが、周りには誰もいないので、とりあえず私はそれについては何も言わない。ただ、ピンをしないがためにブルゾンタイプの制服から飛び出したネクタイが視界を覆ったことについては、軽く咳払いした。

彼は士官学校の同期であり、親友だ。私が英雄扱いされることになった前任地でも一緒に戦った仲だ。

彼はリストを眺め、最後の最後に申し訳程度に記されている軍事郵便の文字を見つけ、溜息をついた。

「ダイレクトメールも全部Eメールになっちゃった時代に郵便かよ。その一袋のためにどれだけ推進剤を使うんだ」

彼は私にそう言った。小惑星帯までは軍用ネットワークの一部を利用することでメールを送ることは可能となっている。それでも数日かかるが、何ヶ月もかけて郵便を送るよりはずっといいし、料金だって桁違いだ。

「郵便を含めて、荷物の三分の一は火星(ここ)で降ろしていくのか。まったく、変な寄り道せずに重力ターンを利用すれば推進剤をほとんど使わずに済むだろうに」

「降ろした分のスペースにまた色々積み込むんだってさ。どこも船が足りないんだよ」

そう言って私はリストが表示された端末をロックして艦長席に置き、各部の最終チェックに向かった。

「いくつか気になる情報が流れているんだ」

出港してから五時間。火星周回軌道最外縁での速度調節を終え、あと六時間で船団と合流する頃。ケインズが自分の端末を手に、手狭な艦長公室へとやってきた。

相変わらず制服からネクタイがはみ出ている。もっとも、視界を遮らない限り、私は何も言う気はない。どうせ慣例に従えば、合流三時間前に戦闘配置が発令されて全員が宇宙服に着替えることになるのだ。第一、言って聞くような奴じゃない。

私は彼が来た時、ちょうど報告書を書き終えて、収納に仕舞っていた、おやつ代わりにレーション(戦闘糧食)ビスケットを密かに齧っていた。自室を持つ士官の数少ない楽しみの一つを邪魔されて、私は少々不機嫌になった。

「私のおやつを邪魔するほど重要な情報なんだろうね？」

「お前のおやつを邪魔するだけの価値があるのは、テスト問題の流出くらいだろ」

そう言いながら彼は応接セットの椅子に腰かける。

居住区画が回転して重力を生み出しているからこそできる行動だ。回転スピードは少々きついが、訓練と薬品で三半規管を押さえつけているから支障はない。

「じゃあ食いながら聞く」

「構いやしないが、暇になる度にレーションのビスケットを齧るのは止めとけ。太るぞ」

ただでさえレーションはカロリー高めなんだから、と彼は付け加えて、私の端末に幾つかのファイルを送る。

「まず三ヶ月前に、小惑星帯C戦域軍のL集団が敵と交戦して、何匹か取り逃がしてる。もちろん内惑星方面に」

この男、さらっととんでもないことを言っているが、いつもの事だった。司令部は小惑星帯を絶対防衛線などと称しているが、結局の所、カバーするには艦艇が足りない。その上、敵の根拠地である木星の公転に合わせて戦力の焦点を移動させている。C戦域軍の担当戦区はちょうどその反対側で、手薄だ。

「それと、二ヶ月前にA戦域軍も突破されて——」

「そいつらは確か、先月のうちに追撃艦隊に運悪く捕捉されて殲滅されたはずだよ」

「ところが、だ。そのときに撃破されたのは六匹だ。だが最初、艦隊は八匹を捕捉していた。どうやら漏れがあったらしい。都合が悪い事を隠したがるのは古今東西変わらないな」

話が長くなりそうなので、私が代わりに話をまとめてやる。

「つまり、襲撃の可能性があると言いたいわけだ。時期的にも、その突破した奴らが火星に差し掛かる頃だし」

「運が悪ければ、だがな」

「電子雑誌の占いでは今週の私は『優』だ」

「成績評価みたいな占いだな」

「士官学校の学内誌だし」

「お前まだそんなの読めるのか」

「購読無料だし」

「けちんぼめ。とりあえず俺は変更することを勧めるが」

「雑誌を？」

「船団の予定を、だ」

ケインズは眉間を抑えて軽く溜息をつく。私がボケた意味は理解しているらしい。私は、やんわりとだが拒否したのだ。

「索敵プローブを飛ばして警戒網を張るのはどうだ？」

「従来のガチガチの監視網があるし、プローブを飛ばすにしても金がかかる。艦隊主計に文句を言われるよ」

「けちんぼはお前だけじゃないようだな。……ここでもう一つ情報がある」

ケインズはそう言うと、もう一つファイルを送ってきた。

「……火星警戒網の再構築に関して？」

「一部衛星が旧式化してるから、該当箇所を一斉入れ替えするんだと。ちょうど予定航路上だ」

「それを早く言えよ！」

この男はいつもそうだ。格好つけのつもりなのか、大事な情報を後から出してくる。だが、いくらなんでもこれほど重要な情報がケインズのところにあって私のところに無いのは不自然に思えた。



「なんでこんなデータを持ってるの」

「友人が監視司令部にいるんだ。監視局が独自にやってる話らしい」

「こんな大事な事をか……？ まあいいや」

非効率と縄張り争いは官僚組織の常、と実体験から諦めることにして、私は口調を変えて言う

。

「副長、プローブの準備を。索敵網の構築と投入タイミングは任せる。それから、全艦戦闘配置」

「了解」

船団との合流は滞りなく行われた。プローブによる嚴重な索敵網を不審に思った船団司令から不安そうなメッセージが届いたが、濱西は問題ないと返信した。

そのまま丸一日航行しながら内側の軌道へと移行、宇宙港にドッキングする予定だった。船団構成は大型輸送船四隻と中型輸送船二隻。小惑星帯の一つの基地群を、丸々半年は回せるだけの物資を運んでいる。だが結局のところ半年に過ぎないし、何より補給を必要とする基地群は一つだけではない。小惑星帯だけでかなりの数に上る。その維持には、以前までの国家単位の国防とは桁違いの能力を必要とする。

太陽を中心として、小惑星帯の輪に囲まれた直径およそ六天文単位の円形の生存圏。それは太陽系のほんの中心部分に過ぎない。だがそれでも人類には広すぎる。

彼女は士官学校入校以来、それを常々実感していた。

だって現にこうして、防衛線の内側でも襲撃に備えなければならないじゃないか。

私はイオン飲料のビニールボトルを、叩きつけるように艦長席のホルダーに置くと、席を立てて狭苦しい廊下に出た。

戦闘配置中は居住区画の回転は停止されて無重力状態のため、適当な手すりに掴まって姿勢を保つ。ヘルメットこそ外しているが、宇宙服を着用しているため身動きがとりにくい。無重力下での行動があまり得意でない私には正直つらい。

船団は荷の積み下ろし中で、〈アイリス・ジャポニカ〉はその間、軌道警備を実施している。

警戒網の再構築の件は結局明るみに出て、監視局やら司令部やらは大騒ぎしているらしい。おかげで嫌味な艦隊主計にプローブの事でうだうだ言われずに済んでいる。

「疲れているようだな」

通りかかったケインズが話しかけてくる。先ほど異常が生じた個所を見てきたらしい。

「まあね。状態は？」

「二番レーザー砲のレーザー発振器六基のうち三つが故障。戦闘には使えないな。通信レーザーとしてなら大丈夫だ」

「最近飯だけじゃなくて部品の品質も落ちてきているのかな」

「今日び、メーカーを信じる奴なんて居ないよ」

量産を重視したがための品質の低下。精密機器の塊である宇宙船にはあってはならないことのはずなのに。

「じゃあ、どうせ明日には母港で補給を受けなきゃだから、ついでに交換できるよう要請——」  
その瞬間、けたたましく警報が鳴った。

「どうした！」

C I Cに駆け込んですぐに問う。当直士官がスクリーンを指さしながら言う。

「哨戒艦が探知！ 外惑星方面から飛来する未確認物体、数、三！ 猛スピードで火星に向かってきます！」

「加速しているか？」

「いえ、むしろ減速しています。このままだと火星の重力圏に引っかかって軌道に乗ります。ちょうど監視網が切れている部分です」

「友軍じゃないんだな」

「航路局に確認とりました。予定にはありません」

「このままの場合の予測軌道、すぐに出せ。ケインズ副長！」

「ハッ」

「司令部に通信。本艦は迎撃行動に移行する、以上」

「三体それぞれが別のコースをとるようです。一体は火星北極周辺を通過。一体は赤道。もう一体はその中間です」

「司令部より通達、北極側の一体を〈ワイバーン1〉、赤道付近の一体を同〈2〉、中間のもう一体を同〈3〉と呼称」

「レーダー電波の反射形から、敵はすべて巡洋艦級と判断。砲戦重視のタイプですね」

私はスクリーンに映し出された予想軌道を見て唸る。

「北極コースはいい。戦列艦戦隊が捕捉するはずだから。第十戦隊なら問題ない」

「第十戦隊って、今はお前の指導教官が指揮してるんだっけか」

ケインズが口を挟んでくる。部下の前でもあるし、もう少し言葉遣いを改めてほしいが、今はその時ではない。

「あの人なら大丈夫だよ。問題は残った二つだけど……宇宙港に最も近いのは、赤道コースか」

「今すぐに動けば、宇宙港が敵の射程に入る前に攻撃できる」

「よし、司令部にそう伝えて。戦術士官、攻撃プランを」

武器管制全般を取り仕切る少尉——合衆国宇宙軍以来の叩き上げで、特例で士官に昇進した筋金入りの軍人——は頷くと、すぐにいくつかのプランを提示した。

「——このコースでいけば、攻撃できるチャンスが一番多くなります。ただその分、後方から追いかける形となるので、交戦地点が宇宙港に近くなりますが……」

「確実に仕留めたい。こちらが接触する前に他艦が仕留めればそれでもよし、だ。これでいこう

。副長、ただちに攻撃ポジションに移動する。全艦加速準備、高G警報」

「了解」

火星の周囲はだいぶ慌ただしくなっている。

南半球側へ退避する民間船や、攻撃位置につこうとする戦闘艦で軌道はひしめき合い、ニアミス同然の軌道を取らざるを得ない船が続出している。

〈アイリス・ジャポニカ〉はその混乱に巻き込まれることなく加速、飛翔を続けていた。

核融合炉の出力が上昇し、推進剤が力強く——それこそ下手な宇宙船相手なら穴を開けられるほど——吐き出される。

「最適攻撃位置まであと二十分」

戦術士官が報告した。私は席に座ったまま静かに頷き返す。

加速中であるため、全員が耐Gシートを兼ねる自らの座席に着席し、宇宙服のみならず、ヘルメットも着用していた。会話はすべてマイクとヘッドホンを通すことになる。

私はどうにも、このヘルメットが好きになれなかった。息苦しいだけではなく、あらゆる世界から隔絶される様な、あるいは現実感が削がれる様な、そんな気がするのだ。

戦術士官が落ち着いた声で、だが強く言った。

「敵、減速率低下！」

私は眉を顰めながら指示を出す。

「予想軌道、修正して」

「このまま速度を殺さずに重力圏に突っ込んだら、軌道に乗りきらずにカーブしてどっかすっ飛んでいくぞ」

ケインズが副長席に座りながら、閉鎖回線で話しかけてきた。

私は少し考え込んでから予想を述べた。

「きっとコースを内寄りに変えてくる。一気に内軌道に切り込む気だ」

「このままスイングバイして地球に向かう、というのは？」

「答えが分かっている事を人に聞くなよ」

お互いに顔を見合わせ、口元だけで軽く笑う。

「まあ、地球に行くにはちと角度が違うな」

再び報告が入る。

「敵、進路変更」

「データへの反映、急げ」

シャトルのような艦に無理矢理レーザー砲を搭載した宇宙船を、国連航宙軍は『特設砲艇(ガ

ンボート)』と呼称している。母艦の支援下で行動し、拠点の防衛や重要度の低い戦区の哨戒に用いられる軽艦艇だ。もっとも、重要度が低い戦区と言っても、元が使い勝手の良い多目的艇であるため、武装の有無はさておき、ほぼ全ての宙域で目にすることができる。

〈HF11〉もそのうちの一艇であり、火星軌道艦隊所属の母艦を拠点に哨戒活動をしていた。そして、火星赤道付近を通過する敵に対してもっとも迅速に対応できる位置を航行していた。

さらに艇長は勇気に不足の無い男だった。であるならば、迎撃行動に移るのはその義務からいっても当然であると言えた。

航宙軍兵装でもっとも火力の高い兵器であるミサイル——国連航宙軍が使用するミサイルは基本的に直撃を狙わず、破片で敵を穿つ——を特設砲艇は搭載していないので、〈HF11〉は接近してレーザー砲撃を行うしかない。

接近するように軌道を修正し、充電を開始し、緊急冷却材の準備を整える。だが、その進路後方には〈アイリス・ジャポニカ〉が迫っている。

「〈HF11〉、まもなく本艦前方進路上に出ます」

「邪魔だな」

ケインズがポツリと呟く。私にだけ聞こえるように閉鎖回線だ。だが多かれ少なかれ状況の分かる乗組員なら、同様の感情を抱いているだろう。

戦術士官が見解を述べる。

「〈HF11〉は同航砲戦を企図しているようです。敵の死角を占位しています。このまま推移すると、こちらと〈HF11〉が接触するか、ミサイル破片の爆散同心円が〈HF11〉まで巻き込みます。フリゲートであれば装甲が分厚いですから耐えられますが、〈HF11〉ではお話になりません。どうしますか？」

時間は無い。

私は正しいかどうかとも内心では分からないまま指示を出す。

「やむを得ない。左舷スラスターで進路を修正、〈ワイバーン2〉の真後ろにつけろ」

「接敵が遅れますが」

ケインズが一応形だけ、という口調で言う。

「やむを得ない、といった筈だ」

「了解。戦術士官、砲戦を主体にするよう、プラン修正」

「ハッ」

〈HF11〉の射撃管制装置は〈ワイバーン2〉を捉えていたが、重力による歪みや機器の微かなズレなどまでは完全には補正できない。そのため戦術教本通りに、まずレーザー砲の出力を落とし、機械への負担を軽減してから連続試射で敵の位置を探り、データを収集した。それに基づき、射撃諸元を修正。

そして戦闘出力で一気にエネルギーを叩き付けた。紫外光に属するその光は人の目に見えることはない。

長くは照射できない。先に機械にガタがくる。

数秒間の照射、その後すぐに冷却材を投入し、緊急冷却。熱を吸収し放出された冷却材がガスとなって〈HF11〉を取り巻く。

サーモグラフィーは〈2〉にレーザーが着弾したことを指し示していたが、だが〈2〉は速度を落とさない。

そしてその横から、異なる脅威が迫っていることに彼らは気づいていない。

それは突然だった。

〈ワイバーン3〉が軌道に乗る瞬間に切り離れた生体ミサイルは火星中のレーダーが捉えていたが、切り離れた瞬間にちょうどよく展開していた艦隊主力の集中砲火により〈3〉が文字通り爆散した為、その破片の一部としか見られていなかった。

だがそれは爆散の勢いに煽られ、本来の狙いから逸れて赤道軌道に接近し、付近の目標——〈HF11〉——を捉えると、それに向けて軌道を修正し続けた。

〈HF11〉もそれを捉えていたが、やはり大部分の友軍と同じく破片の一部とか考えておらず、間もなく仕留められるであろう目の前の獲物に集中していた。

彼らにとって不運だったのは、レーザー砲を〈2〉に指向するため、〈2〉と反対方向である生体ミサイルに、無防備な艦尾を向けていたことだろう。

その破壊力は、特設砲艇を軽く吹き飛ばすだけのものを持っていた。

突如メインスクリーン上でちょっとした光が輝き、一瞬で消えた。だが私はその光がどのようなものであるか、すぐに理解した。

「〈HF11〉、爆散！」

オペレーターの報告に、戦術士官が何とか狼狽の色を見せずに聞き返す。

「どういうことだ！〈2〉の砲撃か」

「いえ、後方からの攻撃のようです！おそらく生体ミサイル！」

「馬鹿な……っ」

戦術士官は予想だにしない事態に呻いた。

私もまったく同じ気持ちだった。

見落としていた、という自責の念に駆られる。もし見分けることができていれば、レーザー砲で迎撃してやれたのに。

「艦長！」

さらなる報告が、深い心の澁みから私を引き剥がす。

「このままでは〈HF11〉の残骸破片が本艦の進路上に！」

「〈ワイバーン2〉、加速！内軌道へさらに進路修正！」

明らかに状況は悪化の一途を辿っている。内軌道に切り込まれたら多くの施設が危険に曝される。護衛を担当している船団も、荷の積み下ろし中で動きが取れない筈だ。

「加速を継続。緊急ブースターにも点火。引き離されるな！」

「無茶な！」

ケインズが席から立ち上がりかねない勢いで叫ぶ。

「レーザー砲で破片群を広域照射をしたら、いるかもしれない生存者まで焼き払うことになる！まして破片に突っ込んだらただじゃ済まない！下手したらこの艦も——っ」

その見解は全く正しい。私は頭が急激に冷えていくのを感じた。冷静さを取り戻す、という意味ではない。どちらかといえば、覚悟を決めたという感じだった。

「撃破による破片はミサイル弾頭のそれと比べて相対速度は遅い。装甲の設計条件からして耐えられる」

「理論値にすぎない！机上の空論だぞ……っ」

ケインズが今度は閉鎖回線で再考を求めてくる。だが私は、いや、おそらく当のケインズだって分かっている。戦闘艦一隻と、船団及び宇宙港施設とでは、その戦略上の価値は桁違いだという事を。ましてや〈アイリス・ジャポニカ〉はフリゲート。はっきり言って、消耗品だ。

そう考えれば、端から選択肢など無い。

「たまにはメーカー保証も信じてやるさ」

閉鎖回線を通じて私はそう彼に告げ、復唱を求める。

「副長、復唱！」

ケインズは少しだけ慚然とした表情をした後、苦笑した。

「……加速を継続。緊急ブースターにも点火、了解！」

急加速用の緊急ブースターが点火され、一気に体を座席に押し付けられる。敵の加速次第だが、十分、敵が施設への攻撃に出る前にこちらの攻撃圏内に収められるだろう。〈HF11〉の破片で〈アイリス・ジャポニカ〉が沈まなければの話、だが。

「まもなく破片群と接触！」

スクリーンに一瞬キラキラと光る群れが映る。

不信心者の私でさえ、一瞬何かに縋りたくなる。

神様仏様。どうかこの破片に耐えて、あのクソツタレを吹き飛ばさせて下さい！

だが目は背けない。背けたら最後、もし兵に見られていたら、ずっと何か言われ続ける事になる。海を征く時代から宇宙時代に移り変わっても、そこは変わらない。

「3、2、1」

席を握る手に力が入る。

「…今！」

そして舌を噛みそうになるほどの強い衝撃。

大きく揺さぶられ、頭の中が数瞬真っ白になる。

視界が明滅する。

それでも必死に歯を食いしばって、悲鳴は噛み殺した。

だが衝撃は一回だけではなかった。何回か繰り返し同じように耐え、心臓が痛いほど跳ね上がるの感じ、それから真っ先に声を上げる。

「被害を報告しろ！」

「機関異常なし！ 現在オートモードで軌道修正中！」

「人員被害も無し」

「二番砲塔が直撃されました！」

ケインズが指示を出す。

「どうせ故障中だ、空気を抜いて延焼を防止しておけばいい」

「装甲板の一部が剥離しつつあります。内部への影響は無し」

「空気漏出、確認されず」

私はケインズの方を向き、軽くウインクする。

「……ほら、大丈夫だった」

「まったく、死ぬかと思ったぜ」

お互いに安堵の苦笑を浮かべる。私は勢い込んで言う。

「〈HF11〉も沈んでしまったし、邪魔者もないからミサイル戦に切り替えよう。さあ、今度はこっちの番だ！」

「いや、敵さんも何か意図してやったわけじゃないと思うが」

ケインズはそう言って苦笑した。さっきから苦笑いばかりだが、それがこの男の癖であるらしい。

〈アイリス・ジャポニカ〉は破片との衝突の為に若干速度を削がれたが、それでもブースターのおかげもあって、〈2〉を予定していた攻撃距離内に入れつつある。

「ミサイル一番から四番、炸裂指向調整」

「諸元入力よし。まもなく発射予定位置」

想定よりも攻撃開始が遅れ、港湾施設や船団が指呼の距離にあるのを見てケインズがポツリと言う。

「チキンレースじみてきたな」

「奴は突っ込めばそれでもいいが、こちらは奴を止めなきゃならない。レースにしてはフェアじゃないね」

そう言って溜息をつくとき、オペレーターが叫んだ。

「敵、何らかの物体を分離！ こちらに向かってきます！」

「生体ミサイルだ。レーザー砲照準。射程に入り次第迎撃開始。……ミサイル発射用意」

次から次へと指示を出していく。スクリーン上に映し出される軌道図で光点同士がどんどん近づいていく。僅かに艦体が揺れ、九つ在るうち四つのミサイル発射口が開く。

「発射位置まで、5、4、3」

ゆっくり息を吸う。

「2、1――」

鋭く声を上げる。

「撃え！」

「発射！」

火器管制員が発射スイッチを押す。

スクリーンに艦から離れていくミサイルが映し出される。

電磁力で射出するため、衝撃は無い。

「ミサイル飛行中」

「〈2〉が回頭中。こちらに頭を向けるようです」

「レーザーで迎撃するつもりだな」

ケインズが言う。いかにもつまらなそうな声だ。

「そりゃそうだろうよ。施設が奴の射程に入る前にミサイルの方が先に当たるんだから」

私もつまらなそうに答える。そう、敵のこの行動は、分かっていたことだ。

宇宙空間のミサイルなどというものは、その気になれば惑星間だって攻撃できる。だがそれでは当たらない。だから搭載できる推進剤の量に見合った射程距離が定められている。

でも、今は射程ぎりぎりではない。むしろ至近距離だ。無論理由はある。これまでの戦闘データから、敵がミサイルに対して十中八九レーザーで迎撃してくることは常識とされている。ミサイルではレーザーの回避など望めない。その為、対処法の一つとして、推進剤をガス状に散布して対レーザー遮蔽幕を形成する機能がある。だが推進剤を使う以上、その分射程が短くなる。だからこんな距離で撃ったのだ。

「敵レーザー照射確認。……遮蔽幕に阻まれたようです」

「信管作動まで残り十秒」

それまで真っ直ぐに突っ込んでいたミサイルが、同時に四方に向きを変え、そして再び〈2〉を向いて、包み込むような位置を取る。もう結果は分かり切っていた。体から一気に力が抜ける。破片群が〈2〉を完全に引き裂くのを確認して、私は全艦に通達した。

「戦闘配置解除」

ひとまず戦闘が終了し、〈アイリス・ジャポニカ〉は軌道上の燃料ステーション——ステーション全体がタンクで出来ている様な代物——にドッキングした。もともと明日のうちに補給を受ける予定だったため、推進剤の残量は危険なレベルにまで減っていたのだ。

私は燃料補給に関する指示を出し終わると、それまでずっと艦長席のホルダーにあったイオン飲料を飲み干した。戦闘の緊張からくる異常なほどの喉の渇きに、ようやく気付いたのだ。

今はC I Cには私以外には二人しかいない。戦闘配置を解除したのもあるが、補給はステーションが大体の事してくれるので、手空き全員に休息を取らせることにしたからだった。

「このあとは直ぐにドックへ直行、かな？」

ケインズがC I Cの出入り口から顔を出して言った。彼には司令部と母港へ損傷を報告して、見積もりを出してもらうよう頼んでいた。

「向こうは何て？」



「ドックの方は、完全に修理するには二ヶ月要ると言ってきている。修理待ちの船で一杯なんだと」

「司令部は？」

「任務解除、帰港ののち修理せよ、だってさ。船団護衛は別の艦にやらせると」

「まあ、そうだろうな」

そう言って私は彼から端末に送られた通信文と見積書を見る。

するとケインズは私に何やら一枚の紙を投げて寄越した。

「何これ？」

一枚、ではなく、一通の封筒だった。日本の消印と、国連航宙軍の消印の両方が押してある。

「船団の輸送品目に軍事郵便があったろう？ あの中にお前宛のがあったんだと」

「一体何処の誰が私に……ん？」

「どうした？」

「いや、差出人の名前に見覚えがなくてさ」

そう言って私は封を開け、中を読む。——何とも言えない気分になる。ちゃんと覚えていてくれたのか、と嬉しい気持ちにもなるが、一方で故郷との距離に失望もする。

「ダイレクトメールか？」

「高校時代の友人の、母親から。……事故で死んだって。これ、ひと月前の葬式の案内が入ってるよ」

「……そうか」

「進路とかの悩みもちゃんと聞いてくれたし、勉強も私より出来て、頭もよく回って、私なんかよりずっと綺麗な子だった。士官学校に入れたのも半分この子のお陰だったのに」

「……いい奴だったんだな」

「うん、いい奴だった。そっか、死んじゃったか」

少しの間、私は黙り込んでじっと考え込む。ケインズもそれに付き合っって何も言わない。そして私は言う。

「しばらく指揮代行してもらえる？」

「え？」

「そろそろ、一度地球に帰るよ。……お墓参りしなきゃ。火星と地球の往復で二ヶ月。プラス一週間くらい」

「ちゃんと許可を取った上で、な」

「……うん」

「ご友人が安らかに眠らんことを」

「……ありがと」

【あとがき】

はじめてお目にかかります、外衛眞希です。

長編はどう考えてもモチベーションが続かないので、短編にして、それぞれの世界観を共有させようかな、なんて思っています。というわけでこの世界観を流用する時は、数年後のお話になります。

お題は「わ」ということで、「輪」あるいは「環」と変換して、惑星軌道をぐるぐる……みたいなの。なんかすいません（汗）

デザイアリング（前編）

（著：秋月 夢人）

私はいつも通り自分のベッドの上で目を覚ました。

ベッドから起き上がって、なんとなく部屋の中を見渡す。薄い黄色のカーテン、焦げ茶色のクローゼット、どこにでもあるような黒い椅子と机。

どれも昨夜床に就いた時と、何一つ変わっているところはない。それを確認して安心する。

私は変わって欲しくない、いや、変わってはいけないと思っている。カーテンの色が変わっているような些細なことでも、想像しただけで寒気が走る。

彼女だってそう言っていた。

——毎日同じことを繰り返して退屈じゃないか、とよく聞かれるわ。

彼女は夕食を作りながら、世間話でもするような調子で淡々と話していた。私にはそのことがやけに印象に残っている。

そして次の言葉が、私の人生の方向性を定めたのだ。

——あたしは、何か物が変化してしまうこと自体が怖いのだ。

——特に、今ある平穏な日常とかね。

私がこの言葉を聞いたのは、確か小学六年生ぐらいの時だったと思う。

あの時、どうして彼女が血の繋がっていない他人である私の世話をしてくれたのか、幼いなりに理解したのだ。

私と同じだから。

私もまた変化を嫌う人間だったのだ。あの頃から。

そして私はなによりも、彼女と共通したところを持てたことが嬉しかった。

たった一人でこの十六夜館にやってきた私が、唯一心を開いた女性。

いつもシミ一つないエプロンと白いカチューシャを身に付け、そつなく家事をこなす、そんな彼女が好きだった。

彼女は会った時からずっと私の憧れの人だった。十年経った今でもその想いは変わらない。

だからこそ私はいまだに「彼女」としか呼べないのだろうか。おもむろに彼女の下の名前をそつと呟く。

「忍さん……」

いつ考えても、なんだか妙に馴れ馴れしい気がしてしまうのだ。傍目で見ると、年の離れた仲の良い姉妹に見えたらしいから、別に不自然ではない筈なのに。

むしろ、両親を早くに亡くしたことを踏まえて、お母さんと呼んでもよかったのかもしれない。あんなに温かく接してくれた人は、先にも後にも彼女だけだった。

けれども、私の記憶の中にある彼女と、お母さんという単語を合わせてもなぜかしくりこないのだ。

私は何か相談したいことがあると、真っ先に彼女に会いにいった。それこそ母親に向かって打

ち明ける気持ちで、話したと思う。彼女が母親の代わりになってくれたことは間違いないのだ。

私は暫く「母親」という言葉を心の中で弄んでいたが、ふいに彼女のことを考えるのが、虚しくなった。

私はいまだに彼女の影を追い続けている。

私は、いまだに一年前のことが受け入れられずにいるのだ。

彼女はもういないのに。私が何を考えようとも、彼女が答えてくれることは永遠にないのに。

彼女は死んでしまった。

あの日彼女はいつものように買い物に出かけ、そして、居眠り運転のトラックにはねられたのだという。

私には性質の悪い冗談にしか聞こえなかった。彼女の遺体を見るまで、信じられなかった。いや、信じたくなかったのだろう。

彼女の死に顔は、まるで眠っているように安らかなものだった。そして、彼女は今の私のように目を開けて、ベッドから起き上がってもおかしくないほど、穏やかな表情を浮かべていた。

私は彼女が死んでから気づいたことがある。当たり前なことだが、私は彼女になることはできない。

どんなに真似しようとも、出来上がるのは彼女の振りをした私だった。

彼女の模倣をすること自体が、虚しい。自分でも分かっているにも関わらず、気が付けば彼女の姿をなぞっている。

私がこれからやろうとしていることも、生前の彼女が毎朝欠かさずやっていたことだった。

ベッドから降り、カーテンを畳んで、窓を全開にする。窓を開けると同時に、朝日と共にひんやりとした空気が私を包んだ。

まだ三月半ばということもあり、寝間着のままでは少々肌寒い。

私は一回身震いをして、両手をあわせ、目を閉じた。

――あたしのおばちゃんが言っていたこと、なのだけどね。

彼女が亡くなる直前に、私はこの毎朝のお祈りについて尋ねたことがある。

――私達の心の中には、幸運を司る神様がいるらしいの。

私は彼女がどんな表情をしていたかよく覚えていない。そこだけ妙にぼやけてしまっている。

――この幸運の神様は、普段からお祈りしていると、たまに一つだけ願いを叶えてくれるらしいわ。

私は彼女がどんなことを願っているのか、知りたかった。どんなに私が尋ねても、彼女は決して答えてくれはしなかったけれど。

彼女は朝日に向かってどんな願い事をしていたのだろう。少なくとも今私が願っていることではない筈だ。

彼女にもう一度会いたい。

身支度を整えて、私は食堂へ向かう。もちろん朝食を作るためである。

時刻は午前七時を少し過ぎていた。この館の住人は朝が遅い。この時間帯だと、私以外に起きている人はまずいない。

食堂のドアを開けると、案の定、誰もいなかった。

テーブルの上に昨日の朝刊が放置されており、より一層人のいないわびしさを強調している。

私はここに来ると、まずはコーヒーを淹れることにしている。この館では、コーヒーサイフォンを使うので、手間がかかるのだ。

コーヒーができるまで、しておかなくてはいけないことがある。

私は台所の脇にある勝手口から、サンダルを履いて館の外へ足を踏み出す。

庭に植えられた木々のおいが、鼻を突いた。どの木々も新芽がぽつりぽつりと生えている。

あと少しすれば、春の花々が咲き乱れ、もっとこの庭は華やかになるだろう。

植木達を見ながら、館の裏手へ回ると、小さな小屋が見えてくる。そこが、私の目指す場所だった。

私はこの小屋を「工房」と呼んでいる。

小屋には明かりが灯っていた。あの人がいるサインである。

私はドアをノックして、相手の反応を待った。一分程経つと部屋の中からゴソゴソという音がして、ドアが開いた。

中から出てきたのは、白髪を頭の後ろで束ね、作務衣を纏った中年男性だった。目が赤くなっているせいで、不機嫌そうに見えるが、工房に入るといつもこんなふうになるので、私は気にしていない。

「おはようございます。叔父様」

叔父の返事はいつも素っ気ない。

「ああ、おはよう」

叔父こと浅野洋一郎は、目を瞬きながら大きなあくびをした。徹夜、だったのだろう。

「朝食はいかがなさいますか？」

「今日は量を多めにしてくれ、夜通し作業で、腹ペコだ」

「かしこまりました」

私はお辞儀をして、館へ戻ろうとした。

「早いものだな、あの日からもう一年経つのか」

私が思わず振り返っても、叔父は不機嫌な表情を崩さない。

「正確には、明後日でちょうど一年になります」

「細かいことにこだわるところは、忍そっくりだな」

叔父はそう言うと、不意に表情を和らげて、話を続けた。

「今日、誠一の学校の先生が来るそうだ、それなりにもてなしてやってくれ」

私は甥に当たる男子高校生の顔を頭の中に浮かべた。学校の先生が来るということは、あの噂は本当なのだろうか。

「・・・無理なさらないで下さいね」

「俺がいつ無理をしたって？」

私の考えを見透かしたような口ぶりだった。叔父にはどうやら、私の考えていることが分かっているらしい。

「心配性のおまえのことだ。あの根も葉もない噂を聞いて、妄想を膨らませていたのだろう」  
凶星である。

叔父は黙り込んだ私を見て、クックツと喉の奥で笑った。

「警察や世間がどんなふうに思っているかなんて、俺にはどうでもいいことさ。たとえ人殺しと言われたとしてもね」

私はドキリ、とした。そして、昨日押しかけてきた刑事の言葉がよみがえる。

――犯行時刻に、現場周辺をうろつくあなたの姿を大勢の人が見ているのですよ。

叔父は刑事のどんな言葉にも動じず、沈黙を守り通した。

肯定も否定もしない。ある意味、一番疑われる態度だと思う。

私は当然叔父が犯人でないこと願っている。

彼女を失ってから、波風だった日常がようやく元に戻りつつある私にとって、今叔父を失うことは、苦痛でしかないのだ。

叔父がどんなことをしようとも、私は沈黙を守り続ける。せっかく得た大切なものが壊れてしまうから。

もう私は家族を失いたくない。

\*

妙な噂は、館の近くで起きた事件がきっかけだった。

私なりに事件の概要をまとめると、こんなふうになるだろう。

一か月前の金曜日、午後十一時頃のことである。地元の警察署に、三人の女性が血相を変えて駆け込んできた。

受付の警官が思わず身を引くほど、三人は興奮していた。

興奮の具合からただ事ではない、と感じた受付の警官は、当直勤務に当たっていた刑事課の警官を呼び出し、二人で話を聞くことにした。

三人の女性の話を要約すると、こうだ。

三人は市内の某小学校に子供を通わせている母親である。遊びに出かけた私達の小学三年生の娘もしくは、息子がこんな時間になっても帰ってこない。手当たり次第心当たりを探してみたが、どうしても見つからないので、警察に助けを求めに来たらしい。

刑事課の警官は、子供三人が同時に行方を晦ましたことに、胸騒ぎを覚えた。実は今月に入って、行方不明になった子供達の住む地区で、変質者が出没していたからである。

母親達の話を知ると、子供達はお互い仲の良い友達で、いつも一緒に遊んでいたという。

一人も帰ってこないことを鑑みると、三人とも何らかのトラブルに遭遇した可能性が高い。

警察から直ちに関係各所へ連絡がなされ、翌朝から失踪した子供達が開始された。

この時点では、私達が住まう十六夜館は完全なる傍観者だった。

しかし、子供達が館の周りをうろついているところを見た、という目撃証言によって事情は一変する。

最初、館に住んでいる私達は、目撃者として機能することを期待されていた。ところが、別の目撃証言によって、事態は一層ややこしくなる。

つい二週間前に、子供達と叔父がいっしょにいるところを見た、という目撃証言が報告されたのである。

警察は叔父をしつこく尋問した。叔父が持っている肩書きのお蔭で、警察署に連れて行かれることはなかったものの、あからさまに犯人扱いした刑事もいたらしい。

この頃から、私はテレビ局や週刊誌の取材に悩まされるようになった。叔父の世界的に有名な彫刻家という肩書きは、警察では通用しても、マスコミには効果がないのである。

どこで尾鱈が付いたのか、マスコミ連中の話は誤解と偏見に満ちあふれており、不愉快この上ない。

特に私がうんざりしたのは、甥の誠一君のことまで持ち出してきたことだ。

現在誠一君は学校に行っていない。

学校に行かなくなった原因は、いまだに分かっていないらしい。

叔父は息子が学校でいじめを受けたのでは、と疑っていた。今日、学校の先生が来るのは、誠一君のことを相談するためだろう。

近頃私は、仕事が忙しくなくなると、こんなことばかり考えている。

不安だからだろうか。

それとも、日常が壊れることを恐れているのか。

食堂の椅子に座って、取り留めもないことを考える。

何分ぐらい安心していただろう。私は廊下からこちらに向かってくる足音で我に返った。

噂をすればなんとやら、食堂のドアを開けて入ってきたのは、当の誠一君本人だった。

肩にかかりそうなほど長く伸びた髪を掻き揚げながら、目をこする。

どうやらたった今起床したのだろう。

「おはようございます。誠一様。お食事はいかがなさいますか」

私は椅子から立ち上がり、台所へ向かった。

「今何時？」

誠一君の起床時間はバラバラで、日によって遅くなったり、早くなったりする。

「ちょうど午前十時になったばかりですわ」

「ふうん、中途半端な時間に起きちゃったな。昼飯まで寝てればよかった」

昔と比べると、ずいぶん誠一君は痩せた、と思う。やはり学校に行かないことで、ストレスが溜まっているのだろうか。

「じゃあ、コーヒーだけ貰おうかな」

誠一君はそう言いながら、今日の朝刊を覗き込んだ。私はコーヒーサイフォンをセットする。

「ねえ、メイド長、この記事についてどう思う」

誠一君は私のことをふざけて「メイド長」と呼ぶ。私一人しかメイドがいないにも関わらず、である。

「ひどい記事だと思います。特に叔父様を揶揄して書いてある部分は、読むに堪えません」

「やっぱり真面目だね、メイド長は。僕なんか、的外れすぎて吹き出しそうになるけど」

誠一君はページをめくりながら、まるで世間話をするような感じで話を続ける。

「やっぱり、親父が犯人なのかな？ この失踪事件」

「それはありえません」

私が強い口調で否定すると、誠一君はいたずらっぽく微笑んだ。

「その根拠は？」

「私の勘です。根拠なんてありません」

私がそう言い切ると、誠一君は感心したような表情を浮かべて、頷いた。

「メイド長の勘はよく当たるからな。まあ、僕も本気で親父がやったとは思っていないよ」

コーヒーの香ばしい匂いが漂ってくる。そろそろ出来上がりそうだ。

「親父は彫刻以外のことになると、途端に無関心になるからね。極端なことを言えば、親父は動くものを嫌う、ただの静物愛好家さ」

私は食器棚から取り出しておいたカップに、出来立てのコーヒーを注いだ。受け皿の上にカップを置いて、お盆に載せるとき、コーヒー特有の匂いか私を包む。

私は香しい匂いを嗅ぎながら、コーヒーカップとスプーンを誠一君の前に差し出した。

すぐに口をつけると思いきや、誠一君はカップに満たされたコーヒーをじっと見つめていた。

誠一君の顔が真剣そのものなので、声を掛けにくい。なにか気に喰わないことでもあったのだろうか。

私が声掛けようかどうか、迷っている時、誠一君が唐突に語りだした。

「世界で一番変化するものってなんだと思う？」

誠一君はスプーンでコーヒーを掻き混ぜながら、私のほうを見る。

どうやら私が答えなくてははいけないらしい。

「ずいぶん話が飛躍しますね。私は・・・そうですね、人間にしておきましょうか」

そう答えてから、私は誠一君の顔をじっと見つめた。

誠一君は納得したような、あるいは満足したような表情を浮かべている。

「メイド長ならそう言うと思ったよ。なんて言っても、僕を含めて十六夜館の住人はみんな人嫌いだしね」

私もここまで人嫌いの人間が集まるとは、正直思っていなかった。

「メイド長、周りの人間がみんな人形ならいいのなあって考えたことない？」

「.....わかりません」

「この年になって親父が何で彫刻にハマったか、分かったような気がしてさ。石膏も木材も当然だけど人じゃない。親父はそこに魅かれたのだと、僕は思うね。人だと、相手に合わせて行動しなくてはならないでしょ。そもそも極度の人嫌いの親父が、他人といっしょにまともに働ける訳がないしね」



ようやくカップを取り、誠一君はコーヒーに口をつけた。すでにコーヒーは冷え切っている。  
「誠一君は人嫌いなのかしら？」  
私は話が始まってから、ずっと持っていた疑問を誠一君にぶつけた。  
誠一君はコーヒーを一気に飲み干して、こう答えた。

「ああ、人間なんて大嫌いだよ」

〈続〉

今回執筆の際お世話になった楽曲  
岸田教団&The明星ロケッツ様  
アルバム「.JP」

一般作品

弾丸 (著 : Puney Loran Seapon)

深夜零時。廃ビルの屋上で、スコープを覗きながら俺はライフルの引き金を引く。引いた瞬間、弾丸がおよそ三百メートル離れた所にいた、今回のターゲットであるどっかの会社の社長の頭に命中し、倒れた。

「まっ、こんなもんか……」

サイレンサーをつけているので、音は出ない。社長の周りにいたガードマン達の表情から察するに、おそらく自分が撃ったということには気づいていないようだ。

ターゲットが死んだことを確認した俺は、手早くライフルを仕舞って廃ビルを立ち去る。そして、用意してもらった逃走用の車に乗り込んだ。中には、運転手と、スキンヘッドのおっさんが一人。

俺の顔で仕事がうまくいったことが分かったのか、おっさんはニヤリと笑う。

「ご苦労さん。ほいこれ、今回の報酬」

そう言って渡されたのはやや大きめの紙封筒。中には札束が、ひい、ふう、みい……………五つ。札束の厚さから察するに、五百万といったところか。

「ん、確かに受け取った」

「それにしても、いい仕事するねえ」

「まあ、プロですから」

「次もよろしく頼むよ？ ところでさ……」

なんて感じでおっさんは雑談を始める。適当に相槌打ったりしていると、俺の住んでいるアパートの前で車は止まった。

「それじゃ、おやすみなさい」

おっさんのその声に、手を振るだけで答えた俺は、速足で自分の部屋へと向かった。

築数十年の、耐震性の危うそうな感じのボロアパートのうえ、部屋も六畳一間の狭苦しい和室に、俺は住んでいる。

ここまでの経緯から分かるように、俺はプロの殺し屋だ。どっかの国のマフィアに雇われていて、さっき車に乗っていたおっさんは俺の上司。ちなみに殺し屋というのは、おそらく誰もがご存知の通り、人を殺す職業である。一步間違えば、サツに捕まって長いことブタ箱に放り込まれかねない、危ない職だ。それでも年収は、そこらの人たちの倍は稼いでいると思う。なので、住もうと思えば、もう少し良いアパートに住めるのだが……人を殺して得たお金で贅沢をするのは、ちょっと気が引ける。

あー、もっとマシな仕事がしたい。

こんなことをこと考える俺が、どうして殺し屋なんかしているのか。愚痴らずにはいられないので、退屈だとは思いますが、聞いてくれると嬉しい。

今から十数年前のことだ。俺は長く、辛い受験勉強を耐え抜き、目標であった某難関国公立大学に入学した。しかし、入学下はいいが、受験勉強からの解放感から遊びに遊びまくり、結果として二回も留年をするはめになってしまった。なんとか卒業できるだけの単位は取れそうになったので就活を始めたものの、大学時代に遊びに遊んで、ろくすっぽ勉強しなかったやつを採用してくれる企業なんかあるわけもなく、「さすがにヤバいかも」と思っていたところに声をかけてきたのが、あの車にいたおっさんだ。当時、俺は射撃サークルに所属しており、そのサークルで出場した大会で俺の腕前を見て、運命を感じたのだとか。まあ確かに優勝したが、気持ち悪いことこの上ない。

あの時、丁重に断っておくべきだったと後悔している。

しかし、このまま路頭に迷うのも嫌だった俺は、二つ返事で殺し屋への就職を決めた。決めてしまった。

くそう、なんて馬鹿だったんだ俺は。……なーんて今でも時々思うが、もう遅い。俺はこうしてプロの殺し屋として働き、それで飯を食っている。今更この職から足を洗ったところで、犯した罪は消えないのだ。

「……」

俺は、自分の右手を見る。ついさっき、ライフルの引き金を引いた手だ。まだ、引き金を引いた感触が残っている。この仕事をはじめて、もう十年以上経つが、未だにこの感触は慣れない。

「寝るか……」

そう呟いて俺は、部屋の隅に畳んで置いてある布団を敷き始めた。

仕事が無いと、殺し屋というのも暇なもので、大抵俺は寝るか、本を読むかで暇を潰す。

だが、今日は珍しくテレビを見ていた。普段はせいぜい見たとしても、ニュース番組くらいのものだが、今見ているのはサイエンスマジックショー。新聞のテレビ欄が目にとまり、面白そうだったから見てみた。だが、正直なところ、大して面白くない。

しかし、テレビというのは恐ろしいもので、たとえ大して面白くない番組であっても、ついだらだらと見続けてしまう。丁度、今の俺のように。

「……本でも読むか」

さすがにだらだらとテレビを見続けるのも問題だろうと思った俺は、光の屈折を利用したマジックが終わったところでテレビを消した。

「自殺志願者？」

突然アパートにやってきた上司のおっさんの話を聞いて、俺はそんな台詞を発した。テーブルの上には、まだ若そうな青年の写った写真が1枚。おっさんの話をまとめると、以下の通り。

竹岡 隆という、どっかの会社のサラリーマンが人生に疲れたとかなんとかで、自殺したい。

単純明快すぎて、まとめるまでもなかったのではないかと甚だ疑問がでるくらい短い文章になってしまった。全く、頭が痛くなりそうだ。人の人生の終わり方に文句を言うつもりはないが、自殺なら一人でしてくれと言いたい。

「まあ、それができないから依頼してきたんだろ？」

おっさんは笑いながらそう言う。何も、殺し屋に頼らなくてもいいだろうに。だって銃弾が体を貫くんだぞ？ 絶対痛いだろ。俺なら躊躇するけどな。

と、というか、そいつにライフルを向ける奴の身にもなってくれ。

「でもなあ、報酬はなんと、二千万だぞ？ 破格の依頼じゃないか？」

アホウ。そんな大金、あっても使わん。それに、そういう問題じゃない。自殺の手伝いなんか、俺はしたくないんだ。

「そんなこと言わずに、頼んだよ。もうどうせ何人も殺しているんだし、今更自殺の手伝いなんかしたところで、死んでから行くところは変わらないだろう？」

そう言うとおっさんは、文句を言おうと口を開きかけた俺を無視して帰ってしまった。

仕方ない。やるか……嫌だけど。

そして二週間後、俺は、竹岡さんの住んでいるマンションから八百メートルほど離れたところにあるビルの屋上からライフルを構えていた。竹岡さんたっての希望で、午後三時頃に竹岡さんが友人を呼ぶので、その人の目の前で殺してほしいそうだ。

なぜかは知らんが。

「……来たか」

どうやら、竹岡さんの友人が来たようだ。顎鬚の立派な人である。その人を見て、俺はため息をつく。

「可哀そうにな……これから、友人が目の前で殺されるなんて」

不本意ではあるが、俺はスコープを覗く。この時、スコープを覗いていない方の目をつぶってはいけない。覗いている方の目に、負担が掛かってしまうそうだ。見なくてもいいから、しっかりと覗いていない方の目も開ける。標準を竹岡さんに合わせ、息を止める。そして、酸素不足で視界が霞まないうちに、ライフルの引き金を……

俺はここで、ライフルを下した。

「どうして、殺してくれなかったんですか！」

竹岡さんの友人が帰ったのを見計らって、俺は竹岡さんの部屋に押し掛けると、竹岡さんは顔を真っ赤にしてそう叫んだ。だが、俺はここで、銃口を竹岡さんに向ける。竹岡さんの顔から、

血の気がさーっと引く。

「立派な水槽ですね……でも、すごく不自然だ」

俺は窓のところにある、大きな水槽を見ながらいった。その前には、テーブルがある。だが、水槽の中には、八割くらいまでの水しか入っていない。本来なら、熱帯魚の一匹や二匹、いてもおかしくないはずだ。

「竹岡さん。あんた、俺のことを騙そうとしましたね？」

ちょっと前に見た、光の屈折のマジックを思い出しながら、俺は厳しい口調でそう言った。

あの時、水槽の前のテーブルに二人は座っていた。だが、太陽の位置のせいで、実際二人が座っていた位置と、俺が見ていた二人の位置が、微妙にずれていた。

「俺があんたを撃っても、それは水槽の水に写ったあんたの像。実際に弾丸がぶち抜くのは、あんたの友人ってわけだ」

竹岡さんは怯えているのか、何も言わない。

「俺が殺してほしいと依頼されたのは、あくまでもあんただ。あんたの友人じゃない」

そう言うと、俺は引き金を引いた。

あれから二日後。昼飯を食い終わってのんびりとしていたところに、おっさんから電話がかかってきた。

「お前の思った通りだ。竹岡の友人には、竹岡に多額の保険金が掛けられていた。その額、なんと三千万だよ」

それを聞いて、俺はため息をつく。全く、とんでもない世の中だな。金のために、友人が殺せんのかよ。

「ところでお前、光の屈折のトリックなんか、よく気が付いたな」

おっさんが、感心したような声でそう言った。

「きっかけは、水槽の上の、水が入ってなかったところですよ」

そこで見たテーブルの先端と、竹岡さんたちが座っていた位置が、かなりずれていたのだ。

「ほう、なるほどね。あっ、そうだ。報酬の二千万は、後でお前に渡すわ。それじゃ」

おっさんはそういうと、電話を切った。別に、あの二千万はいらないんだけどな。

俺は再びため息をついてから、窓の外を見る。いい天気だ。たまには、散歩でもしようかね。

そう思った俺は、伸びをして、玄関へと向かった。

#### 【あとがき】

いつもはファンタジー系やアクション系しか書きませんが、今回は初めてこんな話を書きました。楽しんでくれたら嬉しいです。

今回出てきたトリック、どっかですでに使っている人がいたら、ほんとすみません。パクリつもりはありませんでした。

幻夜 (著：一城 有里)

気が付くと、私は夜の砂漠の真ん中に一人で立っていた。見渡す限りの砂漠は苛烈な太陽とは無縁で、ただひたすらに寒い。ここから逃げなきゃ、そう思って、私は歩を進めた。

どのくらい歩いただろうか。後ろを見れば、自分が歩いた足跡がずうっと遠くまで伸びている。それでも、この砂漠には終わりが見えない。ふと気が緩んだ拍子に、カクンと膝が折れた。足がいうことを聞かない。骨の底から、疲労が筋肉を食い尽くそうとしている。でも、それだけ歩いてなお今の私は汗ひとつ掻いていなかった。ただただ寒い。この砂漠が、私の何もかもを奪おうとしているように思えた。

仰向けになって空を見ると、そこには満天の星空。大自然に屈しそうな私を見下ろしているかのように、幾千もの星がまたたく。疲れ切って動くことのできない私は、楽しそうにまたたいている星を睨みつけることしかできない。寝転がったせいだろうか、睡魔が押し寄せてきた。本能でわかる。ここで寝てしまったら、自分は確実にこの砂漠の一部になってしまうだろう。でも、疲労という重りは私を捉えて離さない。私の体が徐々に砂の中に埋もれていく。もう、いいかな。そう思って私は全身の力を抜いた。どうにでもなってしまうえ。

「大丈夫？」

そのとき、誰かが手を差し伸べてきた。反射的にその手をつかむと、その人はよいしょ、という声とともに私を引っ張った。半分ほど砂に埋もれていた私の体は、驚くほどあっけなく引き出された。

「よかった、まだ埋もれきってなかったね」

そう言ってうれしそうに笑ったその人は、僕はxxx、君の名前は。と聞いてきた。私は……

「私の名前は……」

見慣れた天井。私は、自分の部屋のベッドの中にいた。カーテンの隙間から漏れ出すわずかな光と小鳥の鳴き声が、早朝であることを教えてくれる。掛布団を剥いで全身を見ると、うっすらと汗ばんでいた。

寝巻のまま台所でコップ一杯の牛乳を飲み、その足で台所に向かう。季節は夏。早朝とはいえじんわりと暑い。

シャワーを浴びながら、さっきまでいた砂漠のことについて考えていた。夢、だったのだろう。でも、それにしてもリアルな夢だった。夜の砂漠の凍えるような寒さも、夜空に広がる満天の星も。そしてあの人。名前を聞いた気がするが、なぜか思い出せない。でも覚えているのだ。柔らかな声。やさしい手。そして、くしゃっとした笑顔。一つとして忘れていない。

「名前、何だったんだろう」

独り言は、シャワーの水と一緒に流れて行った。

学校が終わり、一人で下る坂道。夕焼けでも出ていれば感傷に浸れるのだろうけれど、夏の太陽は自己顕示をやめようとしめない。真夏の太陽がまぶしくて、私は下を向いた。

帰り道でスーパーに寄る。食料の買い出しのためだ。安売りのキャベツを見て、今夜はポトフにしようかと考える。人参、ジャガイモ、ベーコン。二、三日分の食料と牛乳パックを一本。

「いらっしゃいませ。牛乳が一点、キャベツが一点……」

いつも思うのだが、スーパーのレジ打ち係の人はすごい。何時間も立ちっぱなしだろうに、そんな様子はおくびにも出さず対応してくれる。

「合計で、千五十二円です」

ぼんやりしている間に終わったようだ。不意を突かれたせいか、小銭を出すのに少してまどう。

「……千五十二円、ちょうどお預かりいたします。ありがとうございました、またお越しくださいませ」

スーパーを出て、私はなんとなく俯いた。

「君は、どうしてここにいたんだい？」

「わかりません。気が付いたら、ここにいて……」

「そっか。この綺麗な星に夢中になっちゃったのかな」

私は、少し俯いた。

「そうかも、しれません」

「どうしたのさ、浮かない顔して」

「私は、輝けないから」

その人は少し考えるようにした後、聞いてきた。

「そっか。自分は個性もなければ魅力もない、ただ生きているだけ。君はそう思っているんだね」

言われて、なんとなく納得した。

「はい」

「それは大きな間違いだよ。人は誰でも個性があり、魅力がある。人生という手織り機を介して作られた人間っていうのは、ある時は格好よくて、ある時は可憐で、またある時は素朴だ。素朴な人間を指して個性がない、魅力がないなんていうのは、人間を見る目がないって公言してるようなものさ」

そう言って、その人は笑顔を向けた。



「大丈夫、君にはすごい個性があるし、すごい魅力もある。ただそれが、少しわかりにくいだけなんだ。今より少しだけ、胸を張って前を見てごらん。燦然と瞬くだけが星の美しさじゃない。ほの暗くても確かに光っている星の美しさは、きっと誰かがわかってくれる」

もちろん、僕もその一人だけだね。そう言って、その人は悪戯っぽく笑った。

「名前、聞き損ねた」

気が付くと、私はやっぱり見慣れた天井の下にいた。眠気を振り払ってカーテンを開けると、そこには一面の曇り空。現実というのは、どうもうまくいかない。あの星空が見たいと思ったのだけれど。

放課後。

「……ん、xxxさん」

遠くから私の名前を呼ぶ声がある。誰だろうか。振り向くと、三人のクラスメートがいた。

「今日部活の緊急ミーティングがあってさ。部員全員強制参加なの。私たち掃除当番なんだけどできそうになくてさ、代わってくれない？」

私は帰宅部で、今日はこれといってすることも無い。

「いいよ」

「ありがとう、ホントに助かるよ！」

じゃあね、と言ってその女子たちは笑いながら廊下に走って行った。箒をとるために私は掃除用ロッカーへと歩いていった。

本当はわかっていた。声を掛けてきたクラスメート以外は帰宅部であること、三人でカラオケに行こうと言っていたこと、私は明らかに、仕事を押し付けられたこと。

断ることもできた。だけど、私はしなかった。いや、できなかった。彼女はクラスの女子たちを束ねるリーダーのような存在だ。逆らえばきっと、面倒な事になる。

教室の窓を開けると、朝から続く曇り空。自分の心を見られたみたいで、ばつが悪い。

夏にしては冷たい風とセミの鳴き声を感じながら、私は掃除を始めた。

「なるほど、それで押しつけられちゃったのか」

「はい……」

やっぱりいつの間にか、私はあの砂漠にいた。

「納得、はしてないみたいだね。その顔を見ると」

「別に、それほど嫌だとは思わなかったんですけど」

「その押しつけられた理由が遊びに行くためだったので腹が立った、ってところ？」

とっさのことに、私は返答できなかった。

「わかるよ、君の気持ちはよくわかる。そんな自分勝手に利己的な理由で当番代わらされて。普通の人ならもっと怒ってるはずさ。むしろ君の優しさに驚くよ」

でも、とその人は続けた。厳しい顔で。

「君にも悪い所がある。一つはその人の恐怖に負けて引き受けてしまったこと。もう一つは、君が心を開いていなかったことだ」

.....どうしてこの人は、私のことがわかるのだろう。何から何まで知り尽くして。

「君が怒った本当の理由はこうだ。『どうして私に嘘をついて掃除をさせようとするのだろう。私だって本当は一緒に遊びたいのに』.....君は内気で、そんなこと言い出せるわけがなかった。でもそこで諦めちゃったら、その子と遊びになんて行けない」

そこまで言って、その人は顔を緩ませた。

「大丈夫。今の君に足りないのは、『変わろうとする勇気』だけなんだ。君は変われる。僕が保証するよ」

「.....私、変われますか」

「ほんの少しの勇気があればね」

今こそ、聞いてみようと思った

「じゃあ教えてください。あなたの名前は、何ですか？」

その人は、少し困ったという表情だった。

「それは、教えられない。君が僕を明確に認識してしまったら、この世界そのものが成立しなくなる」

「それでも私は、あなたの名前が知りたいんです」

「.....今までの君ならここで折れていたんだらうね。さっそく変わってくれたみたいでうれしいよ。だけど、駄目だ」

その人は私の両肩をつかんで言った。

「君が生きる世界はここじゃない。君は現実には生き、僕は夢幻に生きる。君は僕に、恋をしてはいけない」

「なんでも、お見通しなんですね」

「わかるよ。だって、君のことだもの」

そう言うと、その人は私を砂漠に横たえた。すぐに猛烈な眠気が私を襲う。

「君は、変われる勇気を持った。それがあれば、絶対大丈夫」

.....胸を張って、勇気を出してごらん。

布団を剥いだ。やっぱり、あの人はもういない。それでも、私はあの人に会いたかった。あの人に会えないこの世界などに、なんの価値もない。

勉強机の上に、何故か巨大なカッターナイフがあった。

私は、とても幸せだった。今、私の小指から一筋の赤い糸が伸びている。これはどこにつながっているのだろう。わからなかったが、確信していた。

夏だというのに、とても寒い。まるであの砂漠にいるみたい。寒い。でも、大丈夫。勇気を出したんだから、絶対に大丈夫。あの人は、絶対来てくれる。

ひどく眠たい。このまま寝てしまおうか。きっと目が覚めたら、あの砂漠と、あの優しい笑顔が。

あの人はまだだろうか。とても眠い。そして何より、暗い。星一筋の瞬きもなくて、暗い暗い暗い暗い暗いくらいくらいクライクライクライ……

あとがき

はじめまして、一城有里と申します。ハッピーエンドが好きです。

幸せの価値基準って、他人が決められることじゃないのかな、と思ってこの小説を書きました。

これからよろしく願います。

偽物の夏休み

(著：水谷)

電車の窓から見える風景に田んぼが増えてきた。

抜けるような青空の下に広がる水田が、降り注ぐ陽光を反射させていた。遠くに点在している民家はどれも木造で、その日焼けした赤い屋根を見ていると、この土地で育ったわけでもないのにひどく懐かしい気分になった。

「なーにボサツとしてんだよ」

頭上から声がして、わたしは頭を掴まれた。後ろの席から瞬也が手を伸ばしてきたのだ。

「うっさいな、ぼーっとしてるわけじゃないよ。これから調査に行く土地の雰囲気掴もうとしてるの」

「へえ。そりゃ偉い。……なあ、今日の予定って、旅館に行って荷物を置いて、その後、どこ行くんだっけ？」

「西木村でフィールドワークだよ。一里塚と祠をたどってね」

わたしの向かいに座る佐紀子が、ぱたんとメモ帳を閉じながら言った。眼鏡の位置を直しながら顔を上げる。

「大田市の駅に着くのが一時だから、旅館に挨拶した後はあまり遠くには行けないね。今日は土地の雰囲気を知らするためにウォーキングをして、本命の城跡の見学は明日から……って、この日程を説明するの、これで三回目なんだけど？」

「そうだっけ？」

佐紀子にじろりと睨まれ、瞬也が誤魔化すように笑う。佐紀子はわざとらしく、深いため息をついた。

「みんな、もう少し部活に集中してよね。みんなで一緒に活動できるのは、これが最後なんだから」

彼女がわたしの隣の席を一瞥し、わたしもそれにつられた。半袖の開襟シャツに夏用のスカートをはいた制服姿の留美が、無防備に口を開けて眠りこけている。窓にあてた頭が電車の揺れに合わせてゴトゴトとガラスに打ちつけられているが、起きる気配はない。

わたしは腰を上げて振り返り、座席の上から後ろを見やった。ボックス席の瞬也の向かいに座る恵介もまた、スポーツ刈りの頭を日光にじりじりと照らされながら、ぐっすり眠っていた。

とすん、と座席に腰を落とす。窓の外に目をやると、夏の陽射しのなかに、細く長い一本の線が見えた。真っ白で涼しげな飛行機雲。その先端には、なぜか飛行機が見えなかった。

本物の夏休みじゃない、という気がしていた。

今日は六月二十八日。わたしは今間違いなく、学校が定めた夏季休業の期間にいる。それでも

どこか納得がいかないのは、やはり今年のわたしが受験生だからなのだろう。

わたしが通っている高校は県内でも有数の進学校で、三年生は九分九厘が大学への進学を希望していた。当然のように夏休みは補講のスケジュールでいっぱい、『遊び』なんて、その単語を思い出すことも出来ないような現状だ。

絶望的な状況の下、しかしわたしには抜け道があった。わたしが所属する『考古学研究部』の恒例行事、『夏季調査合宿』だ。

考古学研究部――通称『考古研』には、顧問の教師がいない。生徒は学年ごとに自由に研究テーマを決め、長期休業中に泊りがけでその調査に行くのだ。費用は各自の負担だし、目的はあくまで『調査』なのだが、それでも退屈な日々を抜け出してひと夏の思い出を作れる貴重な機会だ。もともと泊りがしたくて考古研に入ったわたしは、この上もなく前向きな気持ちで、出発当日を待っていた。

勉強が嫌で、合宿が楽しみで、待ち遠しくて仕方がなかった。やっとその日が来て、わたしは補講を抜け出し、気の知れた友人たちと電車に揺られ、田舎の温泉郷に向かっている。

――なのに、しっくりこなかった。

心のどこかに、限りなく薄められた、輪郭のぼやけた罪悪感のようなものがあった。補講を休んだことに対するものではなく、もっと大きくて漠然としたざわめきだ。

義務を放棄しているような。

重大な責任に背いているような。

「ユコ、着いたよ」

佐紀子に声をかけられ、わたしは、はっとして顔を上げた。

電車はいつの間にか、小さな駅のホームに停まっていた。

010

パンッ！ と勢いよく、トランプが畳に叩きつけられる。

「よっしゃあ、あがりっ！」と瞬也が天井に腕を突き出し、

「マジかよおおおおおッ！」と絶叫した恵介が畳に崩れた。

「はっ。惜しかったな」額に汗を滲ませた瞬也が、息を整えながら口角を上げた。「まさかお前がここまで粘るとは思わなかったぜ。いつの間にか腕、上げてたんだな」

「あたりめえだ！ 俺がこの日のために、一体どれだけの努力をしてきたと思ってんだ！」恵介が心底悔しそうに頭を倒す。

「あ、やっと終わったの？」スプーンでアイスを掬いながら、浴衣姿の留美が訊ねた。「結局、順位はどうなったわけ？」

「大貧民」と恵介が手を上げ。

「貧民だ」と瞬也が胸を張る。

「なんだ、いつも通りか」わたしはぼっさり切り捨てる。

調査合宿一日目。西木村の一里塚巡りを無事に終え、わたし達は旅館に戻ってきた。

食堂で早めの晩御飯にスッポン鍋を頂き、夕日に照らされた温泉への参道を歩き、女子三人で露天風呂に飛び込み、ほかほかと火照った体のまま瞬也達の部屋に押しかけ、五人で夜のひと時を楽しんでいる。

恒例のトランプ大会の真っ最中。負けた恵介が悔しそうにカードをシャッフルし始めるのを見て、机に向かってノートを広げていたわたしは、アイスのカップを持った留美と共に、積み重なったトランプの傍にそそくさと移動しだした。

「ちょっとユコ。今日の調査のまとめ、まだ途中じゃないの？」

同じく机に向かっていていた佐紀子に、ぴしりと声を飛ばされる。

「あ、ごめん。また後でやるから」

「いーじゃん佐紀子。今日くらいはのんびりさあ」留美がにこにこしながら、佐紀子に手を振る。「こうして考古研メンバーではしゃげるのもあとちょっとなんだから。楽しいこうって！」

「そういう留美は一ページもまとめてないじゃない。二人とも、帰ってから苦労するよー？」佐紀子は眉を下げつつもノートを閉じ、わたし達の輪に加わる。

「まあ、あたしはまずいとしてもさ」留美が、恵介の配るトランプを手にとりながら、隣に座るわたしを指差す。「部長様、どうかこの子だけは目に見てあげてくださいな。ユコは日中、ずいぶん頑張ってたんだから」

「そうだっけ？」わたしは首をかしげる。

「考古新聞の見出し、ずっと考えてたじゃん。集中した時のユコは完全に記者の目してるもん、すぐ分かるよ」

「たしかに」佐紀子が頷く。「あれは間違いなく、面白い見出しを考えなきゃ、って張り切っている目だったね」

「ああ、そのこと」わたしは照れくさくて苦笑いした。「ただの癖だよ。三年間で染みついちゃったんだ」

年に四回発行される『考古新聞』。その記事ごとの見出しを考えるのが、わたしの役目だった。

「新聞記者になればいいのになあ」カードを配り終え、手札を確認しながら恵介が真剣そうな口調で言った。「でもユコ、理系だもんなあ。大学もそっち方面に行っちゃうのか？」

大貧民の恵介からゲームが始まる。スペードの四が畳に置かれた。

「うん。まあ理系の大学だからって、新聞記者になれないわけじゃないと思うけど」恵介の左隣に正座するわたしは、クラブの七を出す。「わたしは、東京の理大に進むつもり」

東京の理大。自分で言ったその言葉が胸に小さくのしかかる。

大学の話。それはつまり、この時間が過去になった後の、未来の話なのだ。

「大学かあ」同じことを思ったのか、留美がどこか感傷的な声で呟いた。「華の女子高生でいられるのも、今年で最後なんだよねえ。あたしは地元、ユコは東京、佐紀子は筑波、恵介は、群馬だっけ？ みんなバラバラになっちゃうなあ」

佐紀子が無言でハートのクイーンを置く。留美は顔をしかめ、パスと言う。

「瞬也はどこに行くんだっけ？」恵介が訊ねた。

わたしは瞬也に目をやる。柔らかそうな癖毛の黒髪。黒いTシャツから伸びる彼の腕は細いが筋肉質で、中学でやっていたという陸上競技の名残が見えた。

「あー、俺ー？」瞬也は手札を眺めながら間延びした声を出す。やがてカードを摘み、ぱしん、と畳に落とす。ハートのエース。次に彼の口から出た言葉に、わたしは耳を疑った。「俺、留学するんだ」

時間が止まった気がした。

「――ええっ！」

沈黙の後、三人の悲鳴が重なる。

唯一悲鳴をあげなかったのは、わたしだった。わたしは瞬也の顔を凝視して、口を開けて固まっていた。

「ど、どういうことよ、それ！」留美が慌てて追求する。

「アメリカに行く。そんで、しばらく英語の勉強をしてくる」瞬也はカードの山を見つめながら、すらすらと言う。

いつも冷静な佐紀子もさすがに動揺したようで、目をぱちぱちさせていた。恵介も顎を落とし、唇をわなわな震わせている。

「真面目に言ってる？」

「もちろん、大真面目」

「聞いてねえぞ！」

「言ってねえもん」

「なんで」

わたしの呟きに、瞬也が視線を上げた。

「親父がさ」と、彼は静かに語り出す。「東京で、輸入した海外の資源を売る会社をやってるんだ。俺、そこで働けて言われた。将来は安泰だし、就職活動も省略できるから、ってな。そのかわり大学は海外に行って、しっかり英語、喋れるようになってこいってよ」

ほれ、ハートで縛ってるぞ、と瞬也は恵介に声をかける。

留学。アメリカ。それらの単語が、わたしの頭の中で現実味のない音を響かせる。

――なんだよ、それ。

「そ、そうかあ」恵介が長い息を吐き、ゲームを再開した。「そういえばお前、英語得意だもんなあ。いや、びっくりしたぜ」

「ほんとだよ。どうして今まで何も言ってくれなかったのよー」

留美も呆れたように嘆息する。

「俺のなかでも決心がつかなかったんだよ」瞬也がへらへら笑った。「まあ、留学つつつても、別に凄い大学に行くわけじゃないんだ。面接だけで入れる、田舎の学校。勉強じゃなくて、現地の人達と話せるようになることが目的なわけだからさ。それに、どうせみんなばらばらになるんだ。筑波と群馬に離れるも、東京とアメリカに離れるも、大差ねえって」

大差あるよ。わたしは胸の奥で呟く。全然、違うよ。

「面接はいつなの？」佐紀子が訊ねた。

「十一月の二十六日」瞬也が答える。「その二日前、つまり二十四日に、成田空港から出発だ」  
——十一月、二十四日。

「そっか。じゃあその日は、みんなで瞬也のお見送りだね」留美が張り切った風に言ってトランプを出す。

「ごめん。無理だ」

わたしの言葉に、皆がこちらを向いた。瞬也も視線を上げる。一番驚いたのは、わたしだった。

その言葉は、完全に無意識に発されたものだった。でも、わたしは見送りに行けない。それは分かった。

「無理って、どうして？」佐紀子が訊いてくる。

「用事がある」——なぜだろう。内容が思い出せない。でも。「すごく大事な用事でさ。外せないんだ」

「そうなのか」クローバーの五を出しながら、恵介が残念そうに舌打ちをした。「みんなで瞬也の見送りしてやろうと思ったのによお。タイミング合わねえな」

わたしは積み重なっていくトランプに視線を落とす。

「いいよ、別に」ダイヤの八を叩きつけ、カードの山を雑に流した。「見送りは、わたし以外で行って」

乱暴な口調で言ってから、それが乱暴な口調だったことに気が付いて、わたしは、ぎょっとした。顔を上げて、慌てて笑みを作る。「いや、用事と被っちゃったのは、ほんとに仕方がないからさ。みんなでわたしの分も、瞬也を送り出してあげてよ」

わたしは、苛立っていた。どうしてだろう？ 瞬也がアメリカに行くのは悪いことではないのに。距離の問題だって、冷静に考えれば彼の言う通りなのだ。簡単に会えなくなるのは、瞬也以外のメンバーも同じなのだから。

なのに、一体何がこんなにショックなのだろう？

——いや。

と、心の中で首を横に振る。

わたしは既に、その理由に気が付いている——。

「また佐紀子が大富豪—？ 強すぎるって！」留美が裏返った声を出し、皆が笑う。佐紀子は上品に微笑んで、また机に戻る。

——わたしは置いて行かれた気がしたのだ。

自分と同じ子供でしかなかった瞬也が、いつの間にか真剣に将来を考えていたことに、底知れない恐怖を覚えた。わたしだけがいつまでも子供で、先に進めないでいるような気がして、耐えがたいほどに心細くなった。それが悔しくて、だから、むきになった。

——わたしは幼稚だ。どうしようもないほどに。

「ユコ」

我に返る。留美が隣からわたしの顔を覗きこんでいた。色素の薄い彼女の瞳に心配の色が滲んでいるのを見て、わたしは急激に慌てだす。



「い、いや、それにしても、瞬也の見送りにいけなくて残念だなあ」慌てた拍子に言ってから、凍りついた。

咄嗟に引き出した話題は、あろうことか、先程自分が失態を晒したものだ。わたしの馬鹿！ と脳内で自責する。

案の定、留美の顔が泣きそうに歪む。わたしは絶叫を堪えつつ、なんとか突破口を見つけるべく、夢中で捲(まく)し立てた。

「い、いや、ほら。懐かしいな—とってさ。わたし、二年の修学旅行の時も、一人だけ空港に行けなかったじゃん？ もったいないよね、一人だけ修学旅行の思い出が無いなんて。なんで行けなかったんだっけな……ああ、そうだ。丁度、じーちゃんが死んじゃって……、お葬式が……重なって……」

これも暗い話だった！

わたしは眩暈を覚えた。どういふことだ。わたしは暗い話しか出来ないのか。

恐る恐る顔を上げると、そこには果たして、じっとわたしを見つめる留美の、恵介の、瞬也の顔があった。視線をずらせば佐紀子も見えるだろうが、見たくない。わたしは絶望的な心持ちで、場の雰囲気壊してしまった罪を背負う覚悟を決めた。

「……お前、なに言ってんだよ」瞬也がゆっくりと言った。「一人だけ空港に行けなかった……？ なんだよそれ」

……え。

「お前、修学旅行、来てたじゃねえか。それに、お前のじーちゃん、元気に生きてるだろ」

わたしは、ぼかんとして記憶を探った。

——その通りだった。

わたしの祖父は、まだ生きている。修学旅行は——。

「ホレ。修学旅行で沖縄に行った時、考古メンみんなでお揃いのストラップ買ったろ？」瞬也がそう言って、自分のセカンドバッグを指差した。幅が一センチ、長さが十センチ弱の厚手の織物のストラップが、ジッパー部分に繋がれている。

視線をずらすと、机の上のわたしのペンケースにも同じストラップがついていた。わたしが修学旅行に行った動かぬ証拠だ。

「そ、そっか。あれ？ なにと勘違いしたかな」わたしは癡然としない気持ちで呟いた。

「ぼけ—としてんなあ」常時ボケっとしている恵介にすら、そう笑われる。「その隙をついて—、はいっ、あがりいっ！」

パシン、とカードが畳を叩いた。留美が笑う。

「ユコ、あんた、大貧民だよ」

夜の十一時になり、「夜更かしは駄目だよ」と佐紀子に引きずられて、わたしと留美は自分達の部屋に戻ってきた。

電気をつけると既に蒲団が敷かれており、わたし達は各々、自分の場所を決めてもぐりこんだ。わたしは入り口の襖側、留美が真ん中で、佐紀子が窓側だ。枕に頭をつけると、気持ちが落ち着く畳の匂いがした。

ぼうっと見つめる天井が、透明に近い青に見えた。毛布の上に放った腕に触れる空気は澄んでいたし、浴衣越しにひんやりと伝わる毛布の涼感も、心地よかった。

二十分ほど経った頃だった。

「佐紀子、寝ちゃった」隣で留美が呟いた。

わたしは返事をせず黙っていた。留美はわたしが起きていることに気付いているらしく、そのまま囁き続ける。

「佐紀子ってさ、こうして素顔で見ると、かなり可愛いんだよね。髪型とかこだわらないし、眼鏡も無愛想な形だから、普段は目立たないけど。実はさ」

なにを言い出すかと思えば。と、わたしは内心で微笑む。それに、『実は』なんて失礼じゃないのか。

「好きな人とか、いなかったのかな」留美が、ぼそりと言った。背伸びをするように溜め息をつき、彼女は続ける。「なんかさあ、高校生活が終わりに近づいてみると、いろいろ考えちゃうんだよねえ。あれもやればよかった、これもやればよかった、ってさ。もっとみんなの恋愛事情に首を突っ込んでおけば、あたしの高校時代は、もっとドラマチックになったのかなー、とか」

留美は相当首を突っ込んでいた方だと思うよ。という指摘が喉までこみ上げたが、留めた。何故だか、声を発してはいけないような、そういう決まりがあるような気がした。

「なんやかんやであたし、三年のみんなのこと何も知らないかもなあ。誰が誰を好きで、誰の告白がどうなった、とか」

恋愛相関図を知ること、まるで世界情勢を把握することのように留美は重視しているらしい。それは滑稽だったが、不思議と共感もできた。

留美はぼそぼそと、誰は誰に片思いをしていた、とか、あいつはたしかフラれたんだ、とか、何も知らないと嘆いていたわりにはやたらと詳しく、一人で相関図を確認しだした。

わたしは聞くともなくそれを聞きながら天井を見つめる。

――わたしこそ。

わたしこそ、高校生らしいことは何一つしてこなかった。

誰かを好きになって夢中に追いかけることをしなかった。生徒会に入ることもしなかったし、体育祭や音楽祭で目立つ舞台に立つこともなかった。勉強にも最低限の時間と労力しか費やさなかったし、部活の研究にも、佐紀子と比べられると恥ずかしいくらいに、身を入れて取り組んだことが無い。

高校三年間、わたしは一体、何をしてきたのだろう。

春に卒業をして、高校生を名乗れなくなって、制服を着なくなって。

その時、わたしの手には一体何が残るのだろう。

「……うーん。やっぱり、正確に分かってることって、全然ないやあ」留美が、ふう、と息を吐いた。「今のところハッキリしてるのは、ユコが瞬也のことを好き、ってことだけでさあー」

「ちょっと待った」

「あ、やっと喋った」

「わたしは瞬也のことが好きなの？」

思わず訊ねた。意表を突かれたせいで、心臓が、とくとくと強めに波打っている。枕の上から見据えるなかで、こちらに頭を倒した留美が吹き出した。

「それ、こっちに訊くことー？」あはは、と留美が笑う。「どっからどう見てもメロメロに見えるよー。え、まさか、好きじゃない、なんて言いますか」

「考えたこともないよ。そりゃ、いいヤツだけどさ。メロメロになった覚えもないし、好きってことは」

「あるんでしょー？」

「……ないってば」

「ぐひやおっ！」

毛布の下で、留美の脇腹に拳を入れた。

しばらくそのまま、二人でもそもそと格闘する。

「佐紀子、寝るの早いね」

いつの間にか二人で蒲団のあいだに落ちていた。

こちらに後頭部を向けた留美が呟いたのを聞いて、わたしは上体を起こす。佐紀子は、感心するほどにきちんとした姿勢で静かに寝息を立てていた。なるほど確かに眼鏡がないと、すっと通った鼻梁や長い睫毛がはっきり見えて、元の顔立ちが綺麗なのが分かった。

「真面目だからね」わたしは答えた。「明日の本格的な調査に、備えてるんだよ」

「もったいなくないのかな」

もったいない？

わたしは、留美の顔を見下ろし、そして、はっとした。

月明かりが染み込む仄闇のなかで、きめ細かく浮かび上がった留美の小ぶりの丸顔。その表情が悲しいほどに不安げで、さらに、いつも眩しく輝いている茶色の瞳に、助けを求めるような光が揺れているのを見て――。

わたしは悟った。

――同じなのだ。留美も、わたしと。

わたしと同じで、この二度と来ない夏休みに、どうしても、しがみついていたのだ。未来になんて進みたくないし、みんなと離れ離れにもなりたくない。だから、明日のためにさっさと寝てしまった佐紀子のことを悲しんでいるのだ。

わたしは留美から目を離した。

どこか遠くを見たくて、カーテンの隙間に目を凝らす。青白い明りの線があるだけで、どんな景色も動きも、そこには見つからなかった。

実のところどうなの？ と、わたしは静かに自問した。

わたしは瞬也のことを、どう思っているの？

ちょっと意識してみると、思っていたよりも明確にその答えらしき想いが胸中に見つかりかけて驚いた。わたしは咄嗟に首を振り、形になりかけた思考をなんとか散らす。

見つけかけたその想い。

それを言葉にしてしまうのは怖かったし、なんだか、してはいけないことのような、気もした。

## 100

長野県の南東、飛騨山脈と赤石山脈に囲まれた多くの盆地の一か所に、大田市西木村は位置していた。

合宿二日目。わたし達は本命の目的地——かつてこの一帯を治めていた武将、据倉(すえくら)氏(し)の居城跡を目指した。

杉黒山という山の頂上にそれはあるらしい。

息を切らして登頂すると、見晴らしがよかった。

染めたように濃い青空の下に、浅緑の稲が敷かれていた。遥かに連なる山並みが、空色の大気に霞んでいた。

山頂に広がっていたのは、殺風景な、ただの空き地だった。

そのあまりの何も無さに、わたし達はあっけなさを感じた。城跡だというから、真っ白い砂壁や、せめて石台とかを期待していたのに、あるのが空き地だけとは。

据倉氏がここにいた痕跡は、もう何も無くなっていた。

——終わってしまう。

ふと、わたしはまた、それが怖くなった。

瞬也と考古研の仲間ではられるのは、今日と明日だけなのだ。

この旅が終わったら、わたしと瞬也の関係はどうなるのだろうか？ クラスも専攻も違う、ただの同級生。他の生徒たちよりも少しだけ仲のいい友達。わたしは、その中の一人。

——いやだな。

はっきりと、そう思った。思った瞬間に口が動いていた。

「瞬也」

わたしが呟くと、隣で瞬也が振り向いた。二重の目蓋に先の巻いた短髪。わずかに傾げた彼の首と瞳が、先を促した。

「あのさ」

——こうして見ると、結構、整った顔してんだよな。

「わたしさ」

そして、

わたしはそこで、言葉に詰まってしまった。開いた唇が、ゆっくりと降りてくる。

言ってしまいたいのに。

どうしてこんなに、言葉にするのが躊躇われるのだろう。

「……うん」わたしは首を振る。「やっぱ、なんでもないや」

わたしは視線を彼から逸らし、青い空を仰ぎ見た。

青い空の一部に、幻想的な虹色の光がかかっていた。まるでカメラのレンズ越しに見た日光のような、しゃぼん液に射し込む光のような。そして。

ほんの一瞬だけ、空がぶれた。

虹色に輝く光が瞬くように薄れて、その中に『夕焼け』が見えた。胸を鷲掴みにするような濃いオレンジ色。幻や気のせいではない、存在感のある確かな光を、わたしは間違いなく見た。

「なんでもないってなんだよ、ユコ」

「今の見た？」

「……あ？」

「今、空が」わたしは晴れ空を指差した。そこにはただ、抜けるような青と入道雲があるだけだ。「あれ？」

油蝉の鳴き声がした。

まるで何かを誤魔化すような。何かを、覆い隠すような。

## 101

宿に帰って、留美に謀られた。

晩御飯を食べて、温泉に行くための道具を取りに和室に戻ると、机の上にメモ帳が広がっていた。『あたしと佐紀子は道具を持って行ってました。先に行ってるネ。ファイト！』。

一読して首を傾げたが、二読して意味を悟った。つまり、留美と佐紀子は入浴のための道具類を、既に持って食堂に行っていたのだ。そのまま真っ直ぐ、わたしを置いて旅館の外にある温泉に向かった。理由は文末の『ファイト！』から推測できた。

エレベーターでロビーに降りる。

案の定、ちょうど玄関を出て行く瞬也の背中が見えた。

余計な世話をやきおって。わたしは内心で、留美に毒づく。

しかし、こうなってしまった以上は仕方がない。瞬也に気付かれないように温泉まで尾行の体をとるのも、不自然だ。

わたしは、後ろから瞬也に声をかけた。

黄昏時とは、まさにこの時間のことを言うのだろう。

そう思わせるような夕焼けが、わたし達の上に広がっていた。黄色から橙(だいだい)、煉瓦色から夜色へと移る、郷愁を誘う綺麗な色彩。灯をふくんだように光る雲がまた、どうしようもなく美しかった。

わたしと瞬也は並んで橋の上を歩いた。下方を流れる川の音がごうごうと聴こえる。視線を遠くにやると、金緑色に輝く稲穂の海がどこまでも見えた。

話によると、どうやら瞬也も留美達と同じ手口で恵介に置いて行かれたらしい。わたしと瞬也が二人きりにされた意図を論じる流れにだけは会話を持っていきたくなかったの、わたしは自分も留美達にしてやられたのだ、とは言わなかった。

前方にベンチが見えた。木で出来た温かみのある形で、それが地面に落とす影すらも柔らかく見えた。

「なあ、ユコ」瞬也がベンチを指差す。「ちょっと、話していかねえ？」

動揺を押し隠し、わたしは頷いた。

「佐紀子は筑波で量子力学。留美は美大で絵画の勉強。恵介は群馬で……何すんだっけ？」

「忘れた」

「そうか」瞬也が微笑する。「じゃあさ、お前が進む学部って、具体的に何を勉強する所なの」また将来の話だ。

「情報科学、とか」

「とかって、お前。自分の進む学部のことぐらい知っとけよ」

「うっさいな。わたしが進む学部は、勉強できることの幅が広いんだよ。コンピューターのプログラミングだとか、ウェブ上の情報大系だとか、新聞とかテレビの活用とか。いろいろやってるところなの」

必死に付け焼刃の知識を振るう。夕日を見つめる瞬也の横顔が、ふっと緩んだ。

「ふーん。じゃあ、昨日の晩に言ってた通り、新聞記者になれないってことはないんだな」瞬也はちらりとわたしを見る。視線を前に戻し、呟く。「頑張れよ、ユコ」

その響きがなんだか年寄り臭くて、わたしは苦笑する。

「頑張れってなによ。受験も就職もまだまだ先でしょ。瞬也は焦り過ぎなんだよ。学校生活はまだ、五か月もあるんだからさ」

五か月。

限られた時間。長いとか短いじゃない。終わりがある。

わたしは瞬也の横顔を見つめたまま、口を閉ざす。

夏のそよ風に髪が揺れ、背後の木々から葉擦れの音がした。

「瞬也さ」わたしは言う。「わたしのこと、どう思う？」

蝸(ひぐらし)の鳴き声が聴こえた。蒸された夏の空気を宥(なだ)めるような、しっとりとした音だった。

空を仰ぐと一面の夕日色が見えた。夕焼けはどうして、人をこんなにも懐かしい気持ちにさせるのだろう。

――ひどく胸騒ぎがした。

夕焼けが染める空を、飛行機が横切っていくのが見えた。数か月後に瞬也を運ぶ乗り物だ。

――瞬也の旅立ちを、わたしは見送れない。用事があるからだ。内容の思い出せない、大切な用事が。

「どう思う、かあ」瞬也が、くつろいだ声で言った。「答えてもいいけどさ。でもその前に、

今日、お前が山の上で言いかけたこと、教えてよ」

「それ、また掘り返すの？」わたしは苦笑した。

――山頂で見た光景を思い出した。青空の中の虹色と、その陰に見えた夕焼け。あれは一体、なんだったのだ。

「何回訊いても答えねえお前が悪りいんだろ。ほら、言えよ。そろそろさ」瞬也がつつくような声で言った。

わたしは空を見上げたまま逡巡した。言ってしまおうか。言ってもいいかもしれないな。

――息苦しかった。

飛行機雲が、空にゆっくりと伸びていった。わたしの心音が、とくとくと高まる。

――胸騒ぎが。

「ユコ……？」

胸元をぎゅっと掴んだわたしに、瞬也が心配そうに声をかけた。

飛行機が夕焼けに向かって進む。真っ直ぐに飛び、燃える夕日に突っ込む。そして光と重なって――。

小さな機体が、木端微塵に爆散した。

わたしは静かに、それを眺めた。

爆発炎上する飛行機。炎に包まれながら、ぱらぱらと落下してくる鉄の滴。

――ああ――。

私の喉から、湧き出るように声が漏れた。

――そうだ。そうだった。これこそが。

これこそが、瞬也を焼き殺した炎だ。

わたしの脳に、様々な映像が、音声が、記憶が流れ込んできた。わたしが自分で押さえつけた、過去の、そしてある意味では未来の記憶だ。

『離陸した飛行機 突然の爆発』

新聞の見出し。続くアナウンサーの声。

「本日午前八時ごろ、成田空港を飛び立った東京発ロサンゼルス行きの旅客機〇〇便が、離陸直後に謎の炎上をしました。搭乗していた方は以下の通り――」

視界が暗転する。声が聞こえる。

「どうして……！ どうしてあいつが、死なないといけなかったのよ！」少女の声。続く少年の声。「誰のせいでもない……。理由なんて、なかったんだ」

桜が咲く。時が過ぎる。

「就職おめでとう。まさかあんたが科学者さんになるなんてねえ。母さん、嬉しいわ」「……なんで、あたしだけが大人に」

試験管が割れる音。怒号。

「馬鹿野郎！ お前、自分が何をしてんのか、分かってるのかよ！」「離して！ もう少し……、もう少しなんだよ！」「駄目だ！ 今すぐに……」「どうしても、やり直さないといけないことなの！」「これはやりすぎだ！ いくらなんでも……」「あいつに、言えなかったことがあって」「……んだね？ 分かってるなら、止めはしないわ」「死んだ人間は戻ってこねえんだ！

あいつは、もう」「会えるよ……、会ってみせる。絶対に会って、今度こそ」ゴウン……。 「いい？ ダイブできるのは一度だけよ」ゴウン……。 「あんたが目的を達成したら、この空間データは自動的に消去される」「ありがとう」ゴウン……。 「準備はいいね？ ……よし」ゴウン……。

「行ってきな。ユコ」

そうだ、忘れていた。

この世界は、仮想の世界。

現実世界のわたしが作り出した、偽物の夏。

「……そっか」

ベンチに座ったまま、茜色に染まる空を眺めた。

遠く、山の端を霞ませるような空の一か所で、ふわりと光が揺れた。虹色の光。その後ろに見える、濃いオレンジ色。

今なら分かる。あれは、サーバーの描写処理が追いつかずにむき出しになった、画素イメージ用の背景台紙(バック・グラウンド)。

「そっか、わたし……」

全部、思い出した。

「……どうしても、瞬也に言いたいことがあったんだ」

あの日は、じいちゃんの葬式で空港に行けなくて。最後だったのに言えなかった。だから、わたしはここに来た。

「でも、みんなと一緒にの夏休みが、ほんとうに楽しすぎたんだ。留美の言うことはいつも面白いし。恵介はむちゃくちゃやるし。佐紀子は優しいし。あんただって、隣にいるし」

頬を涙が伝った。

瞬也が、わたしの手を握る。わたしもそれを握り返す。

「言えるわけないよ。こんなこと」

——目的を達成したら、この世界は消えてしまうから。

「あんたに会えなくなるのは、もう嫌だよ」

私はしばらく、そのまま泣いていた。

二人でベンチから立ち上がり、涙をぬぐって歩き出した。

——ごめんね、みんな。せっかく手伝ってくれたのに。



胸の奥で、わたしは仲間に謝った。

——わたし、やっぱり、このままでいたい。瞬也に告白するためにダイブしたけど、やっぱ無理みたいでさ。わたしはこのまま死ぬまで、この世界で過ごすよ。

夕焼けが道を照らした。街路樹も、ガードレールも、同じ色に染まっていた。

永遠に続く合宿。もう、胸騒ぎもなかった。

「なあ。結局さ」瞬也が口を開いた。「お前が山の上で言いかけたことって、なんだったんだ？」

あいかわらずの質問に、わたしは思わず微笑する。

「別に？ ただ、これからもよろしく、ってね」

「はあ？ なんだよ、それ」

「いいじゃん。大切なことでしょ。受験生のわたし達にとってはさ」わたしはとぼけて、そのまま歩く。

「なんか拍子抜けしちまったよ」瞬也が頭を掻きながら、呆れた声を出した。「まあ、いいや。んじゃ、俺も質問に答えるぞ」

答える？ 答えるって、何に——……。

はっ、とわたしの中で何かが凍った。その場に立ち止まり、瞬也の後頭部を凝視する。自分の言葉が、脳内に反響する。

——瞬也さ、わたしのこと、どう思う？

「……あ……」

——どう思う、かあ。答えてもいいけどさ。でもその前に、今日、お前が山の上で言いかけたこと、教えてよ。

駄目だ。

——別に？ ただ、これからもよろしく、ってね。

答えたら駄目だ。瞬也。

目の前で瞬也が立ち止まる。ゆっくりと振り向いて、わたしの目を真っ直ぐに見つめた。二重の目蓋。先の巻いた短髪。わたしは、何も言えなくなる。

「ユコ」

静寂の後、彼は静かに言う。

「ずっと前から、好きだった」

時間が止まってしまったかのようだった。

風がやみ、音が遠ざかった。夏の夕刻の涼しさを、肌に感じた。

「……なんで」

視界が霞んだ。

そんな設定、していないのに——。

「なんで瞬也が、そんなこと、言っちゃうんだよ」

声が掠れ、力が抜けた。その場に崩れ落ちそうになって瞬也に抱き留められる。せっかく止めた涙が溢れ、瞬也のジャージを濡らした。

「あんたがなんで、あたしよりも先に言うんだよ。どうしてあんたは、いつもいつも、あたしよりも先に……」

瞬也の胸に顔を埋めた。涙が染み込む布から、彼のにおいがした。涙が止まらない。嗚咽が。感情が。

「うあああああああああ……っ」

泣き叫ぶと同時に、ガラスが割れるような音がした。

仮想世界の消去が始まったのだ。

静かに腕を離された。目を開けたわたしの背中を、彼の手が、とん、と押した。

「悪りい、旅館に忘れ物した」

振り向いた先で、瞬也が照れくさそうに、にっと歯を見せて笑っていた。

「先に行ってる。走って、すぐに追いつくからよ」

瞬也の背後には、もう何も無かった。温泉郷の景色が遠くから順に、ぱらぱらとパズルが剥がれていくように分解されていく。彼が立つすぐ向こうの道路まで、崩壊が追いついていた。

「すぐって、いつなんだよ」

瞬也の身体を、その笑顔を残して、世界の全てが夕焼け色に吞まれていった。眩しく、切なく、懐かしい夕日の色に。

――ずっと前から、好きだった。

すぐ後ろで、世界が碎ける澄んだ音がした。わたしの周りを光が覆い、瞬也の姿も消えていく。

――瞬也――。

わたしは光に消える世界に手を伸ばす。夕日色の中、彼に向かって。最後の想いを、思い切り叫んだ。

――わたしもずっと、瞬也のことが――。

1 1 0

目が覚めた。

頭に装着されていたヘルメットが、静かな駆動音と共に自動で外れる。

わたしはベッドに横たわっている。

うす暗い実験室には、空調機がたてる音が満ちている。覗き込むように配置されたディスプレイに、電子の文字が点滅した。

『――All data is deleted.――』

わたしはそれを、いつまでも無感動に見つめる。  
流れる涙の感触の、真偽が分からない。

烏 (著：七分の六)

『私、死ぬのかな？』

前から二番目の窓際の席からグラウンドで汗を流す他のクラスの奴を見ながら僕はそう思い、手元の紙に書きとめる。いや、そういうセリフを考えたと言ったほうが正確だろうか。僕は小説を書いていた。授業をする先生の声は全くと言っていいほど頭に入っていない。真面目に授業を受ける気など、端からない。

自分の世界に入り、次に書く言葉を探し始めた時だった。下を向きっぱなしだったのが悪かったのだろうか、先生に指されてしまった。

「石橋。問四を前に出てきて解いてみる」

「……はい」

教科書を手に席を立つ。

そういえば以前にもこんな感じで指されたことがあった。僕は教科書を手にして前に出て、白いチョークを持って黙々と答えを書く。その時は授業の後にクラスメイトが、

「ノートじゃなくて教科書ってところが嫌味だよなー」

「だよなー。『僕はノート見なくても問題見れば答えが解りまーす』ってかんじ」

と馬鹿にするように笑っていたのを覚えている。誰の名前も出てきてはいないけど、僕には自分のことであるようにしか思えなかった。

——どうして僕が？ 自分ができないからって……。

それ以来、僕は白紙のノートを持って前へ出て、無意味に黒板とノートを何度も見比べる仕草をしたり、教科書だけを持って前に出て、わざと間違えた答えを書いたりした。そうすれば、周りからは何も言われなし、妬まれることもない。笑われることもない。静かに、幸せに過ごせる。

間違った答えを書いて席に着くと、先生は満足そうに、それを正しながら解説を始めた。僕はまた下を向き、続きを書く。今書いているこれは手紙でもレポートでも遺書でもない。ただ小説を、話を書いている。それを書いている僕は文芸部員でも図書委員でもない。ただ、書きたくて書いている。思うままにペンを走らせている。それだけだ。

——「先生。そんな問題解るから、僕には話を書く時間をください」そう言いたい。そう言ってしまいたい。でも、もしそう言ってしまった時の、クラスメイト反応は……。

だから、未だに何も言えない。

——この教室が、この学校が、街が、国が……さらに言えば、この世界が、現実が、息苦しくてたまらない……。それよりも……今は続きを……。

僕はこれからも、こうやって話を書き続けるのだろう。話の中では自由だ。あらゆることが自分の思い通り。嫌われることも、好かれることも自由自在。

現実で人に嫌われることが怖い僕は、時に話の中で人を殺して犯罪者となる。また時には自分自身を話の中に書いて、人に嫌われ、いじめられ、自殺してみる。

僕はいつからこの趣味を始めたのだろう。今となってはもう、思い出せない。そして、いつこの趣味をやめられるかもわからない。

ただ僕はこの趣味をやめる気はないのだ。やめたら、次の趣味を考えるのが面倒だから。

僕は、こんな自分が好きじゃない。

再び僕は外を見た。

——……なんだ？

視線の端に黒い点が付いている。睫毛に付いたゴミかと思い、はらったが取れない。その黒いものに視線を合わせると、それは黒い鳥、木にとまった一羽のカラスだった。僕はそのカラスと目が合う。

——カラスか……。僕の今の話には使えない、女の子が主人公の話の中に……。

「こら！ 余所見するんじゃない！」

——っ！

先生の声かと思い振り向くと、先生は僕を見ていない。

——……どうして？

他の生徒を怒っているのかとも思ったがそうでもない。相変わらず、問題の解説を続けている。

――なぜだ？

いくら考えてもわからなかった。わかったのは、自分が怒られたわけでもなければ、先生の機嫌が悪いわけでもないということだけ。

紙の上にある僕の手は、なおも停止し続けている。

――お前、なのか……？ いや、そんなはずはない。僕は少し空想に浸かりすぎたな。カラスが口をきくなんて、非現実的すぎる。……それにしても、カラスを選ぶなんて僕の発想とは思いたくないな。だって……

「カラスを馬鹿にするな！」

「えっ？」

思わず声を発してしまった。クラスメイト全員が僕を見るから、僕は恥ずかしくて赤くなった。

「どうした？ 石橋、先生間違いでも書いたか？」

「い、いえ……」

「そ、そうか」

「……ははは、どうしたんだよ？石橋」

「あはははは、ははは……」

何人かのクラスメイトが僕の方を向いて笑う。

教室が何とも言えない空気で満たされようとした時、授業終了のチャイムが鳴った。

「よし、終わるぞ」

「起立、礼！」

「ありがとうございました」

礼の後も恥ずかしくて、顔を上げずに座ったまま動けなかった。

――……皆には聞こえないのか？ あの声が……。

次の授業の間も、窓の外を見ると常にカラスがいた。そしてそのカラスはずっと自分に話しかけてきた。まるで人を馬鹿にしているかのような声色で。

「なあ、少し話そうぜ？ さっきは驚かせてわるかったよ。なあ？ いいこと教えてやるからさ

」

約一時間、聞きたくなくても聞こえてくる声と僕は闘ったが、勝てなかった。手で耳を塞いでも効果は全くない。

――耳を塞いでも聞こえるということは……やっぱり、僕の頭が勝手に話を進めているからだ……。カラスだって同じ。あれはただの幻だ。僕の脳が見せている幻想だ。……僕は疲れているんだな……。

保健室に行き、職員室で担任に帰ることを告げる。

――帰って、寝よう。そうすれば疲れもとれて、明日から僕はいつも通りだ。

そう、いつも通り。いつも通り……。

気付くと僕は教室にいた。いつものように話を書いている。窓の枠には一匹のカラス。そいつは、僕のことを見て言った。

「やっと話せたなあ。あんだけ頑なに無視されると結構辛いんだぜ？」

――やっど？ 無視？ 何を言っているんだ、こいつは。

「わからんか。全く、昼間あれだけ話しかけたのに。」

――昼間？ 意味が解らない。

「そうか。自分がいまどこにいるかすらわかってないんだな。まあいい。もう時間もあまりなから俺は仕事をさせてもらうよ」

カラスが言い終わると同時に、窓の外は暗闇に包まれた。それと共に、教室の床が、壁が、さらには僕の体も、黒く染まっていく。つま先から、闇との境界線が消えていく。

「俺の仕事、それはな、お前を連れて行くことだ。なに、心配することはない。向こうでは人に嫌われることはない。嫌味を言うクラスメイトもいない。お前が話を書く邪魔をする奴は誰もいない。」

――僕を連れ 行く？ 何処に？ い、嫌だ。行きたく い！ 僕は今の生活が嫌いなわけじ

やない……！

僕の体はどんどん闇と同化している。それはもう腰のあたりまできていた。

「そうか。でもな、お前が何と言おうと、俺は俺の仕事をするだけなんだよ」

闇に溺れていく。手足の感覚はもうなくなっていた。声もだんだんと出しにくくなっていく。

――ま、待っ くれ。僕には だ、や 残し ことが……。

「しょうがないじゃないか。俺が不真面目だったのは認めるが、俺の話を見殺ししていたのはお前、覚悟を決める時間を捨てたのはお前自身だ」

体は完全に闇と同化していた。自分の体をコントロールできない。認識すらできない。自分という存在が崩れていく、自分の意識が体から離れていく、そんな感覚。

――せめ 、明 の朝 でも …。

――。

気が付くとそこは、自分の部屋のベッドの上だった。

――いつの間にか寝ていたのか。いやな夢だった。それにしてもあのカラス、夢にまで……。

嫌な汗をたくさん掻いていた。シャツが背中に張り付いて気持ちが悪い。そして、なぜか夢の内容だけははっきりと覚えていた。まるで、実際に体験したかのように。嫌な夢だった。眼覚めとしてはまず、最悪の部類に入るだろう。

――……兎に角起きなければ。今日も、いつも通りの生活が始まる。

そう思ってベッドから降りる。まずは今の不快感を少しでも和らげよう。窓を開けて朝の涼しい風にあたれば、これも少しはましになるだろう。カーテンの隙間からこぼれる光の強さから考えるに、晴れもしくは、薄く雲がかかるくらいか。

窓に近づき、カーテンを開ける。

真っ先に目に飛び込んできたのは、一羽の真っ黒なカラス。

そいつと目が合う。窓ガラス越しにもかかわらず、はっきりとした声で、嗤っているかのような声色で、そいつはこう言った。



「それじゃあ、いこうか」

あとがき

都合により、去年の今頃執筆し、出そうか迷った挙句出さなかったものを若干修正して投稿させていただきます。

自分の文って、なんなのでしょう。

この世界より少しだけ進んだ科学力を持つ、とある世界。電子機器は人々の生活に深く根ざし、なくてはならないものとなっていた。それは通信分野においても例外ではなく、想いを伝える手段は、アナログな手紙からデジタルなメールへと移り変わりつつあった。年始の挨拶すらメールで行われるのが一般的になりつつあるこの世界で、手紙という通信手段は廃れてしまったかに見えた。

しかし、そんな手紙を運ぶことを生業としている者たちがいた。一枚の紙に文字として込められた人々の想いを、守る者たちがいた。郵便集配人。人は彼らを、「ポストマン」と呼ぶ。

## POSTMAN (著：木材)

赤く角張ったポストの前で呆然と立ち尽くす男が一人。青地に白のラインが走るきっちりした服装で、胸にはテの字の郵便記号が入っている。その下の名札に書かれている文字は「一文字凱」。眉が太く、顔立ちは凛々しいのだが、表情は陰鬱で今にも泣き出しそうだった。

ポストの集配用取り出し口は開けられており、男の視線はその中に向いていた。その視線の先には何があるのか、というと、何もない。ポストの中身は隅から隅までどこをどう見ても空だった。そしてそれが、男が落ち込んでいる原因であった。

「今日もまた、手紙は一通もなし、か……」

彼、一文字凱はポストマンであった。仕事を始めて半年程の新人ポストマンである。

ポストマンは儲かる仕事ではないことは知っていた。高度情報化社会で手紙の需要は減ってきている。郵政民営化の際に出来たライバル会社の存在もある。しかしまさか、ここまでだなんて。ここしばらくの間こんな調子であり、夢を持ってポストマンになった彼が落胆するのももっともな話だった。

彼がため息をついた時、背後からバイクのエンジン音がした。銀を基調としたスタイリッシュなデザインのバイクが、一文字の赤い郵便バイクの隣に止まる。そのバイクから飛び降りた男が一文字に声をかけた。

「相変わらず情けないな、ポストマン一文字凱」

「お前は……デリバリスト、伊崎剣二……！」

伊崎剣二と呼ばれたその男は、郵便ポストの隣にあった銀色の円柱状の物体へと近づいた。伊崎がそれに手をかけると、円柱の中程の側面が引き戸のように開き、そこから大量の手紙が溢れだした。

「おっと、今日も溢れんばかりに手紙が来ているぞ。そして、貴様の方は今日も空手で帰るのか？ 我が株式会社『デリバリスター』のデリバリストたちと違って、ポストマンは暇でいいな？ え？」

「今は皆物珍しきでそちらのポストを使っているだけだ！ 配達ならば俺たちだって負けたりしない……！」

一文字が噛みつく。彼らの間には何らかの因縁があるようだ。

「よく吠えるな、ポストマン一文字凱。一つだけ言うておくと、俺たちのこれは『ポスト』なんて時代遅れの名前じゃない。『レターデリバリーボックス』、略して『レタックス』だ。覚えておくといい」

「名前はどうでもいい！」

ポストマンである彼がこうまで敵対視する『デリバリスト』とは何者なのか。

一言で言ってしまうと、同業者であった。株式会社デリバリスターは、過去の郵政民営化の際に設立された会社だ。メールや電話などの電子通信システムの将来性にいち早く気づき、それらの事業を中心として急激にのし上がってきた会社であり、近年では会社の規模に任せ、通信や配達分野のあらゆる事業に手を出していた。手紙郵便もその例外でなく、デリバリスターの配達人であるデリバリストと、既に現地で働いていたポストマンとのいさかいが頻発していた。

ポストマンとデリバリストとは犬猿の仲、ライバル関係なのである。一文字凱と伊崎剣二、この二人も例外でなかった。

伊崎が大量の手紙をまとめる様子を、一文字が苦々しく見つめている。それを全てバイクに積み終わると、伊崎が一文字に尊大な態度で話しかけた。

「そうだ、配達力では俺たちと互角だと思ってる貴様に、一ついいことを教えてやろう。俺は配達のために体の一部をサイボーグ化している。そして各部分に有用な兵装を埋め込んでいるのさ」

そう言うのと伊崎は右腕を一振りした。すると突然、彼の右手にナイフのようなものが現れた。刃はついておらず、代わりに刀身に機械的な配線が走っている。奇妙なナイフだった。

「それは一体……」

「フッフ、これは『超電磁カッター』。分子振動を用いて物質を切断するナイフだ。これにかかれば、切れないものなどほとんどない」

伊崎がそう言うやいなや、ナイフの刃の部分が白くまばゆく輝きだした。

「うっ！ な、何をするつもりだ！」

伊崎はそれに答えず、懐に手を入れた。未開封の封筒がそこから取り出される。

「ま、まさか！」

刹那、真横に白い閃光が走る。思わず一文字は目を瞑った。激しい光が収まった後、目を開けた一文字が見たものは、わずかの歪みもない切り口で開封された封筒であった。

「ここまで美しく封筒を開けることが貴様にできるかな？ できないだろう？ これが俺と貴様の力量の差だ。せいぜい貴様はアナログな手段で汚らしい切り口を晒しているがいい。クックック、フッフッフッフ、ハーツハツハツハ！」

伊崎は高笑いをする、バイクに腰掛け走り去っていった。後には唇を噛みしめ、その背中をにらみつける一文字だけが残ったのであった。

一文字も昨日今日からポストマンの現状に危機感を抱き始めた訳ではない。デリバリスターと  
の利用者数の差もさることながら、配属された地区のポストマンの人数も不安を駆り立てた。そ  
の数なんと二人。一文字を入れて、である。しかも聞けば、そのもう一人は既に配達を引退して  
いるというではないか。

以前一文字はその先輩に訊ねてみたことがあった。

「先輩！ 俺たちポストマンはこのままでいいんですか！ こんな状態じゃいつか潰れてしまいま  
す！」

「凱、俺たちの仕事は手紙を運ぶこと、つまり人の想いを運ぶことだ。それを全うするのがポスト  
マンだろう」

「でも……でも現に、この地区では仕事のほとんどがデリバリスターに取られてる！ このま  
まじゃ……！」

「なんだ、そんなことか。デリバリスターは事業を広げようとやっきになっている。例え速く  
ても、その仕事には丁寧さがない。気にすることはないさ」

「……先輩は、今の現場を見ていないから、そんなことが言えるんです」

「それに、今のお前をデリバリストに負けないようにサポートするのが、俺の仕事だ」

「！」

「確かにデリバリストの個々の能力は高い。配達に使う技術や道具を持っている場合もある。こ  
の地区のデリバリスト、伊崎剣二の『超電磁カッター』なんかは特に強力だ。それに対抗するた  
めに、お前の制服を改造した」

「改造？」

「名付けるなら『ポストスーツ』。ポストマンの制服をベースに、素材を高い衝撃吸収能力を持  
つものに変えてある。そして、必殺技も備え付けた。名付けて『ポストマンズ・ポスト』。技名  
を叫びながらベルトのボタンを押すことにより、制服各部の金具から高弾性形状記憶ジェルを  
展開。使用者を包み込み、ポストの形を成す。言ってみれば、即席ポストになれるってことだ。  
格納もボタン一つ。手紙を出したいが、ポストがなくて困っているという人を見つけた時に有  
用だ。更に柔らかく、食べても大丈夫な素材を使っているから、小さなお子さまにも安全だ」

「ポストマンズ……ポスト……」

「更に君のバイクも改造した」

「なんですって！」

「声紋認識機能をつけ、『トランスフォーム』と叫ぶことによって、バイクが人型に変形するよ  
うにした。パワーも高く、実に六百馬力はある。ポストスーツと同じ必殺技を使うこともできる  
。燃料の問題は精神力をエネルギーに変えるという新技術で解決した。インキュベーターという  
種族が編み出した技術だそうでな、強く想うほどポストサイクルは力を増す」

「……それは、バイクの時より速くなるんですか？」

「いや。二足歩行になるからな、むしろ遅くなる」

「そうですか」

「これでもパワー不足だった時のために、更なる機能がある」

「まだあるんですか」

「既に使われなくなったポストマンの宿舎や事務所などを秘密裏に改造した。同様に声紋認識でそれらが飛んできて変形、合体する。そうして全長三十メートル、総重量六十トンの巨人『グレートポストタイタン』となるのだ！ そのパワーはなんと四千馬力。必殺技ポストマンズ・ポストももちろん使えるぞ」

「.....それは、バイクの時より速くなるんですか？」

「いや。巨大になるからな、むしろ遅くなる」

「そうですか」

ポストマンズ・ポスト、ポストサイクル、グレートポストタイタン。後半の配達に役立たない二つはともかく、一文字はポストマンズ・ポストでデリバリストに対抗できると考えていた。しかし、超電磁カッターによるあの封筒の美しい切り口に、その考えは崩れさった。そもそもポストマンズ・ポストを使う状況であれば、自分で手紙を受け取れば良い。

本当にこれでデリバリストと戦っていけるのだろうか？ 彼の中にはその思いが渦巻いていた。

一文字が物思いに沈んでいると、背後から声が聞こえた。見ると見知らぬ少女が遠くから彼を呼び止めている。右手に持った手紙を振り上げながら彼の方に走ってきていた。

程なくして、彼の前に息を切らしながらその少女がやってきた。一文字の胸が高鳴る。

「良かった.....。行っちゃったかと思いました」

「とんでもない！ 待ってたんですよ」

息を整えながら少女が一文字に持っていた手紙を差し出す。

「速達を頼みたいんです。おばあちゃんまで」

一文字は息を飲み、手を震わせながらそれを受け取った。

「分かりました！ ポストマン一文字凱、全身全霊を持って届けさせていただきます！」

「ふっ、よろしくお願いしますね」

少女は微笑みながらそう言うと、軽く頭を下げ、背を向けて去っていった。配達を頼まれた。ただそれだけのことだが、一文字の中では歓喜の渦が巻き起こっていた。一文字はその背中に深く礼をして、そのまましばらく動かなかった。

夕焼け色に染まりつつある高速道路を、一文字は赤いバイクにまたがり疾走していた。後部の集配ボックスには手紙が一通だけ入っている。宛名は村上チヨ、差出人は村上夏美。それぞれ少女の祖母と彼女自身の名前だろう。

少し前までの陰鬱な気分が嘘のように、彼の心は晴れ渡っていた。ポストマンを頼ってくれる人もいる。そんな当たり前の事に、彼女から手紙を貰ってやっと気付いたのだった。

一文字がバイクを走らせていると、別のバイクが背後から迫ってきた。かなりの速度を出しており、今にも一文字に追いつこうとしている。搭乗者は座席の上に腕組みしながら直立している。相当の風圧を受けているはずだが、その立ち姿は微動だにしない。一文字とそれが並ぼうかという時、男が一文字に声をかけた。

「奇遇だな、ポストマン一文字凱。その様子だと配達の途中のようだが？」

「……何の用だ、デリバリスト伊崎剣二」

伊崎がスピードを緩め、一文字と並走する。彼の顔には嘲り笑いが浮かんでいる。

「クク、しかしまだこんなところにいるとはな。配達と言っても所詮一通程度だろう？ 俺はもう三分の二は配り終えたぞ」

「何が言いたい」

「何が言いたいか、だと？ 分かるだろう、貴様の配達はぬるいというのさ」

伊崎のバイクがスピードを上げた。そうして一文字のバイクの前に出る。

「貴様は配達では俺に負けなと言ったな。しかし現に今、速さで俺に負けているではないか！ 所詮は口だけ、貴様は俺の背中を拝んでいるのがお似合いなのさ！ ハッハッハッハッハ！」  
そう言うと更に伊崎は加速し、一文字との差を広げていった。

「あまり舐めるなよ……」

一文字が小さく呟く。ハンドルを強く握りなおす。

「確かにお前のバイクの方が性能は高い。最高速度も上だろう。しかしな、技術で補えない差じゃない。そして何より、俺にも意地がある！ 乗ってやろうじゃないか、その挑発！」

一文字が速度を上げる。広がり始めていた二人の距離が途端に縮みだす。二十メートル、十メートル……気付けば一文字はピタリと伊崎の後ろにバイクをつけていた。

「やはり来たか、ポストマン一文字凱。そうでなければ面白くない」

背後に迫った一文字に気付いた伊崎が、バイクを更に加速させる。一文字も負けじとそれを追い上げる。距離は開かない。ただ両者の速度だけが上がっていった。

吹き抜ける風。それを追い越して走る二台のバイク。高速の電灯もその奥に見えるビルも、周りの景色ごと後ろへ流れていく。高速道路の制限速度ギリギリ、追い風すら置き去りにする世界に、二人はいた。

相変わらず一文字は伊崎の真後ろにぴったりとくっついてきている。そのことに伊崎は疑問を感じていた。既に伊崎のバイクは最高速度を出している。そして両者には性能の差が、つまりは速度の差がある。しかし距離は広がっていかない。どうやって速度を補っている？ 伊崎は焦っていた。しきりに後ろに目を向ける。

ここで伊崎はあることに気付いた。一文字の服装や髪がほとんど乱れていない。この風圧の中で、である。つまり……。

「風圧シールド走法か！」

高速の世界では空気すらも大きな障害となる。そのため、他人の真後ろで走るなどしてその影響を減らす技術が、レーシングの世界にはある。それが風圧シールド走法。もちろん、適切に風を避けなければならないため、生半可な技術では行えない。

「言っただろう。技術で補えない差ではない、と」

一文字が静かに言う。その目はしっかりと伊崎を見据えている。

「ちっ！ ならば振り払うまでよ！」

伊崎が大きく左へと動く。驚くべきことに、一文字はそれを追わず道路右端にラインを取った。

「焦ったな、伊崎剣二。ふらついてスピードが落ちたぞ。そして次のカーブは右曲がり、このままインに入らせてもらう！」

相対的に一文字が前を取った。伊崎は左後方からその背中を見て歯を食いしばった。が、不意に口の端をつり上げる。

カーブに入る。一文字は内側を取らせないために、最大限右に寄って走っていた。そしてそれが、ベストのライン取りにもなっていた。彼は心の中でガッツポーズを取った。完全に奴を出し抜いてやった、と。

「余裕だな、ポストマン一文字凱」

そこにかげられる声。一文字の心臓がひっくり返りそうになる。伊崎剣二がいつの間にかアウトコース、真横に並んでいたのだ。

「勝ったと思ったか？ 出し抜いたと思ったか？ 高速道路のゆるいカーブの内外程度で、俺との性能差が埋まるとでも思っていたのか？ おめでたいな」

そう言っている間にも、伊崎のバイクは外から少しずつ一文字の前へと出てきていた。バイク自体の基本性能の差。それが一文字に大きいのしかかる。

「くっ、ならばもう一度風圧シールドを……」

「させんよ」

一文字が伊崎の背後に回り込もうとすると、伊崎はそれをかわしてカーブの内側に入り込んだ。一瞬の攻防だった。しかし、勝負が決まるにはそれで十分だった。

伊崎との距離が開く。たかだか十メートルほど、しかし決定的な十メートル。対等な条件の元に晒された一文字のバイクは、じりじりと伊崎から離されていった。

「……案外あっけなかったな」

そう、伊崎が呟く。高速の長い直線の遙か後方で、一文字のバイクは走っていた。伊崎は視線を前へと戻した。

一文字は俯いて唇を噛んでいた。悔しい。技術では負けていなかった。しかしそれが、ただの性能差によってひっくり返されてしまった。ただ、悔しい。その単語が、想いが、体の中を駆け巡る。喉の奥でのたうち回る。こめかみに針のように突き刺さる。

『勝ちたいか？』

その矢先だった。どこからか、誰のものか、不意に声が聞こえた。気がした。一文字自身、それが何なのかは分からなかった。しかし、彼はその問いに答えた。

「勝ちたい……」

答えると、再びあの声が問いかける。

『勝ちたいか？』

「勝ちたい……！」

『奴に、勝ちたいか？』

「勝ちたい……。勝ち、たいッ！」

彼は既に、無意識につき動かされるままに答えていた。

伊崎の背後で聞こえるエンジン音が、突然大きくなった。伊崎が驚いて振り返る。一文字は先ほどと同じようにハンドルを握ったまま俯いている。表情は読めない。しかし、醸し出す雰囲気は明らかに変わっていた。

異常なことに、先ほどよりも二人の距離は詰まっていた。伊崎のバイクの速度の方が上なのだから、本来そんなことは起こり得ない。伊崎は自分の目を疑った。見直してみるが、やはりこちらは最高速度を出している。それなのに、明らかに一文字はこちらへと近づいてきていた。

「ば、馬鹿な……」

少しずつ詰まっていく距離に、思わず伊崎がそうこぼす。アクセルを回すが、これ以上速度は上がらない。そうしている間にも背後からは一文字が迫る。

「おい！ ポストマン、一文字凱！」

呼ばれる声で一文字は我に返った。いつの間にかは分からないが、伊崎の真横で走っている。伊崎はどうやら焦っているらしいことが、その表情から読み取れた。

「残念だが、俺の次の配達区域が来たようだ。今日のところは引き分けにしておく。だが、次は完膚なきまで叩きのめしてやる。覚えておけ」

そう言うのと伊崎は脇へよれ、高速を降りていった。何故伊崎が横にいたのか、何故奴が引き分けにしておくと言ったのか、一文字には訳が分からなかった。直前までの記憶があやふやだ。

追いついたのか？ いや、そんなはずはない。奴の性能に自分の技術が敵わなかったことまでは覚えている。しかし、その後のことはどうしても思い出せなかった。

目の前には崖。エンジンを吹かす。フルスロットル。崖が迫る。そして、飛び出す。風を切る爽快感。眼下には町並みが広がる。そして直後、襲い来る落下特有の浮遊感。景色が次第に拡大してゆく。一文字が叫んだ。

「ポストマンズ・ポストオオオ！」

刹那、制服の各部分からゼリー状の物体が吹き出る。それは瞬く間に一文字とバイクを包み込み、ポストの形を作った。その後少々の間を置き、衝撃と共に着地。ジェルの弾力で跳ね返る。跳ねた空中でポスト状態を解除し、一文字とバイクは共に地面に降り立った。



その場所は誰かの家の庭だった。辺りには盆栽がいくつもあり、和風で落ち着いた雰囲気がある。

「すみません！ 村上チヨ様はいらっしゃられますか！ 郵便をお届けに上がりました！」

一文字がこの庭の持ち主に向かって声をかけた。村上チヨとは手紙の送り先の人の名である。しばらくすると、縁側に柔らかな笑みをした老女が現れた。

「あらあら、郵便屋さんかしら。遠い所までありがとうねえ」

「いえ、お構いなく。村上夏美さんからお手紙です」

そう言って一文字は出てきた女性に封筒を渡した。彼女はそれを開けて手紙を読み始めた。その姿を見届けて一文字が行こうとすると、彼女がそれを呼び止めた。

「ちょっと待って、郵便屋さん。返事の手紙を出したいの」

「へ？ いや、しかし、今読み始めたばかり……」

「もう読み終わったわ。自慢じゃないけど、速読は得意なの。そして、速書もね」

呆気にとられる一文字をよそに、彼女は縁側から奥の部屋への扉を開ける。部屋の中、テーブルの上には紙と硯と筆が用意してあった。彼女はそれらの前に座り、新しい紙を取り出し、細い筆を手にとった。その後はまさに一瞬の出来事、筆が紙の上で乱舞し、気付けば紙には大量の文字が現れていた。彼女は懐から封筒を取り出し、同じように一瞬で宛名を書き、手紙を入れ一文字に差し出した。一文字は大口を開けながらそれを受け取る。

「これ、孫までお願いするわね。そうそう、それから」

そう言って彼女はポケットから何かを取り出した。それはお守りであった。結構な年代ものらしく、布がところどころ痛んでいる。

「あの子、根はいい子なのだけど無茶するところがあってねえ。これも一緒に渡してくれないかしら」

一文字が開いた大口を閉め直す。そしてお守りを受け取り、言った。

「了解いたしました。お値段、八十円になります！」

電波塔。それは町の中央にあり、二十五メートルの高さを誇る建造物である。町のメールなどの各種通信電波をやりとりしており、高度デジタル化社会においてなくてはならないものであった。そして内部は一部を除いて一般開放されており、特に上層にある展望台は眺めが良く、町の人々に親しまれていた。

その展望台から夜に染まる町を眺める少女が一人。彼女の名は村上夏美、一文字に手紙を託した少女である。彼女はよくここに来る常連だった。

出した手紙は祖母に届いただろうか。そんな他愛のないことを考えていると、突然アナウンスが流れた。場所が場所なので普段このようにアナウンスが流れることはない。一体何事だろうか。

「……クッヒッヒ、ヒィーッハッハッハ！ この電波塔は僕がジャックした！ お前たちは今から人質だ！ 死にたくなかったら僕の言うことを聞くんだな！」

場違いな言葉が流れ、周りにいた人々がざわめき立つ。何が起こったのかと慌てていると、室内の大型モニターに男の顔が映った。伸び散らした髪に痩けた頬、ニタニタした笑いはいかにも悪人面だ。

「おっと、僕が現場にいないからって変な気を起こすなよ？ この電波塔に爆弾を仕掛けた。僕の指示一つでドカン、だ」

画面の中の男がそう言った。展望台がより騒がしくなる。男の言葉を信じて恐れおののく人、イタズラだと一蹴する人、状況をよく理解できていない人、状況の把握に努める人、それぞれが混じり合いパニック状態に陥った。

そんな時、不意に辺りに轟音が響いた。展望台が大きく揺れ、そこにいる人たちは皆口をつぐんだ。静寂が訪れる。その中に犯人が語りかけた。

「今のは警告だよ。君たちの今置かれている状況が分かったなら、大人しくすることだね。僕だって無闇に人を殺したくはないし」

その言葉に展望台の人々は威圧されてしまった。端の方で友人同士体を寄せあって震えている人もいる。誰も動かず、喋りもしない。まるで時間が静止してしまったかのようだった。

「待ってください！」

何者かがその止まった時間の中に一石を投じた。その声の主はあの少女、村上夏美であった。大型モニターに向かって彼女が続けて言う。

「無闇に人を殺したくないのなら、こんなに沢山の人質を取ることもないでしょう？ 私が人質として残ります。なので、他の人は解放してあげてはくれませんか？」

せめて他の人だけでも助けなくては、その思いからとっさに出た言葉だった。彼女の中に勝算があったわけではない。無謀とも言える取引であった。

「……ふうん、せっかく君含めてここにいる全員を人質にしてるのに、君以外逃がせて？ それ、取引として成立してないよね？ 馬鹿じゃない？」

犯人がそう言う。まずい、言うてはいけなかった。そう思って、少女が身構える。

「……けど、僕そういう勇敢な馬鹿は好きなんだ。今回は君に免じて他の人は逃がしてあげよう。せいぜい感謝することだね」

その言葉を聞いたとたん、彼女の全身から力が抜けた。奇跡的に、取引が通った。彼女がべたりと座り込んだところに、次々に周りの人たちが駆け寄ってくる。他の人たちだけでも助けられたことに、彼女は安堵した。そんな彼女に人々は感謝や気遣いの言葉をかける。

しかし、人々も彼女自身も分かっていた。彼女の本当の地獄はこれからだ、ということ。

高速道路を一文字が走っている。今度持っているのは、村上チヨ様から村上夏美様へ、先ほどとは差出人と宛先が逆の手紙である。このように届け甲斐のある手紙を一日に二通も配達できることは、一文字にとってはポストマン冥利に尽きることであった。彼が心地よくバイクを走らせていると、別のバイクが高速に乗ってきた。座席の上には男が直立している。

「……伊崎剣二か」

「そう身構えるな、ポストマン一文字凱。今はお前と戦う気はない」

そう言って伊崎は一文字と併走し始めた。レース勝負をしていた時が嘘のように、二人とも安全運転であった。気まずい沈黙が流れる。何をたくらんでいるのかと一文字が考えていると、伊崎がその沈黙を破った。

「……俺たちの集配地区に電波塔があるだろう。メールや電話の電波の中継所となっているヤツだ。あれがどこぞの馬の骨によってジャックされたらしい。人質を取って立てこもっているそうだ」

「ジャックだと？」

「人質にされたのはその時電波塔の展望台にいた一般人。ほとんどは解放されたようだが、一人だけ人質として残っている」

一文字は怪訝に思った。伊崎は無意味にこのような雑談をする人間ではない。何か意図があるはずだ。

「何を企んでいる？ 俺にはさっきの手紙の返信の配達がある。その事件に関わっている余裕はないぞ」

伊崎はそれを聞いてため息をついた。

「……そうか。それなら今の話はお前の仕事に関わることになる。人質とされた少女の名は『村上夏美』。どこかで見覚えはないか？」

「ッ！ お前、何故その名前を？」

「ニュースの映像に貴様に配達を頼んでいた少女が映った。もしやとは思ったが……やはりな」

「あの時、見ていたのか……」

「ああ、確かに。だが勘違いするなよ、貴様の様子が気になったのではない、手紙もなく巣に戻る貴様の無様な姿を拝んでやるためだ」

少女から手紙を受け取ったあの時。あれを見ていたならば、行きに手紙を運んでいたことを伊崎が知っていたのも頷ける。

「分かった。確かにそれなら静観してもいられない。すまない、礼を言う」

「フン、的外れなことを。貴様のためにやった訳ではない」

伊崎はそう言って目を逸らした。それに合わせて一文字も目線を前に向ける。その目からは一文字の固い意志が見て取れた。

「……それで、行くのか」

「ああ。この手紙に込められた彼女の祖母の想いを、そして彼女自身の想いを、守る義務が俺にはある」

「そうか……。ならば俺も同行しよう。あの電波塔を壊されては会社の業務も滞るからな」

二人が互いに目配せする。そして申し合わせたようにアクセルを握りしめ、スピードを上げていった。

次ページへ続く

二台のバイクがブレーキをかけて止まる。車もなく、人もいない夜の道路。電灯の明かりだけが寂しくアスファルトを照らしている。そしてその道路の先には、あの電波塔があった。

塔は各箇所ライトが設置されており、夜でもその全景が浮かび上がる。しかし今日だけはその明かりがひどく不気味なものに見えた。加えて大きさ。周りにあるビルの二倍以上あるそれからは、圧倒的な威圧感を受けずにはいられない。

「……ラジオによれば、この周辺の住民は全て避難しているらしい。塔に爆弾が仕掛けられており、それによる被害を懸念してのことだそうだ」

そう伊崎が一文字に伝える。一文字は黙ったままそれを聞き、塔の展望台に目を凝らした。明かりはついているが、遠すぎて中の様子までは見えない。

「あそこに、夏美さんが……」

「ああ、おそろくな。しかし爆弾もある、犯人を刺激しないように気をつけろ」

一文字が頷く。しばらくそのまま展望台をにらみつけていたが、不意に振り向いて伊崎に問いかけた。

「しかしどうやって救出する？ 犯人を刺激しないように、というならば馬鹿正直に正面から入っていけはしないぞ」

「ほう、あながち馬鹿でもないらしいな。確かに、正面からは無理だ。鍵もあるだろう。別の方法を考えるべきだな」

一文字が顎に手を添え思案を巡らせる。彼女を助け出す手段。とりとめのない非実用的な案が、浮かんでは消える。役に立ちそうなものをかき集めてみるが、一向にまとまる気配がない。

その様子を見ていた伊崎が口を開いた。

「……俺に一つ案がある」

「何、本当か！」

「ああ。犯人を刺激してはならないならば、犯人に気付かれない内に救出してしまえばいい。つまり、窓から展望台へと進入すればよいのだ」

伊崎のその案に、一文字は言葉を詰まらせた。

「確かに、それなら気付かれはしないだろうが……しかし、あんな高いところにどうやって行く？ 近くのビルに上っても、展望台の高さの半分にも満たないぞ」

「そこだ。まず展望台の高さは、目測で二十メートル弱。周りのビルは高くて約十メートル。その十メートルの差を補うのに……これを使う」

そう言って伊崎がバイクの座席の中から取り出したのは、一本の油性ペンだった。細字太字を使い分けられるためのものだ。それを指先で振りながら伊崎が続ける。

「俺が宅配の時に使っているペンだ。一本あたりの長さは約十五センチ。このペンは両端が平らで、次々と積んでいくことができる。そして俺は用心深くてな、インク切れが起こった時のためにこのペンを合計八十本近く携帯しているのだ。つまりだ。これを全て積めば単純計算で十

二メートル、展望台まで」

「ええい、伊崎！ 拡声器は持っているか！」

「何？ そんなものを一体どうするつもりだ？ 持っているが」

「貸せ！ 俺が犯人を説得する！」

「説得だと！ 待て、奴の神経を逆撫ですることだけは……」

「おおい！ 電波塔を占拠しているというテロリスト！ 俺の声が聞こえるか！」

一文字が自慢の大声を拡声器で更に拡大して叫んだ。不幸なのは伊崎である、彼の真横でその爆音に晒されたのだ。

しばらくの沈黙。電波塔からの反応はない。そもそも仮にその声が犯人に聞こえたとしても、一文字に聞こえるほどの音声で返答する装置が電波塔にはない。反応がないのも当たり前だ。そう伊崎は考えた。

「僕をテロリスト呼ばわりするとはいい度胸だな。警察か？」

が、その伊崎の予想に反して、周囲一帯に響く大音量で電波塔から返事が聞こえた。どうやら犯人は塔に手を加えて拡声機能を備えさせたいらしい。一文字がその声に答える。

「どこにでもいるポストマンだ！ 人質を解放してもらいたい！ 電波塔をジャックした理由を言え！」

その問いへの犯人の回答には少し間があった。

「理由……。理由だと？ そんなものは決まってる、メールという制度をぶち壊すためだ！ メールがあるから人は不幸になるんだ！ メール故に人は悲しまねばならない！ 僕はメールが嫌い！ だからメールを潰す！」

犯人が突然語気を強める。その言葉からは激しい怒りがはっきりと感じられた。一文字はそれに圧倒され、口をつぐんだ。しばらくの沈黙の後、ぽつりぽつりと、犯人が語り始めた。

「……僕には、恋人がいた。穏やかで優しい人だった。付き合い始めたのは大学でね、出身地はお互い離れていたから、卒業してからは遠距離恋愛を続けていたんだ。ほとんど会うことは出来なかったけど、それでも僕らは幸せだった。会えない代わりに文通をしていたからね。月に二回の彼女からの手紙が、僕の生きる活力だった。

ある時、彼女が携帯電話を買った、と手紙に書いてあった。彼女は機械オンチで、大学でも携帯を持っていなかった。その知らせに僕は飛び上がって喜んだ。これで毎日でも話ができるようになるぞ、ってね。

僕は早速彼女にメールを出した。話したいことはいくらでもあった。聞きたいこともたくさんあった。何かを思いつく度にメールにして彼女に送った。たくさんたくさんメールを出した。日に百は送ったよ。

最初の方はちゃんと彼女からの返信があった。僕の何通かに対して一通、って割合だったけど。でも何故か、段々とその返信は少なくなっていった。二日に一回、三日に一回、週に一回……。そして遂に、全くメールは来なくなってしまった……。

この間、久しぶりに彼女からメールが来たよ。大喜びで開いてみたら、ただ一言、『もう終わ

りにしましょう』。そうとだけ、書いてあった。今ではもう、彼女にメールを出しても、メーラーデーモンからオウム返しの返事が来るだけだ……！」

そこまで話して、犯人は言葉を切った。一文字たちはその話に絶句していた。犯人が話を続ける。

「……メールさえなければ、こんな悲劇は起こらなかった。メールさえなければ、僕たちは今でも幸せに文通していたはずだったんだ！ もう一度言う、僕はメールが嫌い！ だからまずこの電波塔を乗っ取って、メールの流通をぶち壊してやる！ 機械系の研究職についたことにこれほど感謝した時はないよ。手始めに、過去のメール履歴に無差別に絵文字を張り付けるウイルスをばらまいてやる！ ヒャハハハハ！」

啞然として話を聞いていた一文字が我に返った。高笑いしている犯人に向かって叫ぶ。

「な、なんて酷いことを……！ そんなことさせるものか！」

「クックク。知ってるよ、メールのせいでポストマンの商売もあがったりだそうじゃないか。そんなことを言っても、お前も本心ではメールがなくなるのを望んでいるんだろ？」

その問いに一文字は口を閉じたが、彼の意志は揺るいでいなかった。一文字が静かに続ける。

「……確かに、お前の言う通りだ。高度情報化社会で手紙の利用率は減り、ポストマンは苦しんでいる。メールがなくなれば、少しでもポストマンの現状は良くなるかもしれない。……だがな、ポストマンの仕事は『文字に込められた人の想いを守ること』だ！ 例えそれがメールであっても変わりはない！ だからこそ、お前は俺が止める！ それにお前のそれは自業自得、メールを憎むのはお門違いだ！」

そこまで言ったところで、伊崎が一文字から拡声器を取り上げた。表情からしてどうやら慌てているようだ。

「何をする伊崎！」

「刺激するなと言っただろうが！ 策もなしに挑発してどうする、馬鹿か貴様は！」

二人の言い争いが始まろうとしたその時、辺りがズン、と振動した。地震と似た、しかし地震のそれとは違う衝撃。その揺れは電波塔から来ていた。二人が身構える。

「自業、自得……？ お前に……何が分かるっていうんだ……？ ……殺してやる。絶対に許さんぞ虫けらどもオオ！」

犯人がそう言ったのと同時に、激しく地面が揺れ始めた。轟音が響きわたる中、それは起こった。夢か現か、目を疑いたくなるような出来事。電波塔が、動き出したのだ。

それは今や電波塔と呼べるものではなくなっていた。電気の配線やパイプが絡まりあって、太いひも状になったものが、塔の中程に左右二本くっついている。下方にも同じものが二本ついており、あろうことか塔はそれで「立って」いた。手長足長の巨大な化け物。そう呼ぶのがふさわしい外見であった。

明かりで作られた巨大なスマイルマークが電波塔の中ほどに浮かび上がる。可愛らしいとは到底言えず、もはやおぞましいと形容すべきほどだった。

「なん……だと……」

呆気にとられる二人。思考が現実には追いつかない。町のシンボル、二十五メートルの建造物。それが今まさに立ち上がり、動き出し、そして彼らに襲いかかろうとしてきている。

「どうだ……！ 電波塔型殺戮マシン、名付けて『デンパちゃん』だ！ ウェヒヒ、踏みつぶしてやるァー！」

『デンパちゃん』という可愛らしい名前にふさわしくないそれが、両足で歩いて迫ってくる。一步踏み出すごとに地面が揺れる。圧倒的存在感。全身を支配する恐怖を一文字は感じた。

「何をやってるポストマン一文字凱！ 貴様も早く逃げろ！」

その声で一文字は我に返った。伊崎は既にバイクに乗っていた。慌てて一文字が自分のバイクに跨るが、伊崎は彼を待たず走り出す。一文字もなんとかエンジンをかけ、その後を追う。

背後からは巨大な歩行音。心臓が痛いほど拍動する。アクセルを回し込もうとするが、既にフルスロットル。それでも後ろの音は離れていかない。前を走っている伊崎が言った。

「埒があかん、二手に分かれるぞ！ 俺は左、貴様は右だ！」

そう言うと伊崎は、車体を倒して目の前の分かれ道を左へ曲がった。一文字もそれに続き、無理矢理右へと方向を変える。車体が倒れ、膝が地面にかする。右の小道へと入ると、今度はタイヤが縁石にこすれた。遠心力に力づくで逆らい、無理矢理姿勢を持ち直す。

右手には先ほどより近く、大きくあの怪物が見えた。見ると足先には円盤状の分厚いコンクリートがついていた。それで周りの家々を踏みつぶしながらこちらに迫ってきている。あの巨大な足に踏み潰されては、ひとたまりもない。

大通りに出る。このまま横に逃げているわけにはいかない。左に曲がり、塔から離れる方向に進路を変える。後ろを確認すると、塔のスマイルマークと目が合った。背筋に寒気が走り、目線を前に戻す。足音の向きが明らかにこちらへと変わった。

走り続けていると、ふと視界が暗くなった。月が雲に隠れたか？ 頭上に目を向けると、そこには巨大な黒い円があった。

「うおあぁっ！」

思わず声を上げ、ハンドルを握りしめる。バイクが急加速。視界が明るくなり、背中のおすぐ後ろで轟音が鳴り響いた。地を揺るがす衝撃が走る。何とかかわしたが、息をついている暇はない。すぐ後ろに迫った塔は、既に逆の足を持ち上げている！

絶え間なく轟く振動。一文字は塔の踏みつけを紙一重でかわし続けていた。迫る右足。左にハンドルを切る。間一髪で射程から外れる。大きくへこむアスファルト。今はまだ何とかなっているが、このままでは踏み潰されるのも時間の問題だ。

突然上空で風を切る音がした。見てみると、塔が立ち止まって長い腕を横に振り抜いていた。何をしている？ 一文字は不可解に思ったが、逃げるチャンスと見てアクセルを握り直した。

前に目線を戻す。そして驚愕した。道の先で電柱が倒れてきている！ 塔は腕を電柱にぶつけていたのだ。倒れる前に走り抜ける？ いや、間に合わない。止まる？ 曲がる？ このスピードでは出来るはずがない。倒れた電柱が目の前に迫る。

一文字の体が宙に舞った。目に町の景色が映る。塔の怪物が映る。自分のバイクが映る。空と



月が映る。

気付けば、一文字は地面に叩きつけられていた。全身が粉々になったかのような痛み。何が起きているのか、一文字は一瞬分からなくなった。その一瞬、限りなく長い一瞬の中で、一文字は手紙のことを思い出し、少女のことを思い出し、自分のすべきことを思い出した。

「ここで死ぬ訳には……！」

体中の力をふりしぼり、倒れているバイクへと向かう。這いつくばって近づいていくが、後ろからは無慈悲にもあの足音が迫る。あと少し、ほんの少しというその時。辺りが一気に暗くなった。先ほどよりも深い、何も見えなくなるほどの闇。コンクリート塊がすぐ上にある。頭上に死が迫ってきている。

死ぬのか、こんなところで。自分のすべきことも出来ないまま。いやだ、死にたくない。いや、駄目だ。塔の足はもう手の届きそうなほど近くにある。潰れる。いやだ。死ぬ。いやだ。

「キーワードを叫べ！」

その時突然、声が聞こえた。どこかで聞き覚えのある声。その声に導かれるまま、言葉の意味も思い出せないまま、一文字は心に浮かんだ単語を叫んだ。

「トランスフォーム！」

バイクへと伸ばした手の先で、駆動音がした。機械の形が、組み変わる音。しばらく続いた後、堅いもの同士がぶつかる音を最後に、それは止んだ。

うってかわった静寂。塔の音も、機械の音も、何の音もしなくなった。全てが止まってしまったかのようにだった。そんな中で、一文字は気付いた。

「死んで……ない……？」

恐る恐る目を開けると、そこには二組の足があった。片方の足は、機械で出来ていた。赤を基調とした体に、腰にはバイクのマフラー。肩には車輪。そして、頭上のコンクリート塊を片手で支えていた。それはロボットだった。一文字の郵便バイク、『ポストサイクル』の、人間形態であった。

もう一方、やや遠くにある足は人間のものだ。その主は……。

「先、輩っ……！」

一文字と同じ制服を着た、しかし一文字より貫禄のある男。同じ地区を担当する、もう一人のポストマン。一文字凱の、先輩であった。

「危なかったな、凱。ポストサイクルの変形キーワードを覚えておいてよかった」

一文字の心の中に、安堵や歓喜、感謝の念が、ないまぜになって流れ込む。何か言おうと口を開くが、顎が震えてうまく喋れない。それを見かねてか、先輩が先に話し出す。

「俺との話は後にしておけ。まずはこのデカブツを何とかするのが先だ。一文字、ポストサイクルはお前の感情によって力を増す。あとは、分かるな？」

それを聞いた一文字は思い切り歯を食いしばった。自分の頬に平手を入れる。そして、雄叫びとともに立ち上がった。

「おおおおおおおっ！」

ポストサイクルがその声に答え、塔の足を両腕で跳ね飛ばす。電波塔が大きくバランスを崩し、辺りが一気に明るくなった。

「よくやった。あとは仕上げだ。教えておこう、グレートポストタイタンの変形キーワードは、『グレートユニオン』。奴を倒すのに必要になるだろう」

「ありがとうございます。……グレート、ユニオンッ！」

一文字が叫ぶと同時に、背後で爆発のような音がした。空中に巨大な何かが浮き上がる。それは、ポストマンの事務所だった。業務時間を過ぎて、人のいなくなった事務所が、ジェット噴射で宙に浮かんでいる。それとは別に、遠くの空に赤い点がいくつか現れた。あれも同じもの、使われなくなったポストマンの宿舍などが飛んできているのだ。建物の数は計五つ。見る間にそれらは一文字のところに集まり、空中で変形を始めた。右足、左足が現れ、地面へと降り立つ。そしてその上に胴が乗り、組み上がっていた腕がその両側に接続される。

ポストサイクルが一文字に手を差し出した。

『掴まれ』

ポストサイクルから声が聞こえた。どこかで聞き覚えがあったが、それがどこかは思い出せなかった。しかし、それが信頼できるものだと、一文字は直感していた。その手を掴む。

突然ポストサイクルが変形を始め、バイクの形態になった。差し出された手はハンドルになり、一文字は丁度バイクに跨る形になった。再びあの声が聞こえる。

『上だ』

「ああ、分かっているさ」

一文字がそう答え、アクセルを回す。バイクがタイタンの足に向かって加速する。タイヤがつま先に乗り上げ、そして臍にぶつかる。が、止まらずにその勢いで垂直になって足を駆け上る。足を駆け、胴を駆け、空中へと飛び出す。バイクは一文字を巻き込み変形し、巨大な頭となり下の胴体と合体した。

夜の町に出現した巨大ロボ。三十メートルの巨体は、塔の怪物にも引けを取らない。四千馬力の巨腕。地を踏みしめる両足。機械の巨人、グレートポストタイタンが、ここに降臨した。

「な、なんなんだ、お前は……。一体何が起こったんだ……？」

犯人の困惑した声。グレートポストタイタンの登場は、確実に犯人を混乱させていた。一方の一文字は頭の内部の座席の中から塔の怪物を見据えていた。

「一文字、聞こえるか？ 俺だ。タイタンの操縦を教えたい」

耳に入る先輩の声。無線機能があるようだ。

「分かりました。見たところ、レバーがいくつかあるようです。他には何もありませんが……」

「そうだ。基本的な操作はそのレバーを使って行う。動かしてみれば分かるだろう。細かい動作だが……タイタンもサイクルと同じく、精神力をエネルギーとして動くようになっている。それに伴い、行動も搭乗者の精神に基づいて行われる。一口に言えば、タイタンは心で動かすのだ」

「なっ！ 心だなんて……」

一文字がそこまで言ったところで、轟音と共に操縦席が大きく揺れた。塔が腕を鞭のようにぶつけてきていた。タイタンは大きくよろけたが、何とか持ち直した。

「出来ないと言っている暇はないぞ。敵は待ってはくれない」

「ぐっ、そのようですね……。分かりました。一文字凱、グレートポストタイタンを使いこなしてみせます！」

そう言うや否や、塔の逆の腕が飛んできた。一文字はそれを防ごうとしたが、タイタンは動かない。塔の腕はタイタンの無防備な脇腹に直撃した。

「ク、クハハハ！ なんだ、見かけ倒しのでくの坊じゃないか！ そんなちゃちなロボットなんて、『デンパちゃん』の敵じゃないぞ！」

混乱から立ち直った犯人が、更に腕の鞭を振ってくる。棒立ちのままそれに当たるタイタン。塔が続けて攻撃。タイタンはその連続攻撃の前にサンドバッグのように晒され続ける。

「ヒヤハハ、壊れる壊れるー！」

塔が腕の鞭を振るい続ける。それが当たる度にタイタンは右へと左へとよろける。が、不意にタイタンが右腕を動かした。丁度飛んできた塔の左腕が、それに受け止められる。

「ひょ？ い、いや、今のはまぐれさ。おら、もう一発だっ！」

塔が今度は右腕を振った。しかし、その前に既にタイタンの左腕はそれを受け止めに動いていた。塔の攻撃は空しく止められ、逆に攻撃した腕をタイタンに掴まれた。逆側の腕もいつのまにか掴まれている。

犯人は得体の知れないプレッシャーを感じた。さっきまで目の前のロボットは動かないでくの坊だったはずだった。圧倒的有利の状態にあったはずだった。しかし今、それに攻撃を受け止められ、その上腕を掴まれ動けなくなっている。

このロボットが動き出すならば、その能力は未知数。出方を伺うにも、こちらの動きは大幅に封じられている。

まずい。何とかしなければ。そう思った犯人が操縦席のスイッチに手を伸ばした。

「い、いい気になるなよ！ 僕特製のミサイルを喰らえェ！」

そのスイッチが押されると、塔の下方からミサイルが四つ、煙の筋を描きながら打ち上げられた。ミサイルが空中で向きを変え、タイタンへと向かっていく。激しい音を立て、一発目が着弾。走る衝撃。二、三、四発目が次々と着弾、爆発。そのたびに爆音が轟く。爆発が収まり、着弾した箇所からは激しい煙が立ち上る。タイタンの様子は確認できない。

「ククク、ひとたまりもないだろ。どら、鉄クズになった奴を拝んでやるか」

煙が少しずつ薄れていく。しかし中から姿を現したのは鉄クズではなかった。全長三十メートルの、巨大な赤いポストだ。

「ポストマンズ・ポスト、格納……」

一文字がそう呟くと、ポストを形作っていたジェルが急速に収縮していく。中から現れたタイタンには傷一つついていない。

「なっ……！」

犯人が驚いて言葉を失う。ミサイル四つの直撃を無傷で耐えるだと？ 計算外もいいとこだ。生まれる焦り。そしてそれ以上に心を占めるのは、目の前の物体への恐怖。

タイタンがゆっくりと歩き出す。一步一步、電波塔に近づいていく。

「や、やめて……」

後ずさる塔。タイタンが腰を落とし、塔へと走り始める。

「く、来るな！ やめろォ！」

走るタイタンが大きく腕を振りかぶった。

「う、うわあああああ！」

「うおおおおお！」

操縦席の中の一文字が叫ぶ。迫った塔に向かって、タイタンが握りしめた右拳を突き出す。その右拳は、塔のスマイルマークのど真ん中を貫いた。

「きゃあああああっ！」

その直後、塔の拡声機能から悲鳴が流れた。人質として捕らえられている村上夏美の声だ。一文字が動揺する。慌ててタイタンの腕をスマイルマークから引き抜いた。

「ぐっ、展望台のマイクがオンになってたか……。ク、クク、まあいい。おかげで僕も思い出せた。こっちには人質がいるんだよ！ さてお前、これでも僕に手を出せるのかな！」

そう犯人が言った。萎縮した様子はもうなく、すっかり威勢が戻っている。先ほどまで命乞いをしていた人間とは思えない。

もちろん一文字は彼女の存在を忘れていた訳ではない。だからこそ、展望台に近い塔の上部ではなく、そこより下のスマイルマークを狙ったのだ。しかし迂闊なことに、戦いの衝撃が展望台に伝わることは失念していた。一文字は唇を噛み締めながらタイタンの臨戦態勢を解く。

待ってましたとばかりに塔が手近な車を掴み、それでタイタンを殴り付けた。さながら車はボクシンググローブ、いや、むしろメリケンサックか。先ほどの鞭とは桁違いの威力の一撃を受け、タイタンが大きくよろめく。衝撃はほぼそのまま操縦席に伝わり、一文字の体は側面に叩きつけられた。

「ぐうっ……！」

何とか姿勢を戻し、操縦桿を握り直す。額に不快感。触ってみるとぬめりとした感触がした。手を見ると、ねっとり血液が付いている。袖で乱暴に血を拭い、タイタンを立て直そうとする。そうした所に、再びあの衝撃。電波塔の強烈な攻撃、今度の一撃は左フックだ。一文字が逆側の壁に叩きつけられる。

電波塔は両腕を振り回して車をぶつけてきていた。怒濤の連続攻撃、そしてその一撃一撃が重い。タイタンはどうかその攻撃に耐えていた。中にいる一文字は満身創痕。しかし見るに耐えない状態になりながらも、目の前の塔を睨み付けている。

その視線の先には、犯人がいた。電波塔最上部のフロアの前面がガラス張りとなって、そこから

コントロールルームと化した内部が見えている。そしてその中、中央の椅子で、犯人は鼻に付くニタニタとした笑みを浮かべていた。

しかし見えていたからと言ってどうなるだろうか。人質が向こうにある限り、こちらは手が出せないのだ。もどかしい。痛みより何より、一文字にはそれが堪えた。

人質さえなければ。夏美さんさえ助け出せれば。仕方がないとは言え、一文字はそれを考えずにはいられなかった。このままでは死んでしまう。しかし攻撃すればその衝撃が……。

その時、一文字はあることに気づいた。

されるがままだったタイタンが、突然塔の腕の根本を掴んだ。その行動を見た犯人が言う。「んん？ 何をする気だ？ こっちには人質がいるんだぞ。投げ技でもかけるつもりか？ まあなんにせよ、人質がどこかに頭をぶつけて死なない保証はないけどなあ……？」

嫌味のこもった声。しかしそれを聞いても、タイタンは掴んだ腕を離そうとしない。その上、動こうともしない。犯人は怪訝に思った。

「……何なんだ？ 何もしないなら離せよ」

そう呼びかけてみるも、やはりタイタンの反応はない。犯人が振り払おうとする。が、タイタンの力は強く、簡単には引き剥がせそうにない。

犯人は疑問に思った。こいつは何をしたいのか。何かしようとしているのは明白だが、その何が分からない。

そんな中、タイタンの操縦席で、一文字がぼつりと呟いた。

「衝撃で展望台が揺れるなら、動かないように固定して攻撃すればいい……！」

タイタンが塔を掴んだまま頭を大きく後ろへ反らした。

「へ？」

犯人が間の抜けた声を出す。しばらくぽかんと口を開けていたが、タイタンの頭が塔から離れきった瞬間に、一気にその顔が青ざめた。背骨に何か冷たいものを流し込まれたような感触。動けない犯人をよそに、タイタンの頭が塔へ向かって急加速。

「やめて、やめてやめてやめてえええーっ！」

十二分に速度の上がったタイタンの額は、ガラスを割りながら、塔のコントロールルームへと突っ込んだ。

犯人が目を開けてまず映ったのは部屋の天井。さっきの頭突きのせいでそこにはひび割れが走っていた。

犯人は頭突きの衝撃で床へと投げ出されていた。体がかなり痛い。ゆっくりと上体を起こすと、タイタンの目がガラスのなくなった窓越しにこちらに向いていた。その光景にぞっとして、へたりこんだ姿勢のまま後ずさりをする。しかし、タイタンは動かない。塔に頭突きをしたまま止まっているようだった。

「……動力がイカレたのか？ それとも操縦者が死んだのか？」

先ほどの頭突きの威力はすさまじかった。窓近くは瓦礫まみれになり、コントロールパネルの

半分はオシャカになってしまったようだ。こちらにそれほどの被害があったのだから、向こうにも相応の反動があってもおかしくない。

「ハハッ……。あれだけ大見得切っておいて、結局は自滅かよ。ま、僕のこのデンパちゃんに挑んできたのが間違ってたんだ」

犯人が鼻で笑う。余裕の勝利、とも言おうとしたが、コントロールルームの惨状を見て思いとどまる。この状況では電波塔はもうまともに動かさそうもなかった。時間をかけて作り上げた自慢のデンパちゃん。それを考えた犯人の心中にふつつつと怒りがこみ上げてきた。

「くそっ、奴め、よくも僕の自信作を……。こっちには人質がいるってのに、まるでお構いなした。折角だ、鬱憤ばらしにあの人質を殴ってでもこようか。ま、出来ればこのロボの操縦者の死体でもなぶりたいたいとこだが……」

犯人がそう言いながら立ち上がる。そこに声をかけられた。

「ほう、その操縦者を探しには行かんのか」

「当たり前だろ？ あんな所に突っ込んでいくなんて……え？」

犯人が振り向くと、そこには恰幅の良い男が立っていた。青い制服。胸に郵便記号。額からは血を流している。そして、郵便記号の下の名札プレートには、一文字凱と書かれていた。

「あ、お、お前、どこから……？」

「そこからだ。タイタンの操縦席は頭部にあるからな」

一文字が窓から見えるタイタンの顔を目で示す。この男が、この巨大ロボの操縦者。拡声器で呼びかけをしてきた、ポストマン。犯人の足が自然に引き下がる。

「死んでいなくて残念だったな。傷だらけではあるが、お前を倒す程度の体力は残っている」

そう言って一文字が拳を鳴らす。その行動に犯人はたじろぎ、両膝を付き、両手を地面に揃え、その手の甲に額を付けた。

「ご、ごめんなさいいっ！ ぼ、僕が悪かったですう！」

土下座。保身目的の、なんとも情けない、お手本のような土下座であった。一文字はため息を付き、両腕を下げた。そして犯人に質問を投げかけた。

「……ここから展望台に行くにはどうすればいい？」

「は、はいっ！ その扉から階段を下りればっ！」

「爆弾を仕掛けたという話だが、そのスイッチはどれだ？」

「あ、あれです！ 椅子の前のパネルに置いてある、あの赤いボタンです！」

犯人が指さした方向を見ると、なるほど確かに、赤いボタンの付いた「いかにも」な箱状の機械があった。パネルの脇の方に除けて置いてある。一文字は犯人から目を逸らし、そちらへと近づいた。そして、機械へと手を伸ばした、その時。

「死ねえええええええ！」

背後から襲いかかる影。土下座をしていた犯人が、いつの間にやらその手にナイフを携えて、一文字の背後に迫ってきていた。そのナイフが一文字の体へと接近し、鈍く、それでいて気持ちいい程に通る音。

一文字の右ストレートが、犯人の顎を打ち抜いていた。犯人が両腕を上げたままの姿勢で止

まる。黒目が瞼の裏側へと隠れ、ゆっくりと体が地面に崩れ落ちた。

「少し、そこで頭を冷やせ」

仰向けに倒れた犯人にそう言い放つ。そして、一文字は爆弾のスイッチを掴み展望台へと向かった。

階段を下り、展望台に来た一文字の目に飛び込んできたのは、手錠で手すりにつながれ、ぐったりとしている村上夏美の姿であった。一文字は慌てて彼女の元に駆け寄った。

「大丈夫ですか、夏美さん！ 目を覚ましてください！」

一文字の呼びかけに、彼女の瞼がぴくりと動いた。どうやら最悪の事態には至っていないようだ。一文字がほっと胸をなで下ろす。手錠を外す作業に取りかかろうとすると、気が付いたらしい彼女が口を開いた。

「……ポストマン、さん……？」

「気が付きましたか！ 助けに来ました。もう大丈夫です、安心してください」

そう一文字が彼女に呼びかける。彼女の声には力がなく、かなり衰弱していることが見て取れた。早く助けなければ。手錠を手取るが、よく考えれば鍵を持っていない。しまった、鍵はコントロールルームか。失敗したと思ったが、改めて見てみると、そもそもその手錠には鍵穴がなかった。一文字が疑問に思う。が、考えを深める前に彼女が一文字に言った。

「逃げて……ください……早く……」

「大丈夫です。少し手こずりそうですが、必ず助け出します！」

「けど……爆弾、が……」

「ああ、それなら安心してください。起爆スイッチは犯人から奪ってきました。ここにありますが、ほら」

一文字がそのスイッチを見せる。

「……えっ？」

彼女が素っ頓狂な声を出した。無理もない、犯人を倒してここに来ているとは彼女もまさか思わないだろう。

と、一文字は考えたが、しかし彼女の様子がおかしい。どう見ても単なる驚きの表情ではなく、何かを恐れているそれだ。まるで、見てはならないものを見てしまったかのような。うわ言のように何かを呟いている。

「そんな……じゃあ……あれは……なんで……？」

一文字が彼女の目線を辿る。その先には電波塔の大型モニターがあった。青地に白で、何か文字が映っている。

『バクツマデ アト 2:57』

その文字の数字の部分は、一文字が見ている間にも少しずつ減っていった。

「……え？」

一文字が彼女と同じ、素っ頓狂な声を出した。カウントダウン？ 何故？ 起爆スイッチは押

されていないはずだ。後三分？ 爆発する？ 頭の中に大量に疑問が乱れ交う。思考回路が空回りし、体が硬直する。

がちやりと、扉の開く音がした。驚いてそちらを見ると、犯人が扉を開けていた。殴られたせいか頬が膨れ上がり、その顔は見るに耐えない。犯人は壁にもたれかかりながら扉から出て、一文字を一瞥した。しかしすぐに目を逸らし、その目を大型モニターへと向け、そして押し殺すように笑った。

「く、くくく……。どうやら動作しているみたいだな。ダメージを受けた分少し心配だったが……流石は僕の爆弾だ」

「お、お前っ、一体何をした！」

「ここまで見てまだ分からないかい……。？ 偽物さ、お前の持っていったそれはね。本物のスイッチはあんな分かりやすい形なんてしてないよ」

一文字が立ち上がり、犯人に詰め寄る。怒りで肩が震えている。額が触れそうな距離まで近づき、睨みつける。が、犯人は薄ら笑いを浮かべたまま動かない。

「それで、どうする？ また僕を殴るか？ どうせ、みんな死ぬってのに？」

一文字が唇を噛む。確かに犯人の言うとおりに、腕力でどうにかなる問題ではない。

「……解除する、方法は？」

声を振り絞って、一文字が聞いた。

「ないよ」

即答。一文字の表情が強張る。

「爆弾はモニターの裏側、壁の中にある。コントローラーはもう破壊した。解除しようとするれば爆発する。ま、そもそも爆弾に辿り着けないだろうけどね」

一文字が犯人に背を向け、村上夏美の方へ歩き出す。その背中に、犯人は続けて言葉を投げかけた。

「言っとくけど、エレベーターはもう止まってるよ！ 逃げることだって出来ない！ 後はみんな仲良く死ぬしかないんだ！ 赤を切るか青を切るか、そんな選択肢さえお前等には残ってないんだよォ！」

歩いてきた一文字が手錠の鎖に手をかける。握りしめ、強く両側に引く。虚しく鎖の音が響くだけで、何も変化は起こらない。二度、三度、同じ事を繰り返しても、結果は変わらない。しかしそれでも、一文字はそれを繰り返す。

その手は既に血まみれだった。鎖の音がするたびに、手の肉がえぐれ、血液が飛び散る。そこに犯人が口を挟んだ。

「ハハハ、無駄無駄。千切れやしないって。お前だって分かってるんだろ？ 言っとくけど、それはダイヤモンド並の硬さのある特殊強化チタンを使って作った、僕特製の鍵なし手錠さ。一度つけたら外すことはおろか、壊すことだって出来やしない」

犯人の言う通り、手錠が千切れないことは一文字にも分かっていた。最初に数回引っ張った時点で、その絶望的な強度は伝わってきていた。



策があるわけではなかった。小数点以下の確率にかけたのでもなかった。もう既に、この現状が自分の力では打破できない、「詰み」の状態にあることは分かっていた。

彼がやっていることは、良く言えば、最後のあがき。しかし悪く言えば、自分への言い訳であった。「最後まで頑張ったのだから、それでいいだろう？」という、言い訳。そんなことでも、しなければやりきれなかった。そしてそんなことをしている自分自身も、一文字にはやりきれなかった。

「もう……いいですよ……」

彼女が、そう言った。一文字の手が止まる。

「もう、いいんです……。ありがとうございます。ここまで、来てくれただけで……嬉しかった。……謝らなきゃ、いけませんよね。巻き込んで、しまって……ごめん、なさい……」

そう言った彼女の瞳から、涙がこぼれた。一文字の心に、その言葉はナイフのように突き刺さった。

違う。違うんだ。その言葉を受け取っていい人間ではないんだ。鎖を掴む手が震え出す。体から力が抜け、一文字は膝から崩れ落ちた。心臓を貫いたその言葉が、ずきりずきりと鮮烈に痛みを全身に送る。四つん這いになり、目から鼻から体液を溢れさせつつ、一文字は吠えた。

「うああああああああつ！」

「情けないな、ポストマン一文字凱！」

その直後であった。何者かの声が展望台に響く。犯人の声でも、ましてや一文字や村上夏美の声でもない。窓の外から、その声は聞こえた。

窓の外、地上二十数メートルの空中に、その声の主は立っていた。浮いている？ いや、違う。足下に細く長い棒のようなものがあり、その上に立っている。一見では分からないが、その棒は油性ペンだった。大量の油性ペンが、縦に積み重なっているのだ。

その人影が、跳んだ。足下の油性ペンが崩れ落ちる。空中で一回転し、蹴りが放たれ、窓ガラスを粉々に砕いた。展望台へと男が飛び込んでくる。

「デリバリスト……伊崎、剣二……！」

その男の顔を見て、一文字が言う。伊崎剣二。その男はまぎれもなく、一文字のライバル、デリバリスト、伊崎剣二だった。

伊崎が辺りを見回す。そして村上夏美を見ると、彼女の方へと歩を進めた。途中、一文字にすれ違いざまに声をかけた。

「ふん、苦戦しているようじゃないか。らしくないな。貴様にはもう少し働いてもらうのだ、まだ休むには早いぞ」

一文字は通り過ぎる伊崎を目で追った。見ると、伊崎の右手には、いつの間にか白く輝くナイフが握られている。

伊崎は村上夏美の隣で立ち止まり、そしてそのナイフを振るった。すると眩い閃光と共に、彼女をつなぎ止めていた手錠が一瞬のうちにバラバラになった。破片が地面へと散らばる。

その場にいる人間は伊崎を除いて啞然としていた。犯人は元より、当の村上夏美本人も、突然動かせるようになった手首を見て当惑している。

「ダ、ダイヤモンド並の堅さの特殊強化チタンが……な、なんで……い、一体、何者だ……」

「一つ、俺の超電磁カッターはダイヤモンドをも切り裂く。二つ、俺はただのしがないデリバリストだ。覚えておけ」

犯人が独り言のように呟いた言葉に、伊崎は目もくれず答えた。そしてすぐ一文字に目を向けて言う。

「お膳立てはした。後は貴様の仕事だ、ポストマン一文字凱」

呆気にとられていた一文字だが、それを聞いて表情が変わった。

「……脱出、か」

「そうだ。貴様のことだ、あんな状態になりつつも、頭にそのプランはあるのだろうか？」

脱出のプラン。今の今まで、目の前には絶望しかなかった。村上夏美が解放されたとして、その後のことなど全く考えてはいなかった。その後があるとも、思っていなかったのだ。

「はっ、あるもんかそんなもの！ 空の孤島なんだぞここは！」

犯人がそう言った。そう、脱出のプランなんて……。

いや。確かに一文字はさっきまで考えていなかった。この時まで頭は空っぽ同然だった。しかし、手錠が壊れたことを認識した瞬間に、一文字の頭は回転を始めていた。今の状況、自分に出来ること、それらが一瞬で脳内を駆け抜けたのだ。

「いや……ある」

それらはパズルのように一文字の脳内で組み上がり、一つの形を成した。すなわちそれが、脱出のプランであった。

「正確に言えば、今、出来た。……すまない伊崎、お前のおかげだ」

「フン、例を言っている暇があるなら、早くそのプランを実行に移せ。時間も残り一分を切っているのだからな」

見ると、伊崎の言う通りモニターの残り時間は秒読みに入っていた。五十五秒。急がねばならない。

一文字は脱出の手段を二人に伝える……かと思いきや、そうはしない。伝えずに、犯人の方へと歩いていく。

「おい、何をしている！ 時間がないんだぞ、早くしろ！」

伊崎がそれを見て言った。しかし一文字は歩みを止めない。その先にいる犯人は、敗北を悟ったのか、既に両膝を着き、力なく俯いていた。

一文字は犯人の前で立ち止まった。そして、犯人へと手を差し伸べた。

「……それは、救いの手のつもりか？ はは、お笑いだね。この僕が、その手を取るとでも？ 早く行けよ。僕以外の人間がこいつと心中するのは不愉快だ」

犯人が精一杯の憎まれ口を叩く。しかし一文字はそれを気にする様子もない。

「そんなことで逃がすつもりはない。お前は、生きて罪を償え」

犯人が一文字を睨みつける。一文字は微動だにしない。四十一秒。見かねた伊崎が一文字に詰め寄った。

「何をこんな奴に構っている！ 間に合わなくなるぞ！」

伊崎が一文字の肩に手をかけたが、一文字は根が生えたかのように動かない。伊崎の焦りの表情が濃くなってゆく。三十秒。先に痺れを切らしたのは、犯人であった。

「ああっ……くそっ！ 分かった、行けばいいんだろ行けば！ 出られなかったら承知しないぞ！」

犯人が一文字の手を取った。取るやいなや、一文字は村上夏美の方へと駆け出した。犯人はそれに引きずられる形となり、伊崎は一文字と併走し始める。その先にいた村上夏美は、覚悟を決めた目で一文字を見つめている。

「それで、方法は？」

伊崎が一文字に訪ねる。

「ああ、窓から飛び降りる！」

一文字がそう答えると、犯人がゴム人形の潰れたような声を上げた。伊崎も一瞬言葉を詰まらせる。

「……ッ、何か策があるんだろうな！」

「ある！ 俺を信じろ！」

しかし一文字はしっかり伊崎に目を向けて答えた。二十四秒。村上夏美の元へ辿り着くと、彼女は何も言わずに頷き、一文字の手を握った。悲鳴を上げて逃げ出そうとする犯人の襟首を、伊崎が掴んで引き寄せる。

二十一秒。三人が窓際に立ち、一人が引きずられる。一文字が二人に目配せする。そして、全てを飲み込むような夜の闇に向かって、跳んだ。

電波塔の展望台から人が四人、地面へと加速していく。一文字の左手は村上夏美の右手を握りしめ、一文字の右肩に伊崎が右手を起き、伊崎の左手は犯人の首根っこを掴んでいる。一文字は空いた右手でベルトの金具を引きちぎり、下に向かって投げた。そして叫んだ。

「ポストマンズポストォ！ 展、開っ！」

その声に応え、ベルトの金具がジェルを噴出した。すぐに下でポストが出来上がったが、ベルトだけのせいか、形がいびつだ。出来たポストが風圧で一文字の足下に押し付けられる。

「……さかっ、それだけじゃ……かる……！」

伊崎が後ろで何かを叫んだが、豪風でほとんど聞き取れない。それに構わずに一文字は叫んだ。

「タイタァァーン！」

それと同時に、頭を電波塔に突っ込んでいたタイタンが動き出した。刹那、四人の下にタイタンの巨大な手が差し入れられる。手は下に移動しつつ、四人との速度を落としている。

ポストの位置を整え、村上夏美を抱き抱えて庇いながら、一文字がその手へぶつかるように着地した。伊崎と犯人もそれに続く。ポストの弾性で少し跳ね、全員が手のひらの上に乗った。タ

イタンが手にブレーキをかける。這いつくばっている四人に、下方向への強烈なGがかかる。十四秒。

タイタンが自身の姿勢を直す。十二秒。姿勢を低くし、四人の乗っている手を抱えるように腹部に持ってくる。十秒。電波塔に背を向ける。八秒。距離を取るように歩き出す。五秒。歩く。四秒。が、離れきれない。三秒。しゃがむ。二秒。タイタンが四人に覆い被さった。一秒。

ゼロ。耳をつんざくような爆音が辺りに轟いた。高音なのか低音なのか、それすらも分からないほど激しい音。鼓膜が破れそうになる。爆発の衝撃がタイタンに響く。焼け付くような爆風が辺りを駆け巡る。

程なくして、爆発は収まった。

地面へと降り立った時には、辺りはうってかわって賑やかになっていた。消防車が走り交い、パトカーも何台か集まってきている。避難していた住人だろうか、野次馬も相当数集まっているようだった。報道関係のものと思われるヘリコプターが上空を飛び回っている。

降りてきた一文字たちの周りに、すぐさま警官が集まってきて、質問を雨のように浴びせかけた。一文字は疲労困憊でろくに答えられなかったのだが、なんと犯人が前に出てきて警官に事の全容を説明した。それと同時に自首をし、連行される犯人が今度は手錠をかけられる側となった。

犯人と警官たちが行ってしまうと、今度は伊崎が言った。

「結局電波塔は粉々になってしまったか。ちっ、全く仕事が増えて困る」

そして、一文字たちとろくに話もしないまま、伊崎は夜の暗闇へ姿を消した。

「行って……しまいましたね」

村上夏美が一文字に語りかけた。

「そう、ですね」

一文字が穏やかに答えた。一つの大きな事件が完結した。今日一日だけで本当に沢山のことがあった。危ない場面も多々あったが、時には閃きで、時には助けられ、それらを突破することが出来た。だからこそこの結末を迎えることが出来たのだ。

「……でも、まだ仕上げが残ってる」

「仕上げ、ですか？」

一文字が呟いた言葉に、村上夏美が小首を傾げた。不思議そうにしている彼女をよそに、一文字は制服の内ポケットをまさぐる。彼がそこから取り出したのは、一通の封筒であった。

「村上夏美様。村上チヨ様から……お手紙が、届いております」

一文字がそう言って、その封筒を差し出した。それを見た彼女が、心底驚いたように目を見

開く。しかし次の瞬間、彼女の顔には、満面の笑みと少しの涙が浮かんでいた。

「ありがとう、ございます……！」

彼女はその手紙を、しっかりと受け取った。

その後、数ヶ月もした頃。やはりというかなんというか、一文字は変わらず仕事をしていた。変わらず朝はポストを開き、変わらず少しため息を付く。そんな生活。

少しだけ変わったのは、ほんのちょっぴりポストに手紙が増えたことと、その手紙の中に、たまに彼宛のものが混じるようになったことだ。

それを読んで一文字は、配達の活力と少しの元気をもらう。そして今日も、手紙を人々へ届けるのだ。

終

神楽～春～

(著：東 かおり)

晴れた空はかすんだ青で、吹く風は柔らかな緑をなびかせている。そこに小鳥や蝶が飛びまわってれば、穏やかな野原の風景だろう。

がつん。うらかな野原には小鳥の声ではなく鉄の鋭い音が響き、蝶ではなく土埃が舞った。二つの影が、刃を持って野をかける。前方の影は地面を滑るように走り、両手には細身の刀を二振り握っている。一方、俊足で追い上げる者は、鋭い眼光で前方をとらえ、鋼鉄の刃を輝かせた薙刀をぶん、と振るう。

「ひゃあ！」

逃げる方は紅い目を恐怖で見開いた。頭の長い耳が周囲の音を感じ取るなり、次々と後方から放たれる衝撃波を、大きく左へ跳躍してよけた。前方の若草色の地には黒く焦げた部分が出ていた。それをみて、走る速さはいっそう速くなる。自慢の健脚で、風よりもはやく野を駆けていた。

(急がねば逃げねば。この地から出ねば.....喰われる！)

抜いたことのない刀を振ったところで、背後から迫りくる存在に対して太刀打ちできないことは、刃を交えて分かった。薙刀の攻撃を受け流そうとしたとき、危うく刀ごと真っ二つに断たれるところだった。

風が真っ向から吹いてくる。腕がじいんと痺れる。向かってくる空気のかたまりの間をすり抜けるように、柔らかな地面を思い切り蹴って左、右、と交互に跳んで走る。それにつられて白く長い耳が揺れる。

ばしゅ。灼熱の空気が放たれる音がした。後ろを振り向かずとも正確に把握できる。が、攻撃の幅が広がったせいか、つんのめった。耳の先に赤い血がにじむ。

「う！」

態勢を立て直せず、そのまま地面に倒れこんだ。

「ひゃ！」

顔前に、大きな鋼鉄の刃が地面に突き立てられる。少しでも動けば、顔が縦に両断されるだろう。

ずん。追ってきた薙刀の使い手がしゃがんで、向かい合うようにして見下ろした。黒い髪は短く、太く凜々しい眉の下には、褐色の鋭い目があった。まるで、爪で押さえつけた獲物を品定めする鷹のようだ。

「その長い耳に紅い目.....。お前、跳人(はねと)だな。遠い北の地にいるお前が、なぜ南の土地へ来た？」

答え次第では、腕を傾けて獲物を両断せんと、薙刀の刃を、突っ伏したままの跳人と呼ばれた

者の方へぐっと押した。

「ど、どうかお許しを！ 私はこの土地を守る隼人(はやと)にことづてを伝えるために、ここへ来たのです！」

金縛りにかかったように、体が動かない。紅い瞳がさらに見開かれてふるえた。それに対し、見下ろす方は凜々しい眉をひそめただけだった。

「我等にことづてだと？ 俺はただ、この土地に許可なく入ってきたものを追って捕まえようとしただけだ」

「え……。私を喰らおうとしたのでは？」

「はあ？」

柔らかな草が跳人の白い頬をなでる。野の花の香りがふわり、と風に乗って漂った。

「ははは。喰らうことはせぬよ。我等隼人はこの土地を守る者として、正当でない方法で異郷の地のものが入れば、即座に捕まえるのだ」

豪快に笑う隼人の隣には、体を起して長い耳をなでる跳人がいた。先程切れた耳の先にはもうかさぶたができていた。まだ首筋に薙刀の気配が残ってむずかゆいのか、何度も首に手をあてた。

「だ、だって、あなたすごい形相だったじゃないですか。逃げるしかないでしょう。それに、この土地の注連縄(しめなわ)をくぐる前にちゃんと言いましたよ。跳人の使いだって。隼人に会えないかって。そうしたら、いつの間にか注連縄の向こう側の、野原の中にいたんです。それでなぜかあなたに追われていたんです」

隼人の瞳が光った。跳人はびくっとして、ぶるぶる震えた。

「ほ、本当ですってば」

「門番がいたはずだが？ 会わなかったのか？」

隼人が薙刀の柄を持ちあげ、詰め寄った。萎縮しきっている跳人は、隼人の目から離れられなかった。

「し、知りません。注連縄のところには誰もいませんでした」

隼人は手を顎にあてて唸った。

「門番がいなかったのはおかしい。何か異変があればすぐに我等に伝わることになっている。だが伝わっていない。一体どういうことなのだ」

隼人は眉間にしわを寄せた。跳人はおずおずと、切り出した。

「あの……。本題の、ことづてなんですけど……。命令に近いかな……。今度の冬に『神(かみ)世(よ)』と『幽(かくり)世(よ)』が重なる時が来るそうです。それについて、操人(みさと)が彼らの地で話し合いたいから、集まれとのことなんですけど……」

隼人の目がかっと開かれた。跳人は危うく後ろへ倒れるところだった。

「ついて来い、跳人！」

隼人はさっと立ちあがると、すたすたと歩き出した。跳人はすこし戸惑って後を追った。

「あ、あの。わ、私は跳人の雪(せつ)良(ら)と言います。あなたは？」

隼人は後ろを振り返らずに、声だけ跳人に投げた。

「隼人の飛揚(ひよう)だ」

この世界は三つの『世』で成り立っている。鬼や神の住まう『神(かみ)世(よ)』、死んだ魂のゆく『幽(かくり)世(よ)』、そして生きる魂のいる『現世(うつしよ)』とよばれる世界。それらの世界は互いに触れ合ったり離れあったりして四季をなす。『神世』が『現世』と重なる部分が多くなれば、新しい命が『現世』に流れ込み、春になる。『神世』がだんだんと離れて『現世』の中で命が栄え、夏になる。『幽世』が近づけば魂のともしびが弱くなり、秋になる。そして『幽世』が大きく重なると死にゆく魂は『幽世』へ旅立つ。

そのめぐりの中で、七年に一度だけ『神世』と『幽世』が重なりあうときがある。その時生きる魂も『幽世』へ連れて行かれてしまう。それを防ぐために、結界を張り巡らせ、『神世』と『幽世』の神々を管弦や舞で慰めて守ってくれるよう祈りをささげる。

それらの役を担っているのが隼人と跳人、操人である。

跳人は紅い目と長い耳、そしてその雪色の肌を特徴とした。その長耳は神々の声を聞くことはもちろん、たとえ山一つ隔てても仲間の声が聞こえるという。抜群の瞬発力と跳躍力は一族の誇りだ。厳寒の下で育まれた彼らの霊力とそれによって織りなされる結界は強力で、一瞬で何重もの結界を強固な盾として展開できる。背中の中の長い二振りの刀は護身用だが、戦いを好まぬ彼らはめったに抜かない。

隼人は、圧倒的な戦闘能力をもつ一族で、右に出る者はいない。褐色の瞳は鋭くも深遠で、まるでずっと遠くを見て絶えず獲物を探すはやぶさのようだった。視力は放たれた矢や振り下ろされる剣の動き一つ一つを視ることができる。人のかすかな動きからその人の心の中まで鑑(み)えてしまうほどだという。また、隼人は武術のみならず『隼人(はやと)舞(まい)』と呼ばれる神をも慰める舞を持っている。

そして、操人はあらゆる知識に関して隼人や跳人を凌駕している。そのため、この三つの世界の境界を隼人や跳人を通して見守り統括している。

柔らかな草が風に揺れて足に触れる。空はかすんで、日差しも温かかった。春の風情だ。長身の飛揚の踏み出す一步についてゆくのに、雪良は小走りで三步踏み出さねばならなかった。彼の身長は、耳をぴんと立てても飛揚の胸辺りまで歩かないかだろう。

会話も無いまましばらく進むと、前方になだらかな丘が見えた。翡翠色の丘陵と柔らかな空の色が鮮やかに映えていた。突然飛揚が立ち止まった。危うく雪良がその背中にぶつかるころだった。

「着いた。ここだ」

雪良はひよい、と飛揚の隣へ跳んだ。眼前には、大きな門がどんと構えていた。陽に輝く黒い瓦屋根の両脇に、白い塗り壁が翼を広げたようにのびていて、様々な凶形にくりぬいた弓矢の狙い窓がついていた。その壁越しに松があった。その遙か背後に、緩やかな丘が見えた。

「うわあ。ここが、隼人の砦……」

豪壮な門をくぐりぬけると、松林へ通じる道がのびていた。道を歩くと、香ばしい松の香りが



ふわりと立ち込めていた。さらに進むと、白木でできた大きな鳥居が現れた。鳥居の柱の周は、跳人なら二十人、隼人でも十人の大人が腕を伸ばしてめぐっても足りないくらい、太い。隼人の地域ではこれほどの大木がとれるのだと思うと、雪良はこの地のもの全てが大きく見えた。敷き詰められた玉砂利の向こうには、板葺きの社が厳かな雰囲気纏ってたたずんでいる。この裏手に、修練場があるという。巨大な鳥居の前を横切り、林を抜けて開けたところでみると、再び立ち止まった。目の前の右側には先程の門をより小さくしたものが構えてあり、左側には立派な瓦屋根のふかれた邸が見えた。

「向かって右が我等隼人の舎(とねり)へ通ずる門だ。長さまのいらっしゃる邸はこっちだ」

飛揚は左の方へ足を進めた。門は無く、そのまま邸の階(きざはし)へ向かう。太い丸木を横に渡した欄干の向こう、廂のところに中年の男が二人座って話していた。特に右側の、階に腰かけている男は飛揚にそっくりだった。

「長さま。今、よろしいですか」

飛揚が二人に話しかけた。左側の、ひげを生やした男が飛揚を見て、次いで雪良を見た。男の鷺色の目が大きく開かれて、雪良は飛揚の背中に隠れたい衝動にかられた。

「おお、跳人のものが、はるばるこの地まで来るとは。何事かな」

長の声は穏やかだったが、どこか抜身の鋭い刀を思わせた。

(隼人って、しゃべり方も鋭いのかな……)

雪良は背中がぴりぴりして仕方なかった。

長は階を下りて、二人の前に立ち止まると、飛揚が跪いたので、雪良もそれに倣った。警戒と恐怖で、長い耳が思うように動かず、だらり、と地面に垂れていた。長に踏まれたらたまったものではない。自己紹介をすませると、長は歓迎の言葉を述べた。

「さて、雪良殿、跳人の長さまから何を仰せつかりましたか？」

雪良は不思議に思った。抜き身の刀はいつの間にか頑丈な鞘におさめられたようで、今は親しみやすい雰囲気を纏っている。その早技にあっけにとられた。

「は、はい。私達の長が神の声を拝聴し、七年に一度『神世』と『幽世』が重なる時が、今年の冬にあるとのこと。操人もそのことを導き出し、隼人へこれを伝え、ともに操人の地へ集まれとのご命令です」

それに続いて飛揚が、雪良を感知できなかったことと、門番の不在を述べると、長は腕を組んだ。飛揚と同じく、考えるときは瞳の色が暗くなる。

「我等も神の意志を鑑(み)た。その兆候がもう出始めているとは。門番が消えたのではない。おそらく兆候の一つであるあわい(、、、)に雪良殿が入りこんでしまったのだろう。一瞬にして注連縄を越えて隼人の領土に入っても、我等が感知できなかったこともうなずける」

先程長と話していた、飛揚によく似た男が、階を下りてきた。

「何やら、この土地でも兆候がみられたようですね。『幽世』に引かれていくよりも、あわい(、、、)に連れて行かれた人々の数が、前回は多かったですね。操人も前回の時のような惨劇を見たくないのでしょう。早く対策を講じるために、隼人と跳人を招集させたいところが、今このような状況が起こったとはね」

「兄上……」

飛揚がそうつぶやいた。今の状況が一瞬で理解できたらしい。あわいがこの土地で見られたということ。それが、来る大事の並はずれた大きさと危険の高さを物語っているということ……。

兄上と呼ばれた男は飛揚と雪良を立たせ、舎へ案内した。長は今晚また話しあいを設けようと、二人を邸へ来るよう言った。

三人は長の邸を出て、先程の舎の門をくぐった。

「ここが、隼人の舎……」

この地へ訪れたときから、雪良は驚きっぱなしだった。細長い家が何列も配され、一つの屋根に戸がいくつも等間隔に並んでいる。雪良の土地では見ない造りの家で、隼人たちがそこから出入りしていると、まるで大地に横たえられた巨大な鳥の巣箱だ。

飛揚の兄がそのうちの一番手前に立ち止まり、引き戸を開いて案内した。土間の左脇には小さな竈(かまど)があり、そのすぐそばに雪良の首まで高さのある水(みず)甕(がめ)が一つ、どんとあった。土間の右脇は武具が立てかけられるようになっているが、土間をあがると、奥の明かり障子のすぐ下に、縁に蒔絵(まきえ)の施された文机(ふみづくえ)があった。

「ここは以前飛揚の部屋だったが、使ってくれ。飛揚、お前はいつもの部屋を使え。このあと長さまと話をせねばならんのでな。時間になったら来い」

飛揚の兄はそう言ってすぐ外へ出て行ってしまった。雪良は改めて周りを見た。広すぎず、狭すぎず、質素ながらもきちんとした調度品がおさまっている。

「飛揚さんは……、あれ？」

後ろを振り返ると、飛揚の姿は無かった。文机が、傾きかけた日の光でひかっていた。

背中の中振りの刀をおろすと、ふっと身が軽くなった。伸びをした後、武具立てに立てかけて外へ出た。行き違うものは皆、髪は褐色か黒で短く、長身だった。それに対して長い耳を持ち、白く短い髪に背の低い雪良は異様に浮いていた。雪良にしてみれば、杉の木のようにすらっと背の高い人が歩いていることが異様だった。あんなに背が高くて、風当たりなど強くないのだろうかと心配した。しかし野原での飛揚が追いかけた様を見れば、空を切る槍のようだ。門とは反対側の、細長い舎に沿って歩くと、井戸があった。そのそばに松が一本、植えられていた。

「松はどこでも生えているんだな」

雪良の住んでいるところは『幽世』の影響を一番受けやすい地域だった。雪に覆われた地面から煙の出ている霊山は彼らの聖地だった。その麓には松と杉出できた林が広がっていて、短い夏になれば、松や杉の香りをのせた霧が立ち込める。そこで身を清め、そばを流れる小川のせせらぎで耳を清め、霊山に上り、神の言葉を聞く。

松の木に近づくと、どこか懐かしくて、身の引き締まるようだった。井戸にもたれて中を見ると、闇で底が見えなかった。狭くて円形の底なしが、まるで大蛇の喉に見えた。

「おい、雪良。こんなところにいたのか。日も落ちる。そろそろ長さまの邸へ行くぞ」

いきなり背後から声をかけられて、前へつんのめった。あやうく井戸の中へ落ちるところだった。空気のほんの些細な動きさえもこの耳で感じ取れるというのに。飛揚は霧なのだろうか。

「ふあ！ は、はい！」

慌てて振り向くと、既に飛揚は歩きだしていた。

長の邸に再びたずねると、世話係が二人を中へ案内し、部屋へ通された。既に何人か席についており、奥には長が胡坐をかいて酒を飲んでいた。飛揚の兄がその隣に座っていた。飛揚は兄の右隣に、そのさらに右隣に雪良がついた。全員が集まったようで、長は雪良を見て陽気に言った。

「さあ、雪良殿。長旅で疲れた体には滋養のあるものが一番。どうぞ、遠慮なく召されよ」膳の上には珍しいものばかりで、食べ方が分からず、どうしていいか分からなかった。長は、そんな焦る雪良の様子を見て、闊達に笑った。

飛揚の食べ方をまねて、なんとか平らげることができたところで、長さまが話を切り出してきた。

「まず、誰が雪良殿と同行するかを決めねばならぬな」

雪良はおどおどと答えた。

「跳人の族長が、『使いのものが隼人の地で最初にあったものを同伴せよ』と神からの声を聞きました。なので、僕が最初に会ったのは飛揚さんです」

長の瞳が蝋燭の炎を受けて輝いた。ゆっくりと飛揚の兄を通りすぎ、飛揚の方へ向ける。

「飛揚よ、跳人の雪良殿と一緒に操人のもとへ行ってくれるか？」

飛揚はまっすぐと長の顔を見た。

「神のご意志とあらば」

「よし。しっかりとその勤めを果たせよ。では、次は出立の日ですな。荷づくりのこともあろうし、明後日がよいかと思うが、どうか？」

「良いかと思われませう……」

話は早く進み、結局明日まで隼人の舎にいることになった。雪良の分まで整えてくれるという。

雪良が退席したところで、もてなしの宴は終わった。次々と退席していき、部屋にいるのは長と飛揚の兄、飛揚だけとなった。

「翼(よく)驚(しゅう)、分かってくれよ。神のご意志なのだ」

長は翼驚と言われた、飛揚の兄を静かな眼差しで見た。

「分かっております。飛揚が隼人舞を立派に舞うという大きな役目を果たしてくれることを祈るばかりです」

長は大きくゆっくりと頷いた。

「よくぞ言った。流石、我が甥のことはある。そなたらが父も、あの時『隼人舞』を舞って、あわいに引き込まれなければ、榮譽となろうに。飛揚よ、くれぐれも父の二の舞を踏んではならぬぞ」

飛揚は視線を下に向けた。正直、隼人舞を舞うのが兄だろうが、自分だろうが、誰がやるかが

問題で無いのはすぐ分かった。長は安心していらっしゃる。長には子供がいない。唯一血のつながりのある翼鷲が継ぐことを望んでいらっしゃる。

「はい。隼人の名にかけて」

もてなしの宴も終わり、雪良は先に席を立った。皆体を気遣ってくれて、委縮せずに退席できた。廂を歩いていると、冷たい夜気が酒でほてった顔をなでた。隼人の酒はとても強かった。いくつも盃をあおっても、酔った様子を見せなかった長さまは豪傑な方だと思った。

この地へ来る前、そのあわい(、 、 )に取り込まれた。雪良自身はとりこまれたという感覚は無かった。ただ、空気が少しずれているというか、ひずみと言った方がいいだろう。風と風の間にいるような、そんな感じがした。

(あれが、あわい(、 、 )か)

空は晴れて、満天の星が瞬いていた。しばらく欄干に寄りかかって、酔いを覚まそうとした。

「雪良、お前の土地では、星は見えるか？」

ひどく落ち着いた声が背後からした。酒がまわっているのか、それほど驚かなかった。

「え？」

「北の地では、星座が見えるか？」

星座は見える。少し、形が違うけど。

「私達のいる土地では、もう少し瞬きが少ないです。星座も同じものが見えますが、位置が若干違います」

北の空に見える、ひときわ白く輝く星が一点あった。

「あれは私達の土地でも見えます。位置も同じです。名前は北極(ほっきょく)と言います」

「隼人の地ではあれを太一(たいち)という」

「同じ星でも、名前が異なるのですね」

雪良は自分でも饒舌になっていることが分からなかった。それを気にすることなく、飛揚は話を切り出した。

「そう言えば、明日の朝、修練場に行ってみないか？ 跳人の技を見てみたい」

跳人の技と言っても、そもそも戦を好まぬ一族だ。戦いの術など、隼人一族に比べれば子供の遊び程度だ。腕が少しじいん、とした。

「見たでしょう？ あれくらいしかできません。相手になりませんよ」

飛揚が口をつぐんだのが、空気を通じて分かった。そして、こちらの気を探っているのも。もう分かっているのかもしれない。心を鑑ることができる隼人なら、とっくに。

「ついて来い、雪良」

「え？」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。満天の星空が闇に飲み込まれたと思った。事実、雪良も飲み込まれた。その感覚がした。

目を開けると、そこは別空間だった。雪良の与えられた部屋の何倍もあるところだった。い草(、

、)の香りのする青畳が広がり、障子には様々な動植物が色とりどりに描かれていた。上を向くと天井には、燃えるような翼をはためかせて大風を吹かせんばかりの鳳凰と、今にも体をくねらせて動き出しそうな龍が描かれていて、どの位置に立っても目があった。

不思議だった。絵というものは違う方向から見れば違う面をみることになるが、この天井図は常に一定だ。

「それは八方睨みの龍と鳳凰の図だ。どの位置で立っても、その絵と目が合うようになっている」

飛揚が穏やかにそう言った。ぼうっと雪良は焦点の合わない紅い目で天井図を見た。

「まるで、北極のようですね。私達がそれを取り巻く星のようだ」

雪良のそばに飛揚が腰を下ろした。いつの間にか手には、とっくりと杯を持っていた。酒が入っていると、雪良の方がまだ頭が冴えているようだった。

「まあ、飲もうか。長旅ご苦労ということで。そして、操人の地まで、よろしくな」

初めて野原で出会った時の飛揚の印象とはうって変わって、今日の前にいる隼人は夏の風のようにすがすがしかった。

「なあ、跳人は隼人の舞を知っているか？」

無理やり持たされた盃に、酒をなみなみ注ぎながら、飛揚は尋ねた。

「聞いたことはありますが、見たことはありません。七年に一度の一大事の際、『神世』と『幽世』の神々を慰めるという舞のことですね」

飛揚はゆっくりうなずいた。

「ああ、『隼人舞』という。跳人にはそのような舞は無いのか？」

雪良は饒舌に話した。

「跳人には『兎の遊び』という曲目がありますね。門外不出といわれています。操人さえ知らないものです。そうそう、七年に一度、『神世』と『幽世』が重なる時、跳人は神々がこの世を行ったり来たりするという意味を込めて『御神渡(おみわたり)』と言います。その『御神渡』に跳人は『兎の遊び』を演奏するのです」

飛揚が目細めた。

「操人も知らないのだろう？ なぜ彼らも当然いるはずの『御神渡』で演奏するのに知らないのだ？」

雪良が悪戯っぽく笑った。

「それはですね、いろんないわれがありますけど、跳人以外その曲目を覚えてられないような細工がなされているそうなんです。隼人や操人は忘れてしまうように。どうしてそうする必要があるかは分からないけれど」

「そうか。『兎の遊び』、一度でいいから聞いてみたいものだ」

もう、分かっているかもしれない。雪良の心など、とっくに看破されているだろう。飛揚はそれを分かってここに呼んだのだろうか。酒を一気に流し込むようにして飲んだ。喉が焼けつくように熱くなり、頭が余計にぼうっとした。

「兎は神を癒す音楽を知っている。隼人は神を慰める舞を知っている。兎と隼人が操人の里へ向かい

、それぞれの方法で神樂ませ、慰めたとき、神々と意志が疎通でき、生ある魂を守ることができる」

飛揚がぼつり、と言った。雪良もよく知っている古い言葉だった。

「『幽世』を司る跳人と『神世』を司る隼人。そして『現世』を司る操人。『御神渡』のとき、あわい(、)、)に引き込まれやすいのは跳人と隼人であると聞いたことがあります。その世界と関係が深いから……」

隼人が雪良の顔をまっすぐ見た。最初で会った時の、鋭い眼差しではなく、憐みの眼差しで。「知っている。俺の父親も『隼人舞』を舞った後、あわい(、)、)に引きずり込まれた……。そして、今回の『御神渡』のとき、引きずり込まれるのは……」

雪良はとっさに隼人の目を両手で覆った。

「どうか、それ以上私を鑑ないでください！」

必死だった。声が出ないように、強く唇をかみしめた。全身が震えた。目の前の隼人は自分の運命を、跳人の心から鑑てしまった。

雪良は知っていた。聞きたくもないのに、長から聞かされていた。雪良が最初に会った隼人とともに操人の地へ赴き、『御神渡』の役目を果たすと。そして、今回はどちらかが必ずあわい(、)、)に引きずり込まれるということも。避けては通れない。二人とも助かるという見込みは無いといわれた。

「……必ず、二人で故郷へ帰るんです。神さまの意志といえど、神さまも心変わりするかもしれません。だから、だから最初からそう思わないで。変えましょう。神さまの意志を」

震えていながらも、声ははっきりしていた。雪良は静かに手をおろし、飛揚から距離を取ってうつむいた。

飛揚は目の前の跳人をじっと見た。白く長い耳がべったりと垂れさがっていた。膝の上で握られた拳がわずかながら震えている。雪良の心の中で渦巻く恐怖の中に、確固とした意志が手に取るように分かる。

「鑑たくて鑑ているのではない……。鑑えてしまうのだ。お前が風を無意識に読んでしまうのと同じだ。……すまない。だが神の意志が変わるかどうかは、我等も分からん」

飛揚は視線を跳人の耳の先に移した。かさぶたはとっくにとれて無くなっていた。霊力の強い一族なだけあって、治癒力も高いのか。

鳳凰と龍が二人を見つめていた。

翌朝、雪良は目を覚ますと八方睨みの部屋ではなく、舎の部屋にいた。外はとっくに明るく、光の矢で頭の中を貫かれるようだった。はいつくばるようにして布団からでて、水甕から杓子でひとすくいの水を飲んだ。よく冷えた水は、渦巻く気分を爽快にさせた。

「きゅうう……」

かきん。こぎみのいい音に、白く長い耳がはねた。雑踏の音の向こうに、やっとうの声も聞こえた。修練場からだ。顔を洗って着物を着替え、外へ出た。既に人影は無く、皆修練場だと分かった。護身用の刀は持たず、ふらりと音のする方へ向かった。

松林の中では心地よい松の香りで目が覚め、修練場に入ると木や鉄が打ち鳴らされる音で眠気が吹っ飛んだ。正直どこかへ逃げたかったほどだ。背後から再び飛揚に呼ばれて、落ち着きを取り戻した。

「ああ。おはようございます……」

振り返ると、さっぱりとした飛揚が立っていた。二日酔いをしていない様子で、凜と立っていた。

(酒が強いんだな)

からん。足元に何か投げ出された。部屋においてきたはずの二振りの刀だった。頭がまだ鉛のように重くて支えていられるのもしんどいのに、重いこれを、さらに抜けというのか。

「す、すみません。これをどこから……？」

「ああ、お前、部屋に忘れてきただろう？ 武器を持たずして修練場に来るやつがいるか」

さらり、と当然のように飛揚は言った。すでに飛揚は愛用の薙刀を構えている。

「ちょ、ちょっとお相手の前に、この修練場の風景を見てもいいですか？ 隼人の礼儀をまだ知らないもので……」

よく逃げたぞ自分。回転が最低速の中、怒りを抑えてよく思いついた。雪良は内心自分をほめた。

「酒が弱いのだな、跳人は。あれしきで二日酔いとは。子供でも飲めるものなのに。さあ、遠慮と礼儀は無用。ただ打ち合う相手に真剣に取り組めばそれが礼儀となる。さあ、いざ！」

(まだわかんないのか！ こんな状況じゃあ、その礼儀が果たされないっていうのが)

雪良はありったけの罵倒を心の中で呟いた。しゅしゅ刀を手を取った。

瞬間。飛揚がすさまじい一撃を横ざまに放ってきた。白く長い耳がぴん、とまっすぐはねて気配を察知した。

「うああ！」

あと一步遅ければ、右わき腹をかつさばかれていた。しかし雪良はひょい、と大きく左へ飛びのいて飛揚の一撃を退けた。それでも大きく転んでしまった。十分間合いはとったはずなのに、なぜ……。恐怖が心を浸した。

次々と飛揚の鋼鉄の一撃が雪良に襲いかかる。すぐさま起き上がって、軽々とよけた。技があまりに早く繰り出されるため、よけるので精いっぱいだった。逃げるようにしても、ぴったりと飛揚がついてくる。間合いは縮まる一方だ。

ずん。雪良の眼前に薙刀がまっすぐ突きこまれた。

瞬間、雪良の心の中の恐怖が爆発した。

跳ねた。大きく後方へのいたかと思えば、瞬間には雪良が宙を高く舞って二振りの刀を振り下ろしていた。氷の刃がいくつも地上にいる飛揚に向かって降り注ぐ。松林がさあ、と冷気にふかれた。地面にはうっすらと霜が降りていた。

「跳人(うさぎ)が宙にいたら不利だろうが」

冷静に相手を観察して、飛揚は薙刀を上空に向かってぶん、と振り上げた。灼熱のカマイタチが空中の雪良に向かって襲いかかる。

雪良の方は、刀を横にひとふりし、一瞬にして四重の氷の結界を眼前に展開させた。圧縮されて鋭くなった風が氷に当たって、その部分を溶かす。雪良が着地した一瞬、殺意に満ちた紅い瞳を飛揚に向けた。

飛揚は悟った。今目の前にいるのは「雪良」ではないということ。刀を手を取る前はあんなに嫌そうにしていたのに、今は明らかに純粋な殺意を持っている。身にまとっている殺気は尋常ではない。それがあの者の心中で毒づいたことに由来していないということは明らかだった。つまり、雪良の体を借りて何かが刀を振り下ろしている。

「……っ？」

飛揚はとっさに大きく体をねじり、遠心力で薙刀を振るった。強烈な空間断裂の風刃(ふうじん)を、氷の結界に向けて放った。

じっ。見えぬ鋭利な刃は再び氷の壁を溶かしただけだった。

「……！」

表情一つ変えずに跳人は氷の結界を盾にしなが、隼人に向かって突進した。隼人も灼熱の気を纏って突進した。一瞬で間合いが縮まる。

音もなくすれ違う。まるで、お互いが透明になって互いの体をすり抜けるように。

風が揺れる。氷の結界は一瞬で気化し、跳人の白い額に真っ赤な血が伝う。隼人は身にまとう熱風が両断され、膝をついた。

「でてこられるか？ 雪良」

隼人の低い声に反応して、雪良の顔がゆっくりとそちらに向けられた。伏し目がちの澄んだ紅い瞳が飛揚を見つめた。小首をかしげるしぐさには、愛嬌の中にそれとは相反する殺意があった。

二本の刀を受けた瞬間、鑑て確信した。雪良を動かしていたものは、雪良自身望まぬ存在だった。雪良を守る、出てきてほしくはない、もう一人の「跳人」。「守る」という目的を果たすために純粋な殺意に満ちた存在。しかしその存在による守護は、出したら最後。本人にも止められない。それを止めよ、と心の中の「雪良」が叫んでいた。だから斬った。「雪良」が出てこられるように。

白く長い耳が力なく垂れ、瞳がぱたんと閉じた。小さな体が地面に倒れこんだ。

飛揚は薙刀を杖にして倒れている跳人まで歩み寄り、見下ろした。気を失っていた。

「……すまなかったな」

白い額をなでた。血はすでに乾いていた。跳人の治癒力はやはり目を瞞るものがあつた。

ごふっ、と飛揚が咳きこんだ。赤黒い液体をペッと吐きだした。急所が外れていたからよかったものの、そうでなければ一瞬で死に至っていた。「雪良」が押さえてくれていたおかげだ。

空は淡い青で、陽は温かかった。



神楽～夏～

(著：東 かおり)

ゆっくり目を開くと、天井には色鮮やかに描かれた鳳凰と龍が見下ろしていた。鋭い視線があよりのときの薙刀と重なって、逃げたいという衝動と恐怖が雪良の全身を駆け巡る。しかし体は鉛のように重く、顔をそむけることしかできなかった。

「起きたか？」

絵をさえぎるようにして、心配そうな顔をした飛揚がぐうっと覗き込んできた。

「あ、はい……」

眼を見ただけで容体が分かるのか、飛揚の顔が一瞬ゆるむ。しかし、すぐさま険しい顔に戻った。

「雪良、起きたところすまんがすぐに着替えろ。俺と一緒に来てもらう。先方が頑として動かないのだ」

そうやって飛揚は後ろを振り返ると、給仕のものが雪良の着替えを持って彼と交代して前に進んだ。手間取ったが、給仕に手伝ってもらってきちんと着ることができた。隼人の中でも一番小さいものらしいが、雪良にとってはだぶだぶだった。

部屋を出ると、外の明るさに目がくらむ。縁側の柱に寄りかかって、雪良と同じ服装をした飛揚が待っていた。

「用意はできたな？ 行くぞ。操人が大広間で待っている」

「操人が？ どうしてここまで来るんでしょう？ 私達がむしろ向かうはずなのに」

「ああ。だが朝一番で操人がこちらの領地へ入り、砦の前へ来た。隼人と跳人に会いに来たといってた」

雪良は胸がざわつくのを覚えた。隼人と跳人が操人の地へ向かうよう言ってきた本人が、なぜここへ来るのかが分からない。雪良のみならず、飛揚やせわしなく廊下を歩く隼人一族も同じように感じているようだった。

飛揚が入ったところは、青畳の広がる大空間だった。その部屋の廊下側にそってずらりと並んで座るのは、隼人一族のなかでも位の高そうな者たちだった。居住まいを正した彼らの放つ威厳で肌がぴりぴりする。

視線を奥へやると、大広間の奥にちゃんと座布団に座る白い着物を着た小柄な童子が正座していた。その両脇を同じ服装をした若い男女が守っている。童子の視線がこちらをとらえた。

「御就寝中のところ申し訳ない。急なことだったので、こちらが先に来てしまった」

鈴を転がすような声で童子がしゃべった。独特の話し方でいくらか聞きづらいところがあったが、通る声で話した。

「聞き取りづらかるうに、もっと近うよれ。わらわも大声を出しとうない」

目の前の童子は不思議だった。隼人のように黒い髪は肩のあたりで切りそろえられ、日差しで

きらきらと光っている。肌は跳人のそれと同じくらい白く、つるりと滑らかだった。薄茶色の瞳が細めるところは、どこか子供っぽさを残しながら、やけに老成じみた印象を感じる。これが操人という存在なのか。

「どうかしたかの。座らないのか？」

飛揚は既に操人の前に座っていた。いつのまに座っていたのだろう。はっと我にかえった雪良は慌てて飛揚の隣に正座した。飛揚が横眼でこちらを見た気がして、あえて心の中で促してくれなかったことへの不満を呟いた。

「近いうちに『神世』と『幽世』の重なる時があるのは知っておろう。今回は、ここ隼人の領土内じゃ」

まるで子供がはしゃぐようだった。それに対し、隼人の長たちは身を固くした。それを気にせず童子は話を続ける。

「それまで時間はあるが、『慰みの儀』までにやらねばならぬことは多いでの。ましてや儀式に関わるものは、特にのう」

半ば得意げに、そしてこれから起こることを楽しみにしているような口調に対し、族長が座ったまま体を屈めた。

「ならば、今日はその代表が顔合わせをすればよいですな」

童子はにっと笑って首を横に振った。

「それだけだと思ったかの、隼人の長よ。京(みさと)は今優れた武官を欲しておる。操人は神聖な深い霧はかくすことができても刃をかわすことはできぬ。ゆえ、操人を脅かす存在から守るものとして、そなたら隼人を求めておるのだ。良い返事を待っておるでの」

場が凍った。武官とか、操人の護衛だとか言っておきながら、事実それは人質でしかない。なぜなら異郷の地では産土の守護を得ることができず、力に制約がかかるからだ。隼人がなぜ操人の到来に対して緊張しているのか、わかった気がした。

「そのご要望についてはあまりに重大なことゆえ、無礼のないように慎重な審議を重ねております。もうしばらく、もうしばらくお待ちください」

童子は少し不満そうな顔をした。視線を飛揚と雪良に向けてにっと笑った。

「そう簡単には部下を引き渡さんのだな。まあ良い、追々話をすればよかろう。今は『神世』と『幽世』の重なる際の『慰みの儀』が最優先じゃ」

『御神渡』のことを操人は『慰みの儀』というらしい。舐めるような童子の視線に雪良はぞくっとした。首筋がそわそわして落ち着かない。薄い唇から発せられる言葉には毒があるように思うが、彼らは耳がしびれていないのだろうか。それを聞いている隼人たちは表情一つ変わっていない。

「それならば、隼人はこの飛揚が」

「は、跳人はこの雪良が」

うんうんと満足そうに童子は頷く。

「そして操人はわらわじあの」

「あ、あの、あなたのお名前は？」

雪良はおどおどと聞いた。童子はものおじすることなくさりりと言った。

「名は魂を表わす。大勢いるここでは伝えられん。『慰みの儀』に関わるものだけに教えたいのでの」

その言葉が発せられた瞬間、族長がさっと立ち上がった。

「それならば我等はこれにて失礼いたしましょう。しかし操人さま、お忘れなさるな。あなたさまは今、隼の巣の中にいる一羽の小鳥であるということ」

族長が広間を出たあと、続々と隼人たちは退出していった。最後の隼人が広間から出ると、障子が全て閉ざされた。その瞬間あたりはしん、と水を打ったように静かになった。流れる空気ですえもその場で息をひそめているようで、雪良は障子を開きたい衝動にかられた。童子の脇に従える男女はさっきから一寸たりとも動いていない。まるで雪を固めて作った人形のように、無表情で冷たい空気を纏っているようだった。

「橋(はし)姫(ひめ)、猿田彦(さるたひこ)。境界を」

童子が脇の男女に静かに命令した。すると二人は息吹を吹き込まれたように揖(ゆう)をして立ち上がり、橋姫とよばれた女は袂から鈴を、猿田彦と呼ばれた男は腰から小刀を抜いて障子の前に立った。男が障子の棧に沿って刃をあて、女がそのあとに続いてしゃらしゃらと鈴の音を振りかけた。

「え？」

小刀を溝から放し、鈴の音が止まった瞬間、雪良は不思議な感覚に包まれた。まるであのあ(、)わ(、)い(、)に取り込まれた時と同じような、どこにでもない空間に放り込まれたようだった。息はできるが、どこまでも透明なふわふわとした感じ。

「ほう。さすが空間を扱うことに長けた跳人よのう」

童子が感心したように言った。

「境界の番人である橋姫と猿田彦に、この広間を別の世界として画させた。向こうから障子を開けられぬし、音も聞こえぬ。用心を重ねて悪いことはあるまいの」

橋姫と猿田彦が再び童子の脇に戻って正座すると、童子は足を崩して胡坐になった。脇息に身をゆだねてゆったりと構える姿に、小さな体なのにどこか威厳を感じる。隼人の長を早々に退出させるほどのことはある。

「さあ、これで話せる。わらわの名はあや。そなたらには『慰みの儀』を執り行う上で知ってほしいからの」

あやは口元を歪めて飛揚と雪良を見た。薄茶の瞳が光を受けて、さらに薄くなったように思えた。

「あの、操人さま？ 私がこの隼人の地に赴いたのは、操人の地に隼人を連れてくるよう言われたからなのですが、なぜ、ここにいらっしゃったのですか」

名を伝えられたのに、それを安易に口に出してはいけないような気がした。

「雲居の者は短気での。隼人の地は行ったことが無いし、早く赴いてどんなところか見ておきたかったのじゃ。ただ道を間違えて二日ほど遅れたがのう」

「操人の上層の方はそれを御存じなのですか？」

飛揚が聞いた。あやの目が虚空から飛揚へ移る。しばらく見つめたのち、あやは目を細めた。「雲居とは天上をさす。雲のごとく、自由であるのがこの身分のいいところでの」

飛揚は眉をひそめた。すっと立ち上がったかと思えば、銀色に光る小刀を腰から抜いて童子の首元に走らせた。

きん。

飛揚とあやの間に猿田彦の小刀と橋姫の鈴が刃を受け止めていた。あやは相変わらずにここにことしている。飛揚は眉をひそめて刃に力をこめた。

「道を間違えて二日ほど遅れただと？ 操人なら星を読んで正確にたどりつけるはずだ。本当は我等の領地内をめぐるってあらいを見つけ出そうとしたのではないのか？ それに、この砦の中で別世界をつくりだすなど、我等になにをするもりだ」

きりり、と刃が押し返される。刃を握る手に力がこもって震えているが、体はそのまま動かない。刃だけがゆっくりと後退する。あやはゆっくりと立ち上がって微笑を浮かべながら、細い腕を伸ばして飛揚の額にそっと触れた。

「力をぶつけることしかできぬ若造に、なにが分かるというのじゃ？」

どん。飛揚の体は宙を舞い、遙か後方に投げ飛ばされた。

「飛揚さん！」

雪良が飛揚のもとへ走り寄ろうとした時、あやに腕を掴まれた。振り払おうとしても、その細腕から逃れられなかった。ひんやりと冷たい指が額に触れて額をなぞる。頭の中の記憶や感情が指先に集まって、何か描こうとしていた。

「え？」

「ほお、そなたの魂は面白いのう。『白』とは」

「白？」

雪良はおうむ返しにそうつぶやいた瞬間、あやの瞳が恐怖で見開かれて表情が凍った。

「雪良、心を閉じろ！」

飛揚の怒声と同時に、あやが後方に吹っ飛んだ。あやは橋姫に受け止められ、畳に体を打ち付けることはなかった。

何が起こったのか雪良自身さっぱりわからない。雪良はくるりと振り返って飛揚のもとへ走り寄ろうと一歩踏み出す。

ずりり。視線が急に低くなったかと思うと足を引っ掛けて前へつんのめり、体全体に激痛が走った。足元を見ると、その畳がいつの間にか腐っていた。腕を立てて起き上がろうとすると、その畳が若草色から枯色になってぶすぶすと煙を立てた。

「ひ、ひう……どうして？」

思わず手を引っ込めた。自分の手が足が、触れたものの命を枯らしてしまう。その腕にじわっといやな感覚がした。

閉じ込められた空間の中で、空気の流れがほおをなでた。投げ飛ばされた衝撃をものともせず、飛揚は風のごとく雪良を横切り、ぱっとあやに再びつかみかかろうとするも、再び猿田彦に阻止された。素手で二人とも取り組み、一歩たりともお互いに引かない。

「よせ、猿田彦」

あやの鈴を転がすような声が命令すると、猿田彦はぱっと手を放して飛揚の力を受け流した。飛揚は一気にあやのもとへ詰め寄り襟をつかんだ。

「雪良に何をした？ 答えろ！」

あやは表情一つ変えずにぼつりとつぶやいた。

「そなたと同じように、魂を知ろうとしたまでじゃ。あの跳人はとても面白い。予想以上の力を持っておるのう」

あやの右腕が、指先から肘まで肌が黒っぽい紫色になっていた。好奇心に輝いた目で雪良を見た。

「跳人の中には、内に『死』をもつ者が多からずいるとは聞いていたが、まことだったのじゃな。ほんの触れただけで命を枯らすとは」

「黙れ！」

飛揚はさらに力を込めて襟をつかんだ。あやの足が宙に浮いた。

「やめてください、飛揚さん。手を放してください」

再び畳に手をついてもその部分は腐らなかった。雪良はゆっくり立ち上がって、心の中で渦巻くものを押さえ込みながら静かにあやに言った。

「あなたは、操人のもっともなやり方で私たちを知ろうとしたのでしょうか。ですが、それは時に予想外なことを引き起こすきっかけにもなりうるのです」

飛揚が雪良の言葉にはっとして襟の力を緩めた。先日のこととも飛揚が隼人のもっともなやり方で雪良を知ろうとした。だが、それは結局雪良を傷つけることになってしまった。雪良がゆっくり歩み寄って飛揚の手から襟を引き離し、深く赤い瞳であやを見て言った。

「操人も言葉を話せるでしょう？ 私達は操人のように文字をもちませんが、言葉ならあります。だから、言葉でできることは言葉で交わす方がいいと思うのです」

「……そうなのかの。それはすまなかったのう。悪気があったわけではないのじゃ。操人の得意とすることをすこしばかり披露したまでのことなのじゃ」

あやはゆっくりと襟を正し、変色した腕をさすった。

「だが、跳人の雪良よ。そなたの内に秘められた魂は想像以上に力が強いが、そなたを守る大きな存在でもあるようじゃ。よく覚えておくがよかろうの」

襟をつかまれて宙吊りにされていたにもかかわらず、明るく笑うあやとは裏腹に、飛揚は鋭く睨みつけた。

「まあそう怖い顔をするでない。これで操人がどんな存在か、よく分かったであろうの。さて、『慰みの儀』について話をつづけようではないか」

飛揚は釈然としなかった。

「『慰みの儀』では各部族の力を他の部族と共有することになるだろうて。それも踏まえてのことだったのじゃ。さて、隼人と跳人は何を共有させるのかのう」



話し合いが終わり、画した術も解いてもらい、雪良と飛揚は廊下へ出た。もう既に日が傾きかけていて、白っぽい光も、だんだんと茜色になって周囲を染めていく。夕方の冷たい風が廊下を通りすぎた。

雪良の頭の中では、紫色に染められた腕をさすりながらあやの言っていたことが渦巻いていた。しかし最初に腕をつかまれた時、何を言っていたのか思い出せなかった。心の奥底で重く鎖(とぎ)されていたものに触れてしまうような気がして、無理をすれば、鎖が引きちぎられて、留めていた何か恐ろしいものが出てくるようで怖かった。知りたくもあったが、知らない方がいいこともある。

「雪良、今日のことは気にするなとは言わん。だが腕のことは操人の自業自得というものだろう。だからあいつの言っていたことを鵜呑みにするな。誰が何と言おうと、お前は神の言葉を聴く跳人だ」

飛揚がぼん、と雪良の肩をやさしくたたいて追い越した。隼人はずるい。心が鑑えてしまうのだから。部屋につくと、雪良は慣れぬ隼人の着物を引きずったまま、深い眠りに落ちていった。



翌朝、操人は日の出を待たずに出立したらしく、ただ隼人と跳人にはよろしく、また近々合うことになるうが、と言づてを残していた。

飛揚は鬱々とする雪良をみかねて、飛揚の兄の翼鷲とともに野原へ出かけることにした。飛揚は隼を、翼鷲は鷹を腕にとめて、馬で出かけた。雪良は途中飛揚の馬に乗っていたが、自分の足で野を駆けたくなり、ひょいっと飛揚の腕から滑りおりて走った。頬をなでる風、目を瞞ってしまうほど透明な空。そして足に触れる若草の柔らかさ。乾いた空気の中で、体が透明になってゆくようだ。晴れた雪原や吹雪の急斜面を駆け抜けることはあっても、晴れ晴れとした野原を走るのは生まれて初めてだった。

「ほら、早く早く！」

うれしさのあまり、思わず飛揚と翼鷲を忘れてしまいそうだった。立ち止まってさっと振り向くと、後方をずっと走っていた飛揚が隣に並んだ。風を解すものなら、この瞬間を馬上でも同じように感じているはずだ。朝露をきらきらとまとった若草の生い茂る中を、毎朝こうやって思いっきり走れるなんてなんて羨ましい。故郷の凍てつく空気が内心恨めしい。

「馬に勝る走りとは、さすが健脚の跳人ですな」

後から追いついた翼鷲が感心して、雪良をみた。片腕で馬を普通の早さで走らせることの方が、雪良にとってみれば神業だと思ったが、ほかの部族に褒められると照れてしまう。

飛揚は、隼をとめている腕を高く振った。翼鷲も腕を大きく振って、鷲を天高く飛ばせる。大きな翼をはためかせて飛び立つ音に、雪良はびっくりした。

「これから何をしますか？」

「あいつらにもたまには野を翔けさせませんと。ずっと鳥籠の中では体もなまってしまいますから」

口笛で呼べば戻ってくるというので、翼鷲は近くの境界線を偵察しに行った。飛揚は馬から下りて、上空を舞う隼を眺めた。しばらくして、ぴい、っと口笛を吹くと、隼がひらりと飛揚の片腕に優雅にとまった。褐色の翼は太陽の光を受けて濡れたように輝いている。隼の背中を丁寧になで、また大きく腕を振って天高く飛ばせた。

「飛揚さん。私に武術を教えてください。私の知っていることだけでは到底足りません。だからお願いします。この刀を使いこなせるくらいになりたいのです」

突然何を言い出したかというような表情で飛揚はこちらを見つめた。

「この土地に来る前も、来てからも、自分の身を守るには戦うことも必要なのだということがよくわかりました。これまでは結界の使い手として戦うことから逃げてきました。守ればそれでよかったし、静かに神の声を聴けば十分でした。しかし故郷から一歩でればそんなこと言ってもらえない。その上自分のこともよくわかっていなくて、己が自分自身を殺しかねない。だからお願いします。武術にたけた隼人であるあなたから、教えていただけませんか」

あのとき飛揚を傷つけてしまった雪良の内にいる存在が、再び他人である操人を傷つけてしまった。意識を支配される麻痺した感覚がまだ残っている。それが耐えられなかった。自分ではない自分が他人を傷つけるくらいなら、自分を犠牲にしたほうがいい。この覚悟はゆるがない。

「よかろう。背中を抜く」

飛揚は雪良の心中を鑑たのか、ぶっきらぼうにそう言うなり、柄の短い槍を手にして間合いを取った。雪良はびよん、と飛揚から遠ざかって間合いを取り、背中を抜いて軽く構えた。本当の「護身」としてこの刀を振るいたかった。もう武器を見ても逃げたいと思うことはない。銀色の刃が太陽の光を受けて輝いている。

「行きます！」

雪良の方から一歩踏み込んだ。

「……！」

ばっし。カマイタチがどこからともなく二人を襲う。刀を振り下ろそうとした矢先、飛揚と雪良は後ろへ下がってそれを退けた。

カマイタイチの放たれた元を二人は見つめた。そこにはゆったりとした白い着物を着た猿田彦が、複雑に組んだ手を前に差し出していた。

「發(はつ)」

手から今度は矢じりを出現させて放ってきた。無数に散らばってよけようにもよけられない。

とっさに雪良が二振りの刀を交差させて氷の結界を展開した。容赦なく矢じりが結界に突き刺さり、消えることはない。むしろどんどん突き進んで結界を貫通する勢いだ。雪良は二重、三重に結界を重ねて後ずさりながら、背後の飛揚にたずねた。

「どうしてあのひとがこんなところに？ 帰ったのではないのですか？」

飛揚は襲ってくる存在をじっと見た。降り注ぐ矢じりでおぼろげに見える程度だが、向こうの意志を鑑るのに支障はない。しかし、それでも鑑えるのは堅固に築きあげられた壁だけだった。

「……鑑えん。心を閉ざす法を心得ているようだ」

そんな。背中に冷や汗が流れる。

「ちょっと、試してみますね。飛揚さん、結界を少し小さくします。気を付けてください」

雪良はそう言って、素早く交差した刀を解いて地面に突き立てた。一瞬で結界の壁を一回り小さくさせ、ぱっと若草が散った瞬間、野ネズミが草の分け目を進むようにカマイタチが走る。

ざざざ。氷の籠が猿田彦を包んだ。矢じりの攻撃はぴったりとおさまり、半球状の結界が日の光で白く光っている。

「結界は自分を守るだけじゃないんですよ」

半ば得意げに雪良はそう言いながら、氷の籠に向かって歩いていった。

猿田彦は棒立ちになって両手を脇にぴったりとつけていた。真っ黒い瞳は飛揚のように深く、見ているこちらが引き込まれそうだった。だが、それでいて拒んでいるようにも見えた。

「息吹が感じられんな」

飛揚の言っていることがわかる気がした。

猿田彦は無言のままうつむいて地面を見つめた。草を踏む音が二人の背後からして、振り向くと橋姫が立っていた。手には鈴が握られている。闇色の瞳には、砦で感じられなかった生命となにより威厳をたたえている。凜然と立つ姿にどこか神々しさを感じるのは、その瞳が強い意志を持っているようだからだろうか。猿田彦には一瞥もくれずに、深く礼をした。

「主には飛揚殿と雪良殿に会いに行ってお来いといわれましたが、攻撃せよとは言われていません。ご無礼をお許してください」

「いったい何の用だ」

飛揚が槍の先を橋姫に向けて聞いた。橋姫は表情を変えずに淡々と語る。

「『道』はその犠牲を以て行進すること。旅人はなんであれ、その犠牲を伴いながら進まねば迷ってしまいます。迷うのは産土の神の力が薄れてゆくから。この橋姫と猿田彦は境界を守る番人です。番人が認めれば異郷の神が認めたことになり、迷わなくなります」

「何が望みだ」

飛揚が鋭い目で橋姫を睨みつける。しかし彼女は首を横に振った。

「なにも。ただ、あなた方に『道』を与えようとしただけです」

ふいに猿田彦が袂から何か出した。

「雪良さまに、これを」

猿田彦がゆっくりと、四角にたたまれた分厚い紙を雪良のほうへ差し出した。飛揚が身構える。何かあってもいいように、注意深く見守るなか、雪良は結界を一部だけ解いて、恐る恐る紙を受け取って開いた。そこには「白」という字が墨で書かれていた。

「これは？」

「されこうべ」

さらっと橋姫は言った。

「『白』という字は、されこうべを模したもののなのです。あなたの本性であるその文字を、主はあなたに持っていてほしいとおっしゃっていました。そしてそれが『道』を示すものであるとい



うことを憶えていてほしいと」

雪良の背筋がぴんと張ったのを感じた。

「死をその字ほど具現化しているものはありません。きっとあなたは道を間違えることはないでしょう。その意味がおわかりですね。あなたは当分産土の守護を得ることができなくなりませんが、それをもっていれば力を発揮することができます。『慰みの儀』で跳人の管弦をお遊びください。隼人の隼人舞を舞ってください。操人はそれに言霊をのせるでしょう。『五弦の弾』を聴けることを楽しみにしております」

背後の結界が陽炎のように融けて消えた。それと同時にいつの間にか橋姫と猿田彦が姿を消していた。音もなく、二人はどこかへ行ってしまった。

雪良は言葉に詰まった。心の奥底で何重にも鎖で巻き付けられたものを再び触れられた気がした。しかし今度は形にならないものが今心の中で形を与えられてさらに重くのしかかる。それは恐怖ではなく、生々しくべったりとしている。どっとそれが体に駆け巡って、目の前を通り過ぎてゆく。鎖された記憶が濁流となって雪良の中を満たす。

「ひ、飛揚さん」

声が上がった。目がうろうろしている。けれどこちらを見下ろす飛揚の目は漆黑で落ち着いていた。その瞳の中に、疑問と不安に巻かれた自身が見えた。

——自分が「白兔」だということ。時に拝まれ、時に恐れられ蔑まれた。その理由がこれまで『神が降りるときにふる雪を名に持っているから』といわれてきたが、実は死の色だということを知った。己の纏う色は死。『幽世』を具現化する存在だからこそうやって使者として送り込まれた——

飛揚はゆっくりまばたきし、しゃがんで雪良を見つめた。真っ赤に見開かれた瞳に、純粋な殺意を纏った存在が半分まで出かかっている。雪良の頭に手をぼん、と置いた。

「気にするな。操人の言っていることなど戯言にすぎん。生きているものに死があるのは当然のことだろうが。お前はたまたま選ばれただけだ。根拠など『御神渡』の時にでも聞いてみればいだろう。暴りたいなら暴れていいが、俺がいるときだけにしろ。周りに危害を与えるな」

飛揚は雪良の額に優しく手刀をあてて立ちあがった。

じんわりとその衝撃とともに飛揚の言葉が頭に広がってしみていく。ひきつった顔が柔らかくなってゆく。

「そろそろ砦へ戻るとするか。鷹が兄上のもとへ戻ったらしい」

ぴい、と口笛を吹いて、ゆっくりと風を翼にとらえて旋回しながら頭上まで戻ってきた隼を確認すると、飛揚は馬に乗って手を雪良に差し伸べる。しかし雪良はその手をとらずに、明るく笑ってこう言った。

「飛揚さん、競争しましょう！ どちらが速く砦の門にたどりつけるか」

大きく一歩踏み出す。後方で手綱が引かれて馬がいなくなるのが聞こえた。顔にあたる風に乗って、若草の香りが一層強く感じられる。

風光る初夏はどこまでも透明だった。

あとがき

新入生には鬼畜な続編を出してしまった東 かがりです。今回は慣れないことをしました。（分かる人には分かると思われ）飛揚以外の主要登場人物の性別はご想像のままに。本作品は起承転結の『承』の部分に当たるのですが、長編でこれ以降続いた試しが無い！（これも分かる人には分かると思われ）ちなみにやる気はあるのですよ。本当です。

校正していただいた方には感謝しきれないくらい感謝しています。ありがとうございました。

もう、おねえさん疲れたよ。

セキュリティ・ブランケット

(著：祐輝)

私の世界の中心は弟です。

それなのに私の世界では私が主人公です。何故なのだろうと考えるのは小学校でやめました。いくら考えても弟は私の世界において主人公にはなれないのです。恐らく、私の世界に私が存在する限り。

私は弟が大好きです。弟以上に好きになれる人なんてきつとこの先現れないでしょう。そう思っているけれど、さすがにそれを口に出すような真似はしません。小学校の間に十分に冷やかされた経験は、十年ほどたった今でも鮮明に思い出されます。ブラコン、気持ち悪い。男の子たちから浴びせられたからかいの言葉は、当時の私の心に冷たく刺さりました。

しかし年月を経て分かったこととして、私自身は決してブラコンではないということが挙げられます。ブラコンという言葉インターネットで検索してみたところ、ブラコンとは一般に男兄弟に対して性的な愛情を持つことだと記述されていました。幼い頃は弟への気持ちが性的なものなのか分かりませんでした。様々な経験を経て、これは単なる姉弟愛であることが分かったのです。いえ、単なる、というには多少度が過ぎていられるかもしれません。しかし度が過ぎていられるということを自覚できる程度には自分に距離をとれるようになりました。

性的な愛情ではない、と判断する材料は二つあります。まず一つに、私自身他に好きな人が出来たことがあるということです。学生時代には短い間しか続かなかったものの恋人がいたこともあります。お付き合いしていると言っても私は変わらず家族優先なため、申し訳なさにお別れさせていただいたのですが、きちんとした恋愛感情を経験しているために弟への気持ちがそれとは違っていると分かるのです。

もう一つは、弟に彼女が出来ても特別嫉妬するということがなかったということです。正確に言うならば、彼女であろうと友人であろうと、弟を家から連れ出す人には多少なりとも妬いていました。しかし「とりわけ彼女だから」という嫉妬はした覚えがありません。現在弟に彼女はいないようですが、一番最近いた彼女は特に我が家で遊ぶことが多かったことを覚えています。家から連れ出さないという点で私は彼女を快く思っていました。もちろん、何度か挨拶した中では彼女自身も可愛らしく印象の良い子でした。

現在ではブラコンの定義が広まった……というより使用へのハードルが低くなり、単に男兄弟のことが大好きであることを示す使われ方が多くなったようです。そのおかげで、私もブラコンという言葉にそれほど敏感になることがなくなりました。年齢を重ねたこともあるのですが、友達との話の中で弟を褒めたとしても煙たがられなくなったというのは私にとっては僥倖です

私の弟を紹介しましょう。名前は俊也といい、私より五つ年下です。背はそれほど高くはありませんが、顔はどちらかといえばかっこいい部類に入るでしょう。高校三年生ですが、身長のためかどことなく幼い雰囲気です。そこには多少姉としての鼻屑目が入っているかもしれませんが、私の友人も弟を見たときにそのようなことを言っていたので、全くの見間違いというわけではないと思います。

弟の良い所は外見だけではありません。運動神経はそれなりにあるようですし、学力は人並ですがそれもまた愛嬌でしょう。そして何より、人懐こい性格が弟の一番の魅力です。誰とでも仲良くなってしまうので、小さい頃は誘拐などされてしまうのではないかと心配していました。

そんな自慢の弟が、春から一人暮らしをするというのです。

「なんで？ あの大学なら家から通えるじゃない！ お父さんには言ったの？ お母さんは？」  
「父さんにも母さんにも言ったよ」

合格発表から一週間ほど経った休日、私の部屋で一緒にゲームをしていたときにその爆弾は落とされました。現実に関連するように、ゲームの中でも私の使っているキャラクターが爆弾を踏んで後方に大きく飛びましたが、構っている心の余地などありません。私の卒業した大学に弟が入るということを聞いて様々な理由から歓喜したというのに、こんな仕打ちがあるのでしょうか！

それまで集中していた手のひらサイズの携帯ゲーム機を放り出して、横にいる弟の方を向きました。

「シュンに一人暮らしなんて出来ないでしょう。料理もしないし、洗濯だって！ 二人とも反対しなかったの？」

「これまでしなかったからこそ、一人暮らしで経験しとくべきだって言ってた」

ていうか姉ちゃん真面目にプレイしてよ、という弟からの要望に応じてとりあえずゲーム機を持ち直しましたが、私の意識は弟の方に向いたままです。これまでそんな話は一切出てこなかったというのに、何故いきなり一人暮らしなんてしようと思ったのでしょうか。まさか、

「家にいるのが嫌なの……？」

弟は、うーんと唸ってからゆっくりと否定してくれました。私は少し安堵して、ならば何故家を出ようと思ったのかと理由を聞きました。

「別に大した理由じゃないよ。ただやっぱり、大学生になったら門限とか面倒だし。それに大学

に近い方がいろいろ便利だろ。姉ちゃんが大変そうだったの見てるから余計にさ」

「大変なんて、そんなこと……」

私は否定の言葉を口にしながらもだんだん声が小さくなりました。大変なことが一切なかった、とは残念ながら言い切れません。授業はもちろん、サークルなど様々な人付き合いがある中では、実家暮らしというものは大変不便なものです。私自身、一人暮らしであったなら、と思うことは何度もありました。しかし家族から、特に弟から離れなければならない辛さの方が一人暮らしの魅力より勝っていたのです。弟にはその躊躇がないのかと思うと、何とも言えない気持ちが喉元までせり上がってきました。

先にも言ったように、弟は人懐こい性格です。それゆえにこれまでも家から出ることは私より多かったですし、そのこともあって一人暮らしにはそれほど躊躇もないのでしょう。いざとなればいつでも会える距離であることも後押ししているのかもしれませんが。けれど、実家暮らしならばほぼ毎日会えるということを考えれば、当然ながら確実に会う時間は減ります。それにいつでも会える距離だからといっていつでも会えるとは限らないのです。いつでも会えると思っていればいるほど、普段わざわざ実家に帰ってくることはなくなるでしょう。

いろいろ考えていたら手元がおろそかになってしまっていたのか、私の使用していたキャラクターは画面の中でいつの間にか死んでいました。私が上の空であることに気付いたようで、弟はゲームを止めて電源を切ってしまいました。

「父さんも母さんも賛成してるし、もう決まったことなんだから。まあ、顔見せにちょくちょく帰ってくるよ」

弟は私を宥めるようにそう言って、部屋を出て行きました。手元のゲーム画面には通信エラーという文字が赤で表示されていて、私は泣きたいような怒りたいような気持ちで電源を落としました。

結局、弟の一人暮らしの準備は着々と進んでいきました。これから住む部屋も決まり、家具なども一式揃ってきています。私が一緒に住もうかという提案も軽く否定されてしまい、為す術がなかったというのが事実です。引っ越しまで後わずかという休日、親に頼まれ弟と一緒に食器類を買いに外出することになりました。家から車で二十分の大型ショッピングセンターは家族でも頻繁に行く場所ですが、二人で行くのは久しぶりです。大学に入ればこうして一緒に買い物に行くこともほとんどなくなるのだと考えると、胸の奥が締め付けられるようです。そのことを出来るだけ考えないようにして買い物を進めます。

あちこち寄り道しながらも、食器選びは思ったよりすぐに終わりました。しかしせっかく弟と二人で出掛けたというのにすぐに帰るというのも惜しい気がして、一休みしていこうとセンター内のフードコートに入りました。

「何が飲みたい？ 私買ってくるから、席取っておいて」

「じゃあコーラ。あそこらへんに座ってるから」

そういえば昔からコーラが好きだったなあ、と思いながら別れました。昔から変わらないからこそ、私の中の弟はいつまでも昔のままなのかもしれません。しかしそれはある意味当然のことでしょう。親が子供をいつまでも子供扱いするように、弟はいつまで経っても私より五つ下の弟なのです。

飲み物を買って弟の元に戻ろうとしましたが、弟はさっき言っていた場所にいません。並んでいる人は少しいたものの、それほど時間もかからずに会計まで済ませることが出来ました。この短い時間にいなくなるとはどういうことでしょうか。もう高校も卒業したのですから誘拐されたとは考えにくいですが、それなりに容姿も淡麗ですし、実際の年齢より幾分幼く見えるので、可能性がないとは言い切れません。こういう場合はまず店に館内放送をお願いして、それから、

「ごめん姉ちゃん、ちょっと買い忘れあったから買ってきた」

ああ、そんな心配はいらなかったようです。弟に声を掛けられて、息苦しかった胸のあたりがふっと軽くなりました。私だって本気で弟が誘拐されたなんて思っていませんでしたが、悪い想像ほど頭をよぎるとそのままその想像に囚われてしまうものです。

「本当に驚いたんだから、一言言ってよね」

「すぐ戻って来れると思って」

それから空いている席に座って他愛のないことを話しながら飲み物を飲みました。弟のコーラはやけに炭酸が強かったらしく、アイスコーヒーを飲んでいた私の方が早く飲み終わりました。手持無沙汰でカップを振っていたら、弟が先ほど買ってきた袋を私に差し出します。促されるままにその袋を開ければ、色違いのイヤホンが二つ入っていました。

「それ、好きな方姉ちゃんにあげる」

「え？」

どういふことなのかと問えば、弟は照れているのかぶっきらぼうに説明してくれました。

俺が一人暮らしするって言ってから、姉ちゃんけっこう寂しがってたじゃん。俺だってこれまで姉ちゃんには色々してもらってきて感謝してるんだよ。年離れてるからそんなに喧嘩らしい喧嘩もしなかったし、それにしてはよく構ってもらったなって。だから、なんかいい機会だし、記念みたいな。姉ちゃんイヤホンとか持ってなかっただろ？ 俺のもこの間壊れちゃったから丁度いいかなって。

弟が私の事をそんなにも考えてくれていたなんて！ その事実を知った歓喜が、私の中を一気に占領しました。もちろん世間一般の他の姉弟たちに比べて仲が良い方だとは思っていましたが、弟から実際に聞くということは破壊力が抜群です。私だけの一方通行ではなかったのだと知れ

たことは、イヤホンよりも最高のプレゼントとなりました。当然のことながらイヤホン自体も非常に嬉しいです。

「こっちの黄色い方もらおうかな.....ほんとにありがとう、大事にするね」

「うん。大事にするのもいいけど、ちゃんと使ってくれよな」

「分かってる。毎日使うよ」

弟は照れ臭そうにコーラを一気飲みして、帰ろう、と言いました。私はもらったイヤホンを大事にハンドバッグにしまってから立ち上がりました。

その日も私はイヤホンをつけたまま出掛けました。弟にももらったあの日以降、宣言通り私は毎日イヤホンを身に着けています。毎日というよりも、可能な限りいつも、と言った方が正しいかもしれません。その日は小学校からの友人が車を買ったと言うので一緒にドライブに行くことになりました。友人は大学から今まで一人暮らしをしており、まだこの辺りは走り慣れていないということでした。それならば、ということで私が駅まで歩き、そこで落ち合おうと約束していたのです。

私が駅に着くと、駐車場に止まっていた車がこちらへゆっくりと近付いてきました。運転席には見慣れた顔が乗っています。

「ごめんね、待たせちゃった？」

「私が不安だったから早く来ちゃっただけ。まだ約束の時間前だよ」

車の助手席に乗り込みながら挨拶を済ませます。昔から知っているというだけあって、密室に二人きりでもお互い気楽です。それでも最低限の礼儀としてイヤホンを外しました。それを横目で見ていたらしい友人は、苦笑いであんたも変わんないね、と言ってきました。

「前に話したでしょう、弟からももらった物だから大事にしたいって」

「それにしたってさあ」

だってそれ、壊れてるんでしょう。

イヤホンの先のプラグは、しばらく前から何にも接続されていません。使用しているとは言い難いですが、それでも毎日耳にはめています。以前から繰り返されている友人の言葉は聞かなかったことにして、私は別の話題に切り替えました。

終わり

キズ (著：灰白湯)

私がこんなことをするようになったのは、彼女と会ってからだった。

「こんばんは」

夜、私が訪れたそこはいつもと変わらない真っ白な部屋だった。

今はほとんど使われなくなった学校のプレハブ小屋、その一番奥。あかりに照らされた中は放棄されているというのに清潔で、埃もごみも見当たらない。窓際に白い大きなソファが一つあった。

そんな場所に、いつものように彼女はいた。

色素の抜けた白い髪、アンティークドールのようなひらひらの黒い服。そこから伸びる華奢な腕、脚。私よりも年上だが背は小さく、ソファにちょこんと腰掛けた彼女は人形という印象が強い。

「こんばんは」

可愛らしく微笑みを浮かべ、挨拶を返してくれた。

笑顔のまま私の手を取り、部屋の中へ誘う。

自分の腰掛けていたソファを譲り、私を座らせる。

そして、赤い柄のカッターナイフを私に差し出した。

「ありがとうございます」

受け取ると彼女は、

「すきなだけ」

と優しい声音で囁いた。

十

にぎりしめたり、指の間にはさんだり、玩具をもてあそぶ。そうやっているだけで、頬がどうしようもなく紅潮していく。体が重くなって、意識がぐらりと揺れた。どくん、と大きく脈打つ心臓が、まるで別の生き物のようだった。

赤い柄の合間に刃が見える。その銀色に誘われるように指がうごいてしまう。

ちきちきちき。

無機質な音と共に白銀の刃先が出てきた。

鋭く冷たい色に魅せられ、甘美とも畏怖ともしれない感情に、深い息をつく。冷たい汗が背筋を伝い、熱っぽい体がふるえる。呼吸が荒く、心臓の鼓動が速くなっていく。



このまま私はこの銀色の毒におかされるのだ。

制服の袖をまくる。白い肌色の皮膚が外気にさらされた。左の手首から少し下あたりに白刃をあてる。金属のひんやりとした感触が肌にしみわたる。

「……っ、あ……………っ！」

カッターを持つ手がふるえる。

渴いた口の中に唾液がたまっていく。

はやく、したい。

不意に、のぼせていく思考の中に幻聴が混じった。

『暗いよね』

それは昼間に言われたこと、私がいる前でクラスメイトが堂々と言ったこと。先程までの心地よさを台無しにしてしまうこえがひびく。私の邪魔をする。

うるさい。

そんなことない。私は暗くなんてない。私をおとしめて何になるの？　なんでそんな軽々しくけなすの？

私は————

ずきん、と不快な痛みが走った。

左腕を見ると、わずかに刃が肉にくいこんでいた。いたみだけがその痕にいやらしくじくり、とうずいている。

「だめだよ、あせっちゃ」

かまえていたカッターを取り上げられた。

顔を上げると彼女の顔が目の前にあった。小さな手が私の頬にゆっくりと当てられる。ほてった頬に冷たい感触。引き寄せられ、口許に吐息がかかる。そのままやわらかい唇に口を塞がれた。

微笑みながらカッターを返してくれた。

「もういちど。こんどはゆっくり、おちついて」

「は、い……」

言われたとおりに、思考を全て吐き出すように深く息をつく。痛みさえもわからなくなるほど深く意識を沈めていく。全身の力を抜いて、ゆっくりとカッターを押しあてる。

空っぽになった私。

そして、そのまま引いた。

「……！」

刃が皮膚の上を滑るように、裂いた。優しく、冷たい指が撫でたように、肉を裂いた。鮮やかな赤い線が刻まれた。

冷たさが残る傷から、じわりと綺麗な液体がにじみでる。小さな赤いガラス玉のような雫をつくりながら傷口からこぼれおちていく。同時に熱い痛みがゆっくりと神経をおかす。痛み、という静かな魔物が頭の中を喰い荒して、思考が苛まれる。傷が別の生き物のように脈動し、それを増長させていく。

そして、その中で冷たく心地よい感覚が少しずつ大きくなっていく。愛おしいものを撫でるように、血が腕を伝ってゆっくりと流れ出ていく感触。いやらしい手つきで、愛でられている感じ。

ああ、気持ちいい。この冷たさがたまらない。

生気の抜ける感覚からくる解放感。焼けつく赤い線の中で感じる、小さな冷たい癒し。なにもかもすべて忘れてしまえるこの毒に、私は溺れていった。

## 十

私は嫌われ者だ。

今日も私は苦しめられた。私がいるのにクラス中でされる悪意の会話に。言い返せる勇気なんて持っていなかった。陰口よりもたちが悪かった。毎日、毎日、あびせられる言葉の毒。

そんな私を彼女は救ってくれたのだ。

「あの、ありがとうございます」

「わたしはおしえてあげただけなんだけどな」

彼女はくすくす、と無邪気な笑みを見せる。私の横に座り、キズあとを眺めている。とろけるような甘い自慰。

彼女が私に教えてくれたいけないあそび。

そのおかげで私は今もこうして、クラス中の魔手から苛まれても平気なのだ。

「でも、ほんとに助かってるんです」

「そっか」

「あ、あの……これからも、つきあってくれますか？」

「うん、きみがつらいときはいつでもおしえてあげるから」

ほてった体にはまだ冷めない快感がうずいていた。

案山子 2012年夏号

<http://p.booklog.jp/book/52858>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

sincot9 外衛眞希 秋月夢人 Puney Loran Seapon  
一城有里 水谷 七分の六 木材 東かおり 祐輝 灰白湯

製本版 発行：2012年 6月 15日

電子書籍版 発行：2012年 6月 29日

感想はこちらへ

<http://p.booklog.jp/book/52858>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52858>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ